

福井県埋蔵文化財調査報告 第131集

# 上 舌 遺 跡

— 県営経営体育成基盤整備事業（圃場）下舌・上黒谷2期地区に伴う調査 —

2 0 1 2

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

## 序 文

本書は、県営経営体育成基盤整備事業（圃場）下舌・上黒谷2期地区に伴い、大野市下舌において平成19・20年度に発掘調査を実施した上舌遺跡の発掘調査の成果をとりまとめたものです。

上舌遺跡は、清滝川と赤根川が形成した扇状地の先端に位置する集落遺跡です。今回の調査では、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての竪穴住居3棟や、掘立柱建物4棟を検出し、竪穴住居からは比較的まとまった遺物を得ることができました。大野市域においては弥生・古墳時代の集落遺跡の調査例が少ないため、上舌遺跡で当該期の集落の一端を確認した意義は小さくないと言えるでしょう。

本書が今後地域の歴史研究に寄与するとともに、各方面で多くの方がたに活用される一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書の刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様がたから多大なご支援とご協力を賜りましたことに、厚くお礼申し上げます。

平成24年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

所 長 佐 藤 圭

## 例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが県営経営体育成基盤整備事業（圃場）下舌・上黒谷2期地区に伴い、平成19・20年度に実施した上舌遺跡（福井県大野市下舌所在）の発掘調査報告書である。
- 2 上舌遺跡の調査は、奥越農林総合事務所の依頼を受けて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、宮崎認、水谷圭吾が担当した。
- 3 発掘調査は、平成19年（2007）11月1日から平成20年（2008）6月30日まで実施した。出土遺物の整理作業は、平成21年（2009）4月1日から平成24年（2012）3月5日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 4 本書の編集は坪田聡子があたり、田中祐二、宮崎、坪田が分担して執筆した。執筆の分担は以下の通りである。  
宮崎認 第1・2章、第3章（遺構、金属器）、第4章（遺構、金属器）、第5章2  
田中祐二 第3章（縄文土器、石器・石製品）  
坪田聡子 第3章（弥生時代以降の土器、陶磁器）、第4章（弥生時代以降の土器、陶磁器）、第5章1
- 5 上舌遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬がある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 6 検出遺構、金属器の図化・図版作成は宮崎が、縄文土器および石器・石製品の図化・図版作成は京藤洋と田中が、弥生時代以降の土器・陶磁器の図化・図版作成は坪田が行った。また、検出遺構の写真撮影は宮崎が、出土遺物の写真撮影は坪田が行った。
- 7 本書に掲載した地形図および遺構図は、株式会社イビソクに委託して作成したものを一部改変して使用した。上空からの写真は、航空測量時に上記の委託業者が撮影したものである。
- 8 遺物実測図と写真図版などの遺物番号は符号する。写真の縮尺は不同である。
- 9 本書における水平レベルの表示は、海拔高（m）を示し、方位はすべて座標北を用いた。また、X・Y座標値は国土平面直角座標第Ⅵ系（日本測地系）に基づく。
- 10 第1表は福井県遺跡地図遺跡地名表をもとに作成したが、種別・時代については最新の調査成果に合わせて変更した。
- 11 色については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を基準とする。
- 12 土器実測図の薄いスクリーントーンは赤彩を示す。また、石器実測図において、実線で示した範囲は製作・使用に伴う敲打痕・つぶれを、破線で示した範囲は使用に伴う磨耗・磨痕・研磨痕をあらわす。
- 13 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 14 本書の作成にあたり、縄文土器について網谷克彦氏（敦賀短期大学）、石器石材について梅田美由紀氏（福井市自然史博物館）からそれぞれご教示頂いた。
- 15 発掘調査には、地元の方がたの参加・ご協力を得た。また、遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があたった。

## 目 次

第1章	調査の経緯	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過	1
第2章	遺跡の地理的・歴史的環境	3
第1節	地理的環境	3
第2節	歴史的環境	4
第3章	本調査区の遺構と遺物	7
第1節	遺跡の概要	7
第2節	遺構と遺構出土遺物	9
第3節	包含層出土遺物	25
第4章	工事立会の遺構と遺物	35
第1節	遺構と遺構出土遺物	35
第2節	包含層出土遺物	37
第5章	まとめ	43

## 写真図版目次

図版第1	遺跡 (1) 調査区北半部全景	(2) 調査区南半部全景
図版第2	遺跡 (1) 調査区北半部全景	(2) 調査区南半部全景
図版第3	遺跡 (1) 東拡張区全景	(2) 西拡張区全景
図版第4	遺構 (1) S I 1	(2) S I 1 遺物出土状況
図版第5	遺構 (1) S I 2	(2) S I 2 遺物出土状況
図版第6	遺構 (1) S I 3	(2) S B 1・S B 2
図版第7	遺構 (1) S B 4	(2) S B 5
図版第8	遺構 (1) S P 24 遺物出土状況	(2) S K 6 半截状況
図版第9	遺物 遺構出土土器	
図版第10	遺物 遺構出土土器	
図版第11	遺物 (1) 遺構出土土器	(2) 包含層出土土器
図版第12	遺物 包含層出土土器	
図版第13	遺物 (1) 打製石斧	(2) 打製石斧
	(3) 打製石斧	(4) その他の石器
図版第14	遺物 (1) 金属器	(2) 立会地区出土土器



## 挿 図 目 次

第1図	発掘調査範囲および 工事立会範囲位置図 ……………	2	第16図	S B 4 実測図 ……………	20
第2図	大野・勝山盆地の地形模式図 ……………	3	第17図	S B 5 実測図 ……………	21
第3図	周辺の遺跡分布図 ……………	5	第18図	掘立柱建物柱穴出土遺物実測図 ……	21
第4図	遺構配置図 ……………	8	第19図	土坑・柱穴実測図 ……………	23
第5図	S I 1 実測図および 遺物出土状況図 ……………	9	第20図	土坑・柱穴出土遺物実測図 ……………	24
第6図	S I 1 出土遺物実測図 ……………	10	第21図	包含層出土遺物実測図 1 ……………	25
第7図	S I 2 実測図 ……………	11	第22図	包含層出土遺物実測図 2 ……………	26
第8図	S I 2 遺物出土状況図 ……………	12	第23図	包含層出土遺物実測図 3 ……………	28
第9図	S I 2 出土遺物実測図 1 ……………	14	第24図	包含層出土遺物実測図 4 ……………	29
第10図	S I 2 出土遺物実測図 2 ……………	15	第25図	包含層出土遺物実測図 5 ……………	30
第11図	S I 2 出土遺物実測図 3 ……………	16	第26図	包含層出土遺物実測図 6 ……………	30
第12図	S I 3 実測図 ……………	17	第27図	包含層出土遺物実測図 7 ……………	32
第13図	S I 3 出土遺物実測図 ……………	17	第28図	包含層出土遺物実測図 8 ……………	33
第14図	S B 1・2 実測図 ……………	18	第29図	包含層出土遺物実測図 9 ……………	34
第15図	S B 3 実測図 ……………	19	第30図	立会地区遺構実測図 ……………	35
			第31図	立会地区遺構出土遺物実測図 ……	36
			第32図	立会地区包含層出土遺物実測図 ……	37

## 表 目 次

第1表	遺跡名一覧表 ……………	5
第2表	縄文土器観察表 ……………	38
第3表	弥生土器・土師器観察表 ……………	38
第4表	須恵器観察表 ……………	41
第5表	土師質土器観察表 ……………	41
第6表	陶磁器観察表 ……………	41
第7表	石器・石製品観察表 ……………	42
第8表	金属器観察表 ……………	42

## 第1章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯

経営体育成基盤整備事業は、国が平成15年度に採択した方針に基づき、圃場の大区画化、汎用化、農業用排水施設および農道などの整備により、営農の省力化を図り、企業的な営農の展開を目指すこと、また、将来の農業生産を担う効率的で安定的な経営体の育成を一体的に行うことを目的として、順次行われてきた。福井県においても、順次事業が進められ、平成19年度以降、上舌遺跡が存在する下舌・上黒谷地区でも経営体育成整備基盤事業が進められることになった。

この事業には、現在の圃場を再整理し大区画化する工事と、農業用用水の円滑な供給を目的に新たに貯水槽とポンプ場を設置して地下に埋設されたパイプライン給水を行う工事が含まれていた。工事計画範囲の大半は、平成4年度刊行の『福井県遺跡地図』に記載されている上舌遺跡の範囲に含まれていた。上舌遺跡については周知されていたものの、分布調査によって確認された遺物散布地であって、過去調査されたことはなく実態は不明であった。このため、工事に先立ち試掘調査を行う必要があった。

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、埋文センター）と福井県文化課、事業主体である奥越農林総合事務所の3者による協議の結果、平成18年11月13日から22日にかけて試掘調査が行われることになった。試掘調査の結果、試掘坑のほぼすべてで遺構や遺物が確認され、工事対象面積の内51,000㎡もの広大な範囲で遺跡が良好に遺存しており、本調査が必要であることが確認された（第1図）。これを受けて、3者による再協議が行われた結果、圃場整備に関しては工法を変更し、掘削深度を浅くして遺跡の保護層を設定し、本調査を回避することで合意がなされた。しかしながら、貯水槽とポンプ場に関しては遺跡の破壊を免れないため、埋文センターで本調査が行われることとなった。調査対象面積は1,400㎡である。また、パイプライン設置に関しては、工事立会で対応する方針が決定された。

発掘調査は、平成19年11月1日から平成20年6月30日まで2年度にわたり行った。平成19年度に南半部800㎡、平成20年度に残る600㎡と分割しているが、これは周辺の圃場整備の工程との調整のためである。平成20年度の調査中にパイプラインと貯水槽の接続工事部分が掘削幅2mを超えるものと判明し、急遽本調査範囲に加えられることになった。このため、最終的な本調査面積は1,440㎡となった。

### 第2節 調査の経過

発掘調査は平成19年11月1日から開始した。まず、重機を用いて表土掘削を行った。この段階で、1,400㎡の範囲の表土を撤去し、調査範囲全体に包含層が残存していることを確認した。その後、平成19年度分800㎡の包含層掘削を11月末に終了した。平成20年1～2月の降雪期は調査を中断したが、3月末までに遺構掘削を終了した。平成19年度分の航空測量は平成20年5月1日に行った。

平成20年4月からは平成20年度分600㎡の包含層掘削を開始した。6月からは遺構の掘削を開始した。6月中旬に急遽拡張区の調査を開始し、6月24日に平成20年度分640㎡の航空測量を行った。翌25日に器材の撤収を行い、調査を終了した。

工事立会については、平成20年7月から平成21年3月まで工事の進捗に合わせて行った。工事立会区間についても非常に多くの遺構が確認でき、遺跡範囲内には良好に遺構・遺物が残存していることが判明した。工事立会の総面積は972㎡である。



第1図 発掘調査範囲および工事立会範囲位置図（縮尺 1/2,000）

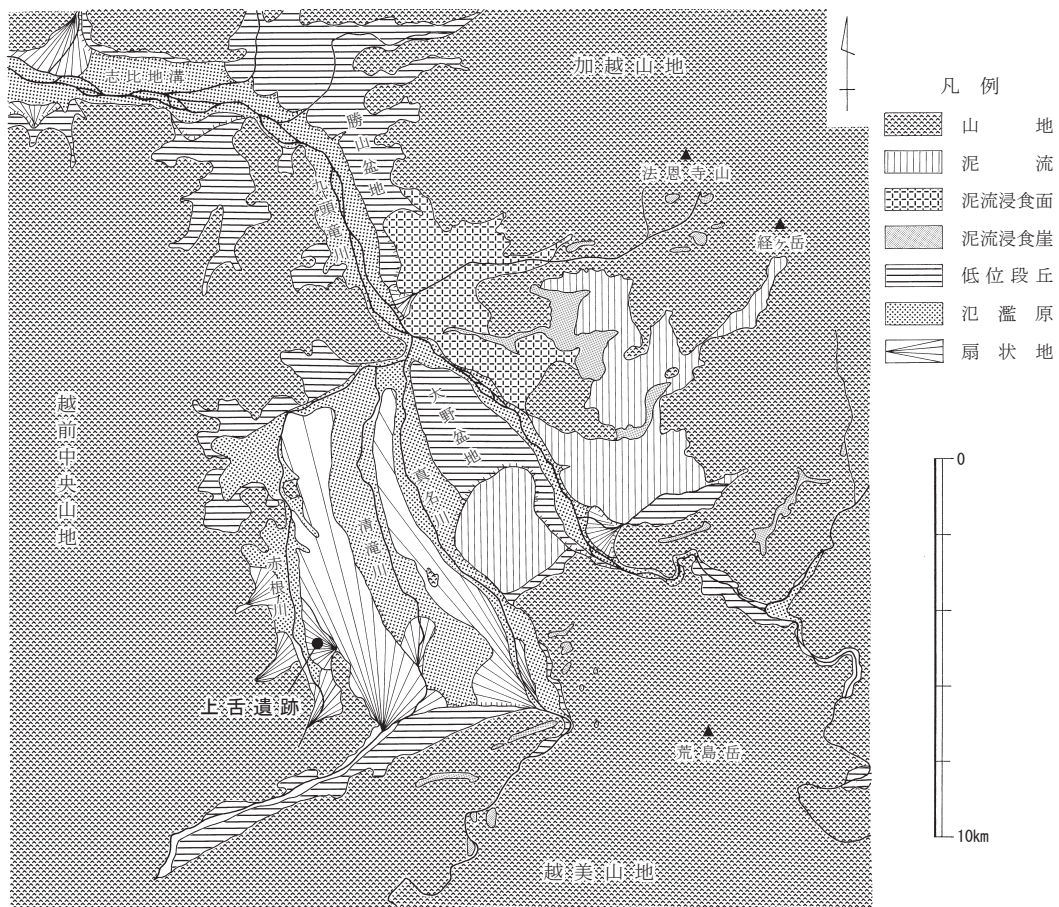


## 第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

上舌遺跡が所在する大野市は、本州の中央部にある福井県の東部に位置する。大野市は、周囲を加越・越美・越前中央の各山地に囲まれた東西13km、南北10kmの平地をもつ大野盆地を中心としている(第2図)。その大野盆地は、陥没断層性の盆地で、その形状は勝山市下荒井付近を北の頂点とする五角形になっている。東部から中央部にかけては広範囲にわたって火山による堆積物におおわれている。盆地を流れる河川としては東端を九頭竜川が北西方へ、中央部を真名川と清滝川が、そして西端の山麓を赤根川がいずれも北方に流れている。盆地北端の東大月付近で清滝川が赤根川を合わせて真名川に注ぎ、約700m東へ進んだ土布子付近で真名川が九頭竜川へと合流して、勝山盆地へ流出している。盆地中央を流れる真名川・清滝川は大規模な扇状地を形成し、その末端では伏流水による豊富な湧水がみられ「清水」と呼ばれている。九頭竜川もかつては扇状地を形成していたと思われるが、経ヶ岳が噴火した際に流出した泥流により、その扇状地形を失っている。現在九頭竜川は、泥流原を切断し、その両側に2段の段丘を形成している。また、経ヶ岳より流出した泥流は、高尾山によって堰き止められ、盆地北東に高原状の地形を形成している。

上舌遺跡は、この大野盆地の南西部に所在する。遺跡は、南と西を銀杏峰を最高峰とする山地、東を丘陵に囲まれた、清滝川と赤根川が形成した扇状地の先端に位置する。



第2図 大野・勝山盆地の地形模式図(縮尺 1/200,000)

## 第2節 歴史的環境

### 1 周辺の遺跡

大野市南西部では、清滝川や赤根川が形成した扇状地上や赤根川流域に突出する丘陵上に、集落遺跡や古墳群、中世城館などの遺跡が確認されている（第3図）。ここでは、発掘調査が行われた遺跡を中心に時代順に概略をまとめ、上舌遺跡周辺の歴史的環境について述べることにする。

#### 縄文時代

縄文時代の遺跡としては、右近次郎西川遺跡（5）、右近次郎遺跡（6）、下舌遺跡（17）、下黒谷遺跡（18）がある。

最も古い時期の遺物としては下舌遺跡（17）で、排水路掘削工事時に、縄文時代前期末葉の土器が出土している。右近次郎遺跡（6）では、1974年の調査時に縄文時代中期・後期の住居13棟をはじめとする複数の遺構や遺物が確認されている。下黒谷遺跡（18）では、1993年の圃場整備時に発掘調査が行われ、縄文時代中期の住居2棟や貯蔵穴2基などが検出されている。いずれの遺跡も扇状地上に位置している。右近次郎西川遺跡（5）では旧河道から縄文時代晩期末の土器群が多く出土している。

#### 弥生時代

発掘調査が行われている遺跡としては、右近次郎西川遺跡（5）や下黒谷遺跡（18）がある。

右近次郎西川遺跡（5）では、1998年から1999年にかけて発掘調査が行われた。弥生時代中期後半から後期末の土器が出土しているが、注目されるのは後期後半段階の玉作工房が検出されていることである。この玉作工房からは、4,500点をこえる緑色凝灰岩の管玉関連遺物とともに水晶原石1点、ガラス小玉4点も確認されている。下黒谷遺跡（18）では、弥生時代中期の土器棺墓1基、後期の方形周溝墓状遺構1基が検出された。また、包含層からは完形の銅鏃1点が出土している。

#### 古墳時代

大野市南西部では古墳が調査された例は存在しない。上舌遺跡（1）の周辺で確認されている主な古墳群としては、下舌三ツ塚古墳群（15）や御城山古墳群（22）がある。

下舌三ツ塚古墳群（15）は上舌遺跡の北東500mに位置する。円墳3基で構成されている。古墳時代後期に属する可能性が高い。

また、御城山古墳群（22）は上舌遺跡（1）のすぐ東隣にある丘陵上に存在し、円墳1基、方墳または墳丘墓37基で構成されている。弥生時代後期末から古墳時代にかけての墳墓群と考えられ、この古墳群に関しては、上舌遺跡の集落造営集団が造墓集団である可能性が高い。

#### 奈良・平安時代

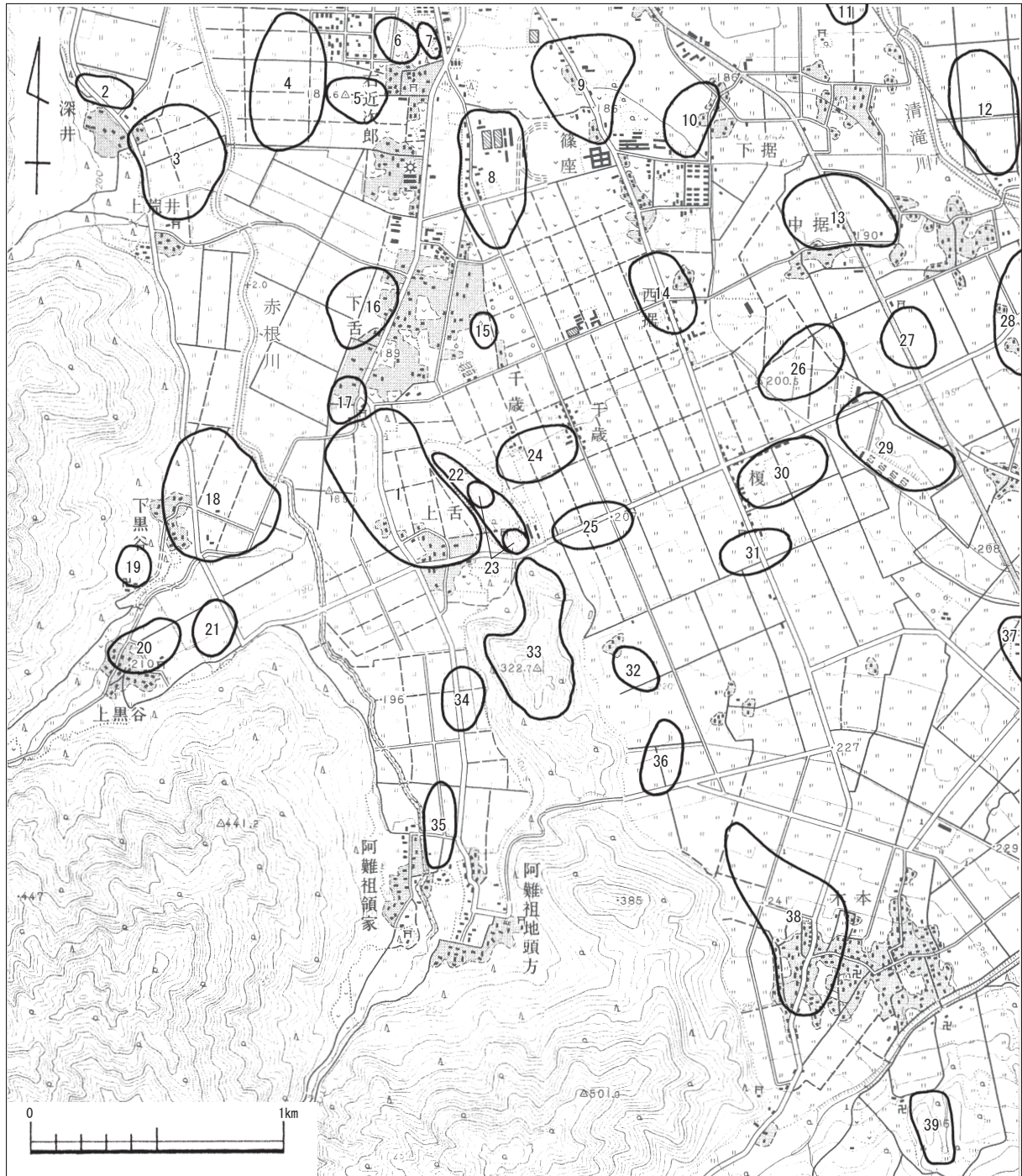
律令期の調査事例も存在しない。関連する遺跡としては、右近次郎西川遺跡（5）と下黒谷経塚（19）がある。

右近次郎西川遺跡（5）では7世紀代の須恵器が出土している。これに伴う遺構も存在するはずであるが、判然としない。また、下黒谷遺跡（18）西方の山腹には、下黒谷経塚（19）があり、保元年間（1156～）の銘を有する経筒と和鏡、火打鎌が出土している。

#### 中世

中世の調査事例としては、下黒谷遺跡（18）がある。下黒谷遺跡（18）では、14世紀～16世紀の土器、陶磁器、石製品が出土しており、これに伴う遺構としては、掘立柱建物、井戸、溝等が検出された。また、上舌遺跡東隣の御城山古墳群（22）上には、通称茶臼山城と呼称される山城城跡（23）が確認されている。





第3図 周辺の遺跡分布図 (縮尺 1/25,000)

第1表 遺跡名一覧表 (番号は第3図に対応)

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	上舌遺跡	散布地	弥生・古墳	14	西据遺跡	散布地		27	中据遺跡	散布地	弥生～平安
2	深井江尻遺跡	散布地	弥生・古墳	15	下舌三ツ塚古墳群	古墳	古墳	28	下郷遺跡	散布地	中世
3	深井春日前遺跡	散布地	弥生・古墳	16	下舌荒井遺跡	散布地		29	中据江添遺跡	散布地	
4	右近次郎桜町遺跡	散布地		17	下舌遺跡	散布地	縄文	30	榎遺跡	散布地	縄文～古墳・平安
5	右近次郎西川遺跡	集落跡	弥生・古墳・中世	18	下黒谷遺跡	集落跡	縄文～中世	31	榎観音堂遺跡	散布地	縄文
6	右近次郎遺跡	集落跡	縄文・弥生・中世	19	下黒谷経塚	経塚	平安	32	阿難祖地頭方平田遺跡	散布地	縄文・弥生
7	春日野遺跡	散布地	奈良～中世	20	上黒谷大門遺跡	散布地		33	茶白山城跡	城跡	中世
8	南春日野遺跡	散布地		21	上黒谷重馬遺跡	散布地		34	阿難祖地頭藪田遺跡	散布地	
9	大桜遺跡	散布地		22	御城山古墳群	古墳	古墳	35	阿難祖領家岸ノ下遺跡	散布地	縄文
10	下据新堂野遺跡	散布地		23	山城城跡	城跡	中世	36	阿難祖地頭方柴桑遺跡	散布地	
11	下据遺跡	散布地		24	千歳遺跡	散布地	弥生～平安	37	据遺跡	散布地	縄文
12	猪島塚田遺跡	散布地		25	千歳南田遺跡	散布地	弥生	38	木本大塚遺跡	散布地	
13	仲据西川遺跡	散布地		26	中据嶋林遺跡	散布地		39	春日山城跡	城跡	中世・近世

## 2 文献史にみる小山地区

律令期には、上舌遺跡を含む小山郷は大山郷として成立しており、長岡京木簡に延暦九年（790）の年号とともに大山郷が確認できる。

上舌遺跡の位置する現在の大野市下舌・上舌地区が、文献史料に確実にその名を確認できるのは院政期の長承二年（1133）のことである。当時、大野市南部一帯は、藤原成通の私領であった。この私領の広大さについて醍醐寺が語った文書が残っている。その中に「小山郷内舌村」が確認されている。もともと、大治二年（1127）に永真という僧が、藤原成通に私領を寄進したことがはじまりであり、それ以前に小山郷ひいては舌村が成立していた可能性がきわめて高い。

藤原成通は、その後私領を安楽寿院に寄進し、鳥羽院政期以降、上舌遺跡を含む舌村の地域は、安楽寿院領小山荘として経営されていた。嘉暦三年（1328）の六波羅下知状に引く地頭代の和与状の存在から、14世紀前半にはいわゆる下地中分が実行されており、荘園は衰退していと推定できる。

南北朝の動乱期以降には、北朝に属する斯波氏が上舌遺跡の東隣の丘陵に茶臼山城を構築することが明らかになっている。

### 参考文献

福井県 1993 『福井県史通史編 1 原始・古代』

福井県 1994 『福井県史通史編 2 中世』

青木隆佳編 1997 『福井県埋蔵文化財調査報告第37集 尾永見遺跡Ⅱー県営低コスト化水田農業大区画圃場整備事業に伴う調査ー』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

青木隆佳編 1998 『福井県埋蔵文化財調査報告第40集 下黒谷遺跡ー県営低コスト化水田農業大区画圃場整備事業に伴う調査ー』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

青木隆佳編 2002 『福井県埋蔵文化財調査報告第58集 右近次郎西川遺跡ー右近次郎地区担い手育成基盤整備事業に伴う調査ー』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

## 第3章 本調査区の遺構と遺物

今回の調査の結果、本調査区内において、竪穴住居（S I）3棟、掘立柱建物（S B）5棟をはじめとして、溝（S D）、土坑（S K）、その他多数のピット（S P）など複数の遺構が検出できた。本章では本調査区内の遺構・遺物の概要をまとめた後、各遺構と遺構出土遺物、ついで表土や包含層から出土した遺物について報告を行うことにする。

### 第1節 遺跡の概要

#### 1 基本層序

調査区内は、東から西へと緩やかに傾斜する扇状地地形を利用して、大まかに中央で段境をなす水田や畑地として利用されていた。基本層序としては、現在の耕作土下に、圃場整備以前の耕作土と考えられる灰褐色土の遺物包含層（1層）、さらに下層に暗褐色土の遺物包含層（2層）が堆積し、その下層で黄褐色土の遺構面が確認できた。1層は調査区全体に15～20cmの厚さで均等に堆積していた。2層は、調査区の北半部で50～80cmの厚みがあるが、南半部では15～30cmと不均衡な状態であった。ただし、遺物は南半部の出土量が圧倒的に多いことが判明している。

#### 2 遺構の概要

本調査区内全体の遺構配置を示したものが第4図である。遺構の分布としては、調査区北端は遺構密度が薄く、中央から南に遺構が集中する。

竪穴住居はS I 3を北限として、調査区中央より南側に展開している様子が窺われる。本調査区より南や南西の工事立会範囲においても竪穴住居が確認できるため、上舌遺跡の本来の住居密集地は調査区より南にあるものと推定できる。

掘立柱建物については、S B 5が最も北に離れて位置し、他の建物群とは一線を画している。これ以外のS B 1～4については、竪穴住居群の分布範囲と同一の分布範囲に納まっている。各遺構の報告で述べることにするが、この差は時期差によるものであると考える。

溝S D 1は、各遺構と切り合いがあり、遺構構築の前後関係を判断する鍵となる。また、調査区内からは無数のピットが検出できた。柱穴も多く含まれていたが、建物プランを復元できるものはきわめて少なかった。

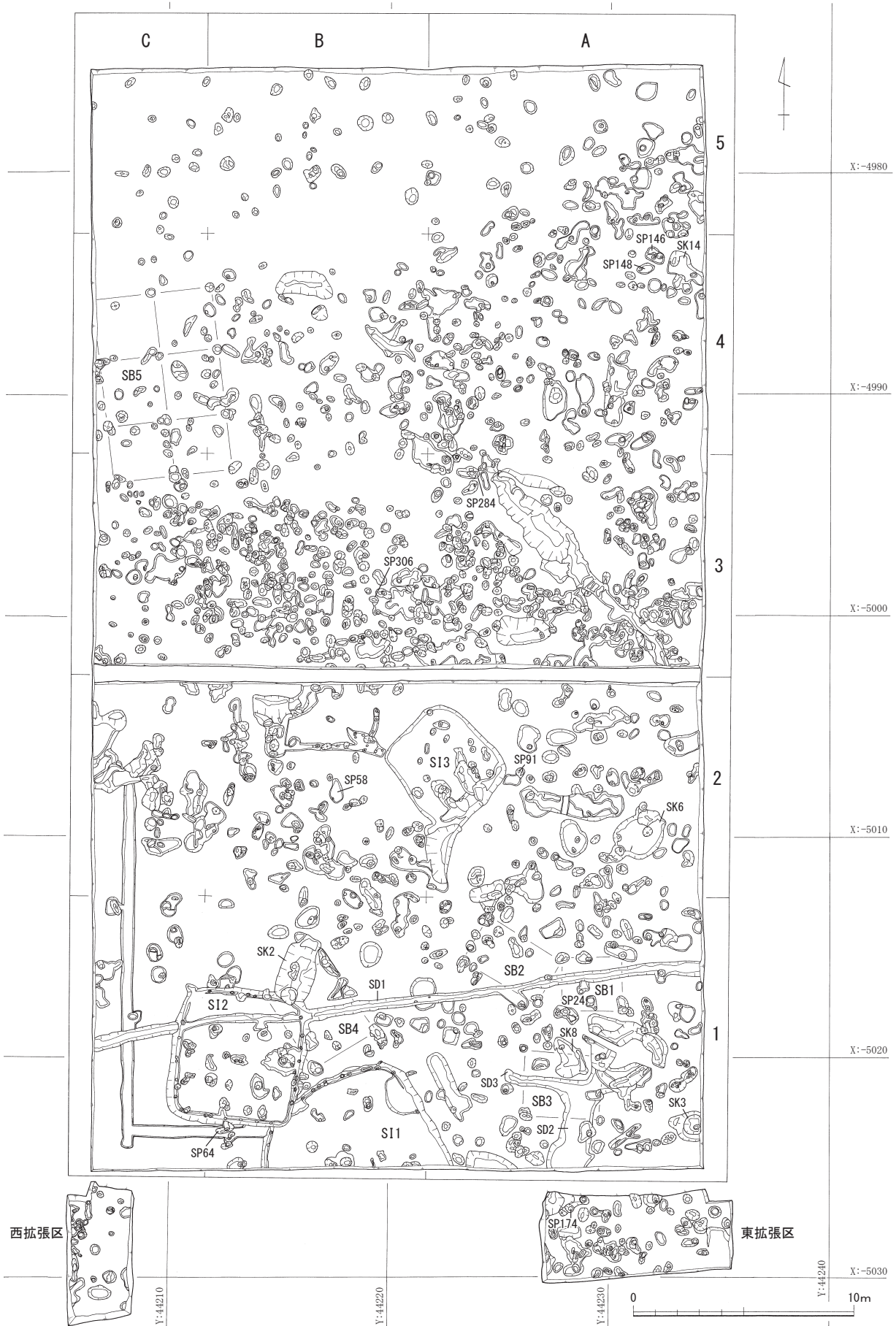
#### 3 遺物の概要

遺物については、2層からの出土が最も多いが、2層中にも縄文時代から13世紀の中世遺物までが含まれており、純粹に遺跡の主体となる弥生時代後期末～古墳時代前期までの包含層ということとはできなかった。出土傾向も、土器・石器・金属器の各種遺物が南半部で集中して出土しているが、時期による偏在はあまり確認できない。なお、木製品は出土していない。

土器で最も出土量が多いものは、古墳時代初頭～前期の土師器であり、以下、後期末を主体とする弥生土器、各種縄文土器、中世の土師質土器・陶磁器がこれに続く。

金属器が包含層や遺構内から出土しているが、これは上舌遺跡が立地している地質が、きわめて水を透過しやすく保水性が低いことに関係しているものと推定できる。本調査で出土した金属器は、大野・勝山盆地を中心とする奥越地域における該当期の金属器普及の実態を示す好資料である。



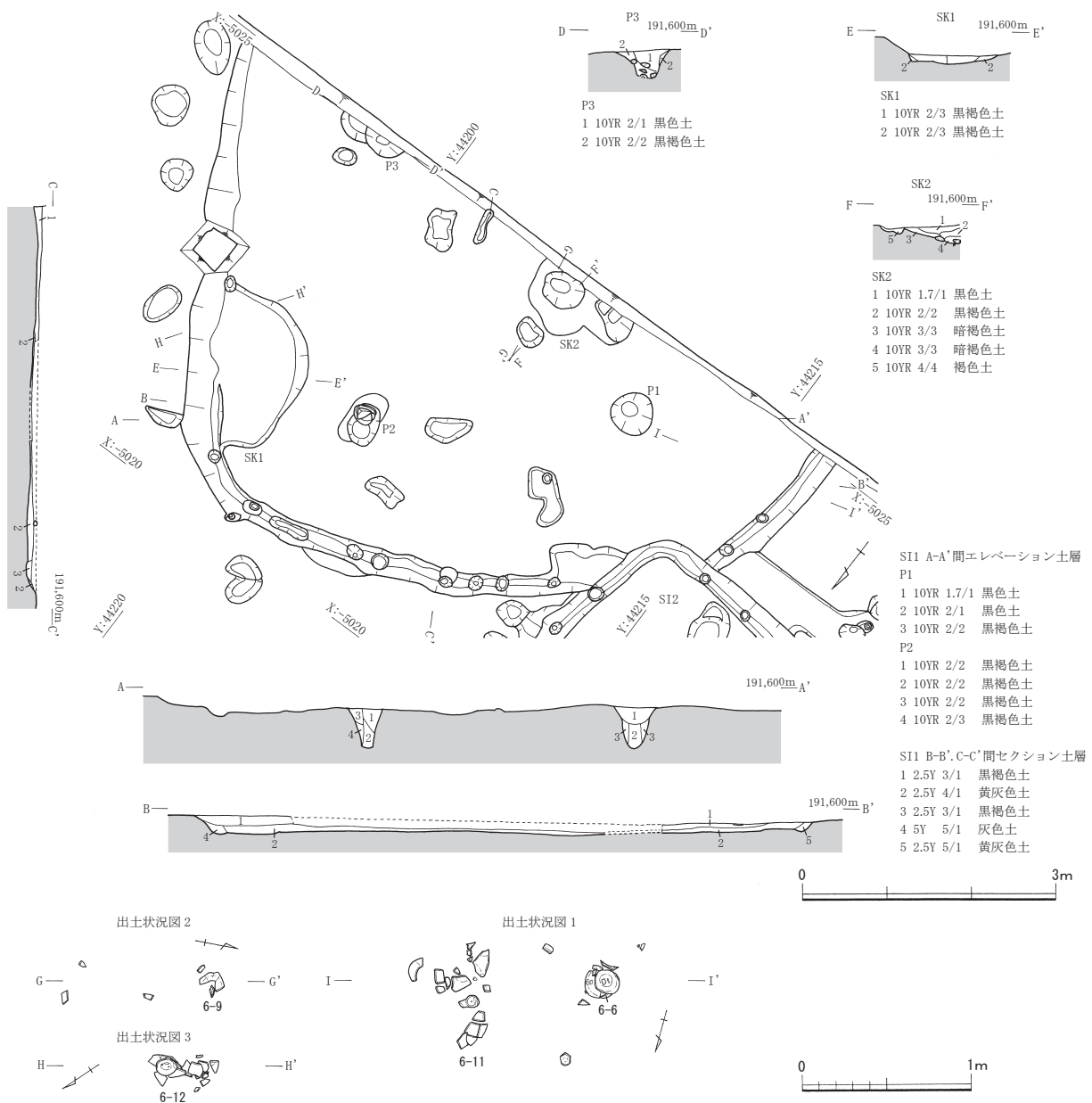


## 第2節 遺構と遺構出土遺物

## 1 竪穴住居

## S I 1 (図版第4・9、第5・6図)

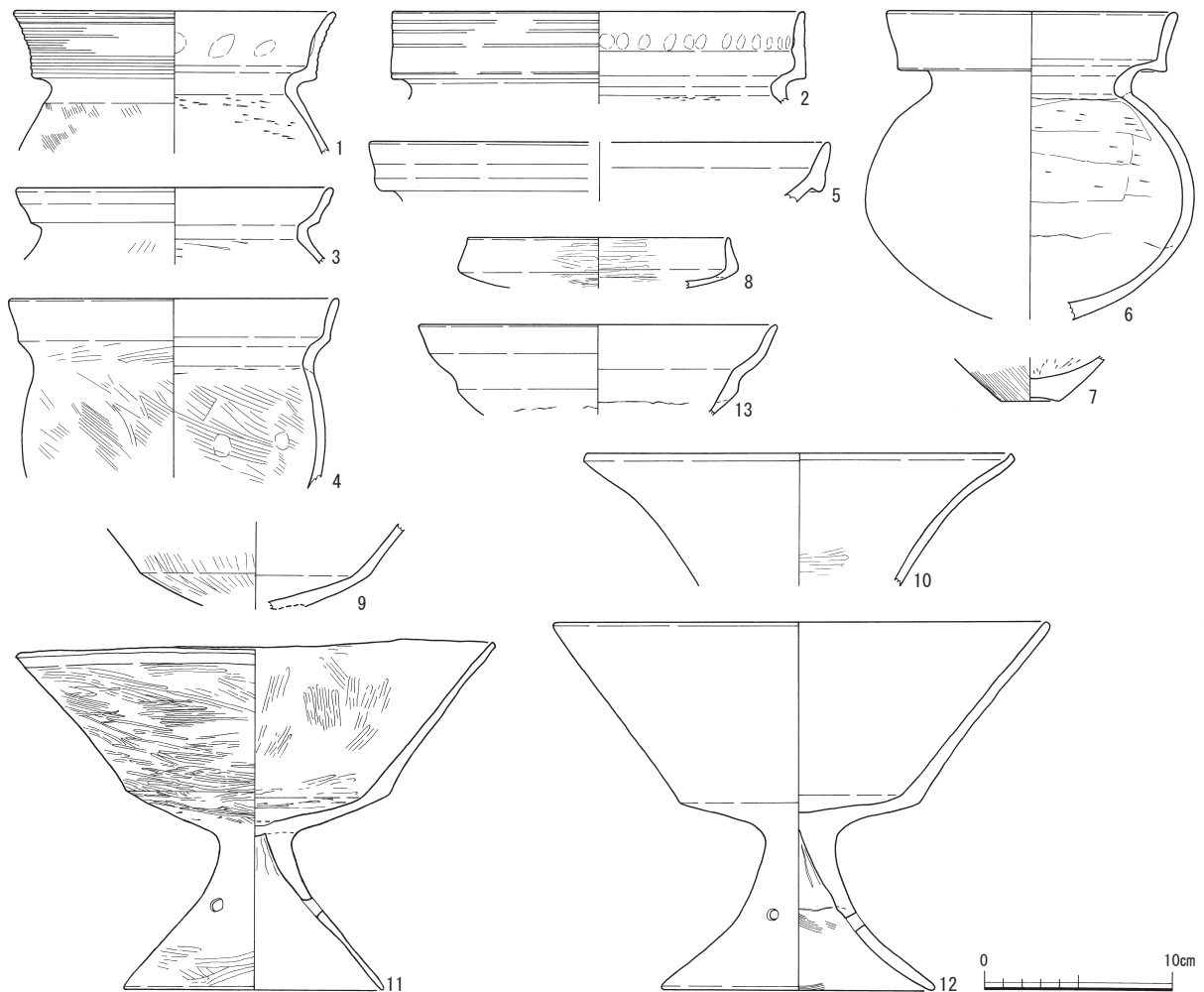
**遺構** 調査区の南端で約半分が検出できた。S I 1は北西角がS I 2によって切られており、S I 2に先行して構築されている。検出範囲での規模は、東西7.4m、南北4.4mを測る。平面形は隅丸方形を呈している。北側壁際では、非常に浅い壁溝を確認することができた。壁溝内には杭状の小ピットが確認できる。P 1～3は支柱穴で床面より0.5m程度掘り込まれている。柱間距離は3.2mである。床面にはSK 1・2の2基の土坑が確認できた。しかし、これらの土坑が炉として使用された痕跡は確認できなかった。また、貼床は確認できなかった。S I 1では、覆土中からの土器の出土はあまり多くないが、出土状況図のように、土器は個体が識別できる大振りの破片でまとまって出土している。



第5図 S I 1実測図（縮尺 1/80）および遺物出土状況図（縮尺 1/40） 遺物の番号は第6図に対応

**遺物** SK1で甕（3）を確認した他は、覆土中からの出土である（第6図）。甕（1～5）、壺（6）、底部（7）、高坏（8～12）、鉢（13）がみられる。

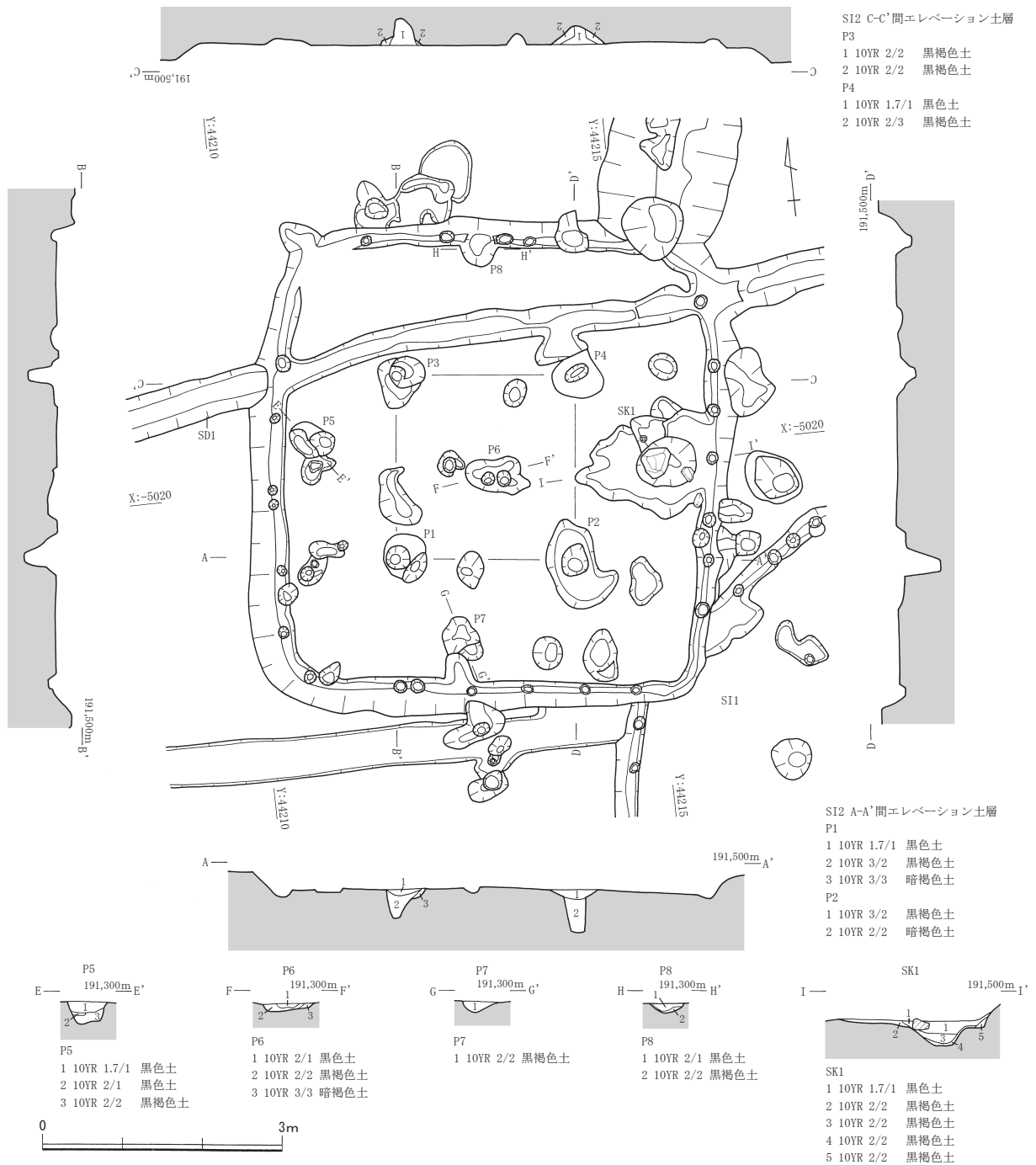
甕はすべて有段口縁を呈する。口縁部外面に擬凹線を施すものは、口縁部が伸張している。口縁部が外反するもの（1）とほぼ直立するもの（2）があり、どちらも口縁部内面に指頭圧痕がみられる。口縁部外面をナデ調整で仕上げるものは、比較的口縁部が短い。口縁部が直線的にひらくもの（3・5）と、外反するもの（4）がある。4は体部内外面にハケ調整を施す。また、5については壺である可能性もある。有段口縁の壺（6）は、体部が球形を呈し、やや伸長した口縁部は直線的にひらく。底部（7）は甕または壺に伴うと考えられ、底部外面はケズリ調整を施す。高坏のうち、坏部が浅いもの（8）は、坏底部と体部の境に緩やかな稜をもち、そこから口縁部が内湾して立ち上がり、口縁端部でわずかに外反する形態を呈する。内外面は横方向のミガキ調整を施す。高坏と考えたが、鉢である可能性もある。坏部が深いもの（9～12）は、東海地方に通例の形態を呈する。いわゆる有稜高坏である。口縁端部はそれぞれ異なっており、つまみ上げるもの（10）、面取りするもの（11）、丸くおさめるもの（12）がある。脚部は内湾気味にひらくもの（11）と、ハの字状にひらくもの（12）がみられるが、小孔はいずれも3孔である。有稜高坏は9のように縦方向のミガキを行うものが一般的だが、10や11では横方向や斜め方向のミガキ調整がみられる。13は有段口縁の鉢と考えたが、高坏の可能性もある。



第6図 SI1出土遺物実測図（縮尺1/4）

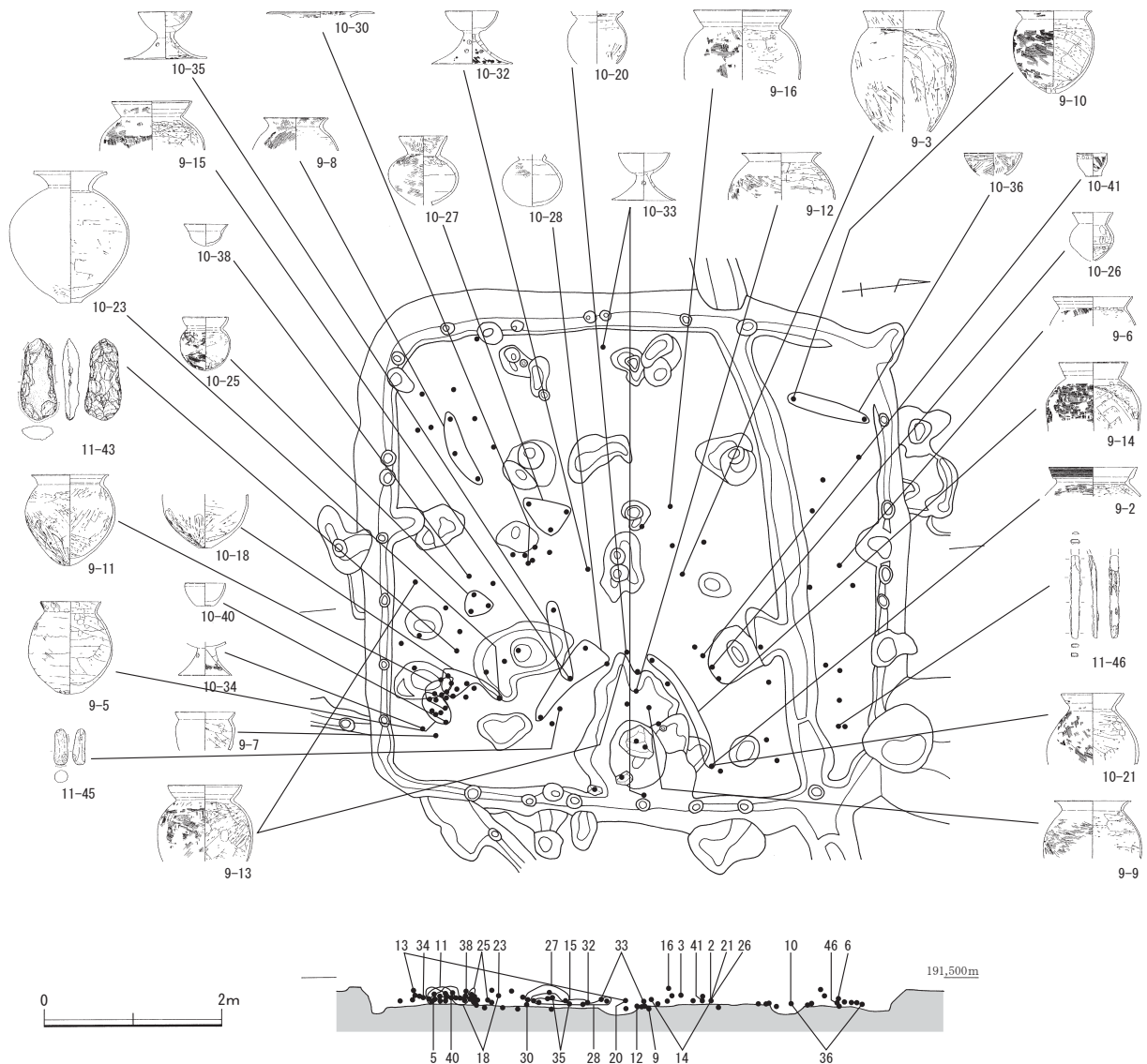
## S I 2 (図版第5・9・10・13・14、第7～11図)

**遺構** S D 1によって切られており、南東角がS I 1を切る。平面形は隅丸方形で、規模は南北6.2m、東西6.1mを測る。壁際では、北西角を除く四周に壁溝がめぐる。S I 1同様、壁溝内には杭状の小ピットが40～60cmの間隔で構築されていることが確認できた。P 1～4は支柱穴であり、柱間距離は2.2mを測る。床面にはS K 1や、P 5～8のピットが確認できた。貼床は確認できなかった。S K 1には人頭大の石が据えられていたが、炉として使用された痕跡は確認できなかった。なお、第7図中で番号がないピットは住居埋没後に構築されたものである。



第7図 S I 2実測図 (縮尺 1/80)





第8図 SI2遺物出土状況図（縮尺1/80） 遺物の番号は第9～11図に対応

遺物 SK1で甕（12）と高坏（31）、P2で高坏（32）、P4で壺（21）、P5で鉢（39）、P6で甕（11）、P9で敲石（44）を検出した（第9～11図）。また、覆土中からは多量の遺物が出土しており、その状況を第8図に示した。土器については、住居内でも出土位置が離れた破片の接合例も存在するが、完形に復元可能な個体についてはおおむね1カ所でまとまって出土している。

土器には甕（1～18）、壺（19～30）、高坏（31～36）、脚部（37）、鉢（38～41）がみられ、他に打製石斧（42・43）や敲石（44・45）といった石器、鉄器の鉋（46）が出土していることが注目される。

甕は、有段口縁（1・2）、くの字状口縁（3～12）、口唇部を肥厚させる「布留系」の口縁（13～16）がみられる。この他、肩部に波状文を施す体部（17）と、外面にケズリ調整を行う底部（18）も甕の可能性が高い。有段口縁の甕は、口縁部外面に擬凹線を有する。口縁部が外反するもの（1）と、口縁部が直線的にひらくもの（2）がある。くの字状口縁の甕には、口縁端部を面取りするものが2点（3・4）ある。3は頸部の屈曲が緩く、直立気味にひらく比較的長い口縁部をもつ。体部は長胴形を呈し、内面と肩部以下の外面にはケズリ調整を施す。4は頸部の屈曲がやや強く、口縁部は外反する。この他は、口縁端部を丸く仕上げる（5～12）。5は直立気味で少しひらく口縁部をもち、頸部の屈曲は緩やか

である。倒卵形を呈する体部の外面には接合痕が明瞭に残る。6は頸部の屈曲がやや強く、口縁部が直線的にひらく。7は比較的短い口縁部がやや内湾気味に立ち上がる。8～12は、外反して大きくひらく口縁部をもつ。頸部の屈曲が鋭いものが多い。体部は、10・11のように球胴化の進んだ倒卵形を呈すると思われる。体部外面にハケ調整を施すものが多いが、10は底部付近に、11は体部外面全体に、それぞれケズリを施している。10は底部中央に穿孔がある。「布留系」の甕は、体部が長胴形を呈すると思われる。口唇部端面が外傾するもの(13)、ほぼ水平となるもの(14)、内傾するもの(15・16)がある。体部外面は、頸部から肩部にかけてタテ方向のハケ調整後、肩部を中心に不連続なヨコ方向のハケ調整を行うものが多い。その下半は、タテ方向のハケ調整を施すもの(15)と、タテ・ヨコ・斜めのすべての方向のハケ調整を施すもの(13・14・16)がある。頸部から肩部にかけてはヨコナデ調整を施しており、それにより縦方向のハケ調整は消されている。「布留系」甕の特徴である調整の規則性は希薄である。

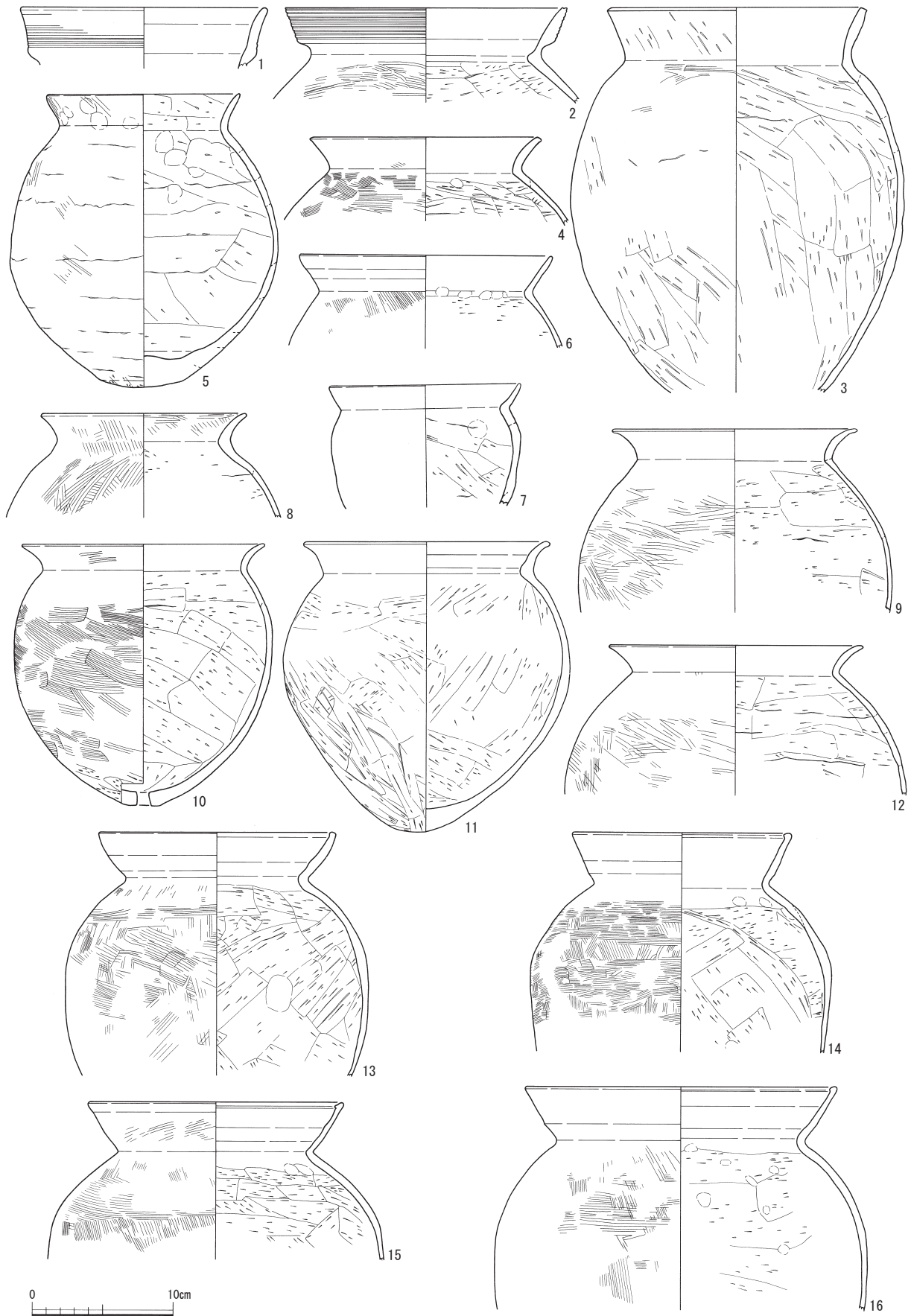
壺は、12点を図示する。有段口縁の壺には、球形の体部をもつもの(19・20)と、長胴形の体部をもつもの(21)がある。口縁部は直線的にひらく。広口壺は、口縁形態により2種にわけられる。1つは、口縁端部に直立する狭小な面を有するもの(22・23)である。頸部の屈曲は明瞭で、口縁部は外反してひらく。22は口縁部下端を膨らませ、有段口縁状とする。23は平底で、球形の体部をもつ。もう1つは口縁部下端を垂下させ幅広の面を形成するもの(24)で、外面はミガキ調整を行う。この他、29・30も広口壺である可能性が高いと考えられる。29は、頸部内面に粘土を貼付し、大きく突起した屈曲を作り出している。外面はハケ調整後、縦方向のミガキを施す。このように頸部内面に突起状のものを巡らす壺は、右近次郎西川遺跡(第3図5)でも出土している。また、30は口縁部が外反して大きくひらき、端部付近で反り返る器形を呈する。二重口縁となる可能性もある。小型の壺(25)は、内湾気味に立ち上がる口縁部と、球形の体部をもつ。直口壺は頸部の屈曲が鋭く、体部は26が倒卵形、27が扁球形を呈する。28は球形の体部を有するもので、口縁部を欠くが、直口壺である可能性が高いと考えられる。

高坏は中型と小型があり、小型のものは法量が近似する。中型のもの(31)は坏底部と体部の境に明瞭な稜をもち、そこから口縁部が内湾気味にひらく形態を呈する。小型のもの(32～36)は坏部が碗形を呈し、坏底部と体部の境界に緩やかな稜をもつもの(32・33)と、稜が認められないもの(34・35)がある。脚部はハの字状にひらく器形を呈し、32・35の脚裾部の広がりには特に大きい。脚部(37)は高坏に伴うと考えられ、脚端部付近で内湾する器形を呈する。

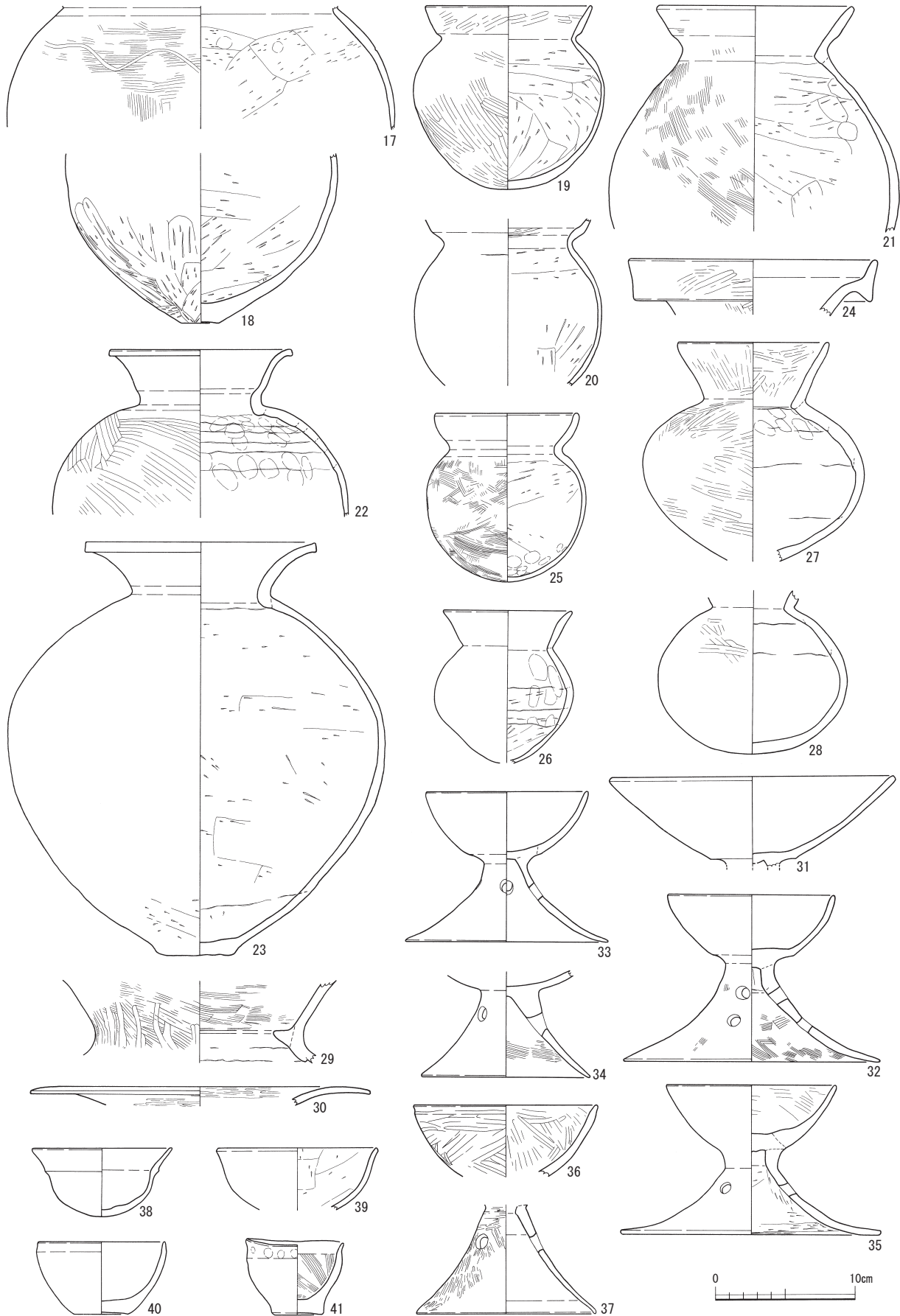
鉢(38～41)はすべて小型である。38は有段口縁をもち、底部は丸底をなす。その他は口縁部が内湾気味に立ち上がる器形であるが、口縁端部の処理はそれぞれ異なる。39は口縁端部に外傾する狭小な面を形成し、40は口縁端部をつまみ上げて成形し、41は口縁端部を外反させている。40・41は、比較的しっかりした平底の底部を有する。

石器は打製石斧(42・43)と敲石(44・45)がある。42・43はいずれも側辺が基部から刃部に向かってやや広がる形状で、後述する分類のⅠ類にあたる。片面には基部から刃部にわたって自然面が広く残る。基部は42が直線的に、43が尖り気味に成形されている。45は棒状の敲石で、一端に顕著な敲打痕が認められる。

金属器としては、鉈(46)が出土している。刃部先端と基部先端を欠損している。残存長9.4cm、幅は1.3cm、厚さ0.7cmを測る。刃部は中央に鑄があり、鋸状である。身部で平板化しており、裏すきは確認できない。身部断面形は長方形で、基部先端でやや先細りする。裏面にのみ柄木木質が残存しているが、装着方法は不明である。

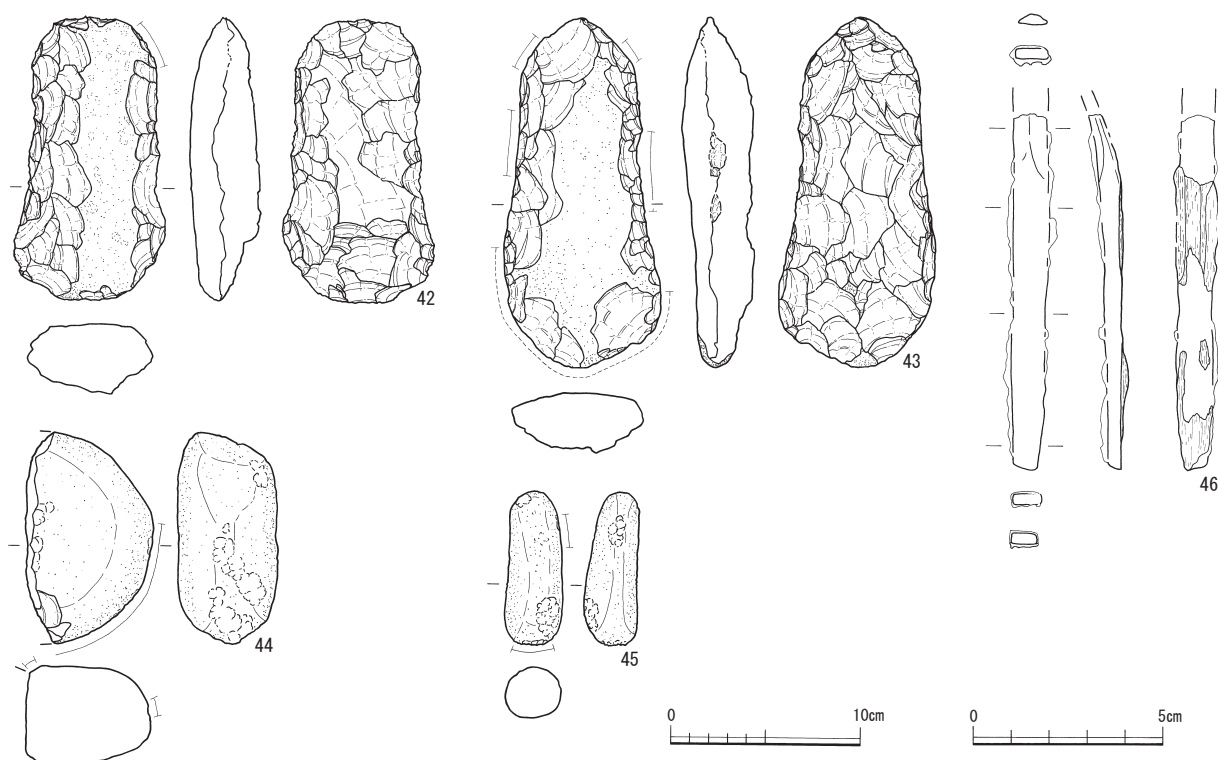


第9図 S I 2出土遺物実測図1 (縮尺1/4)



第10図 S I 2出土遺物実測図2 (縮尺1/4)





第11図 S I 2 出土遺物実測図3 (42～45：縮尺1/4, 46：縮尺1/2)

### S I 3 (図版第6・11・13、第12・13図)

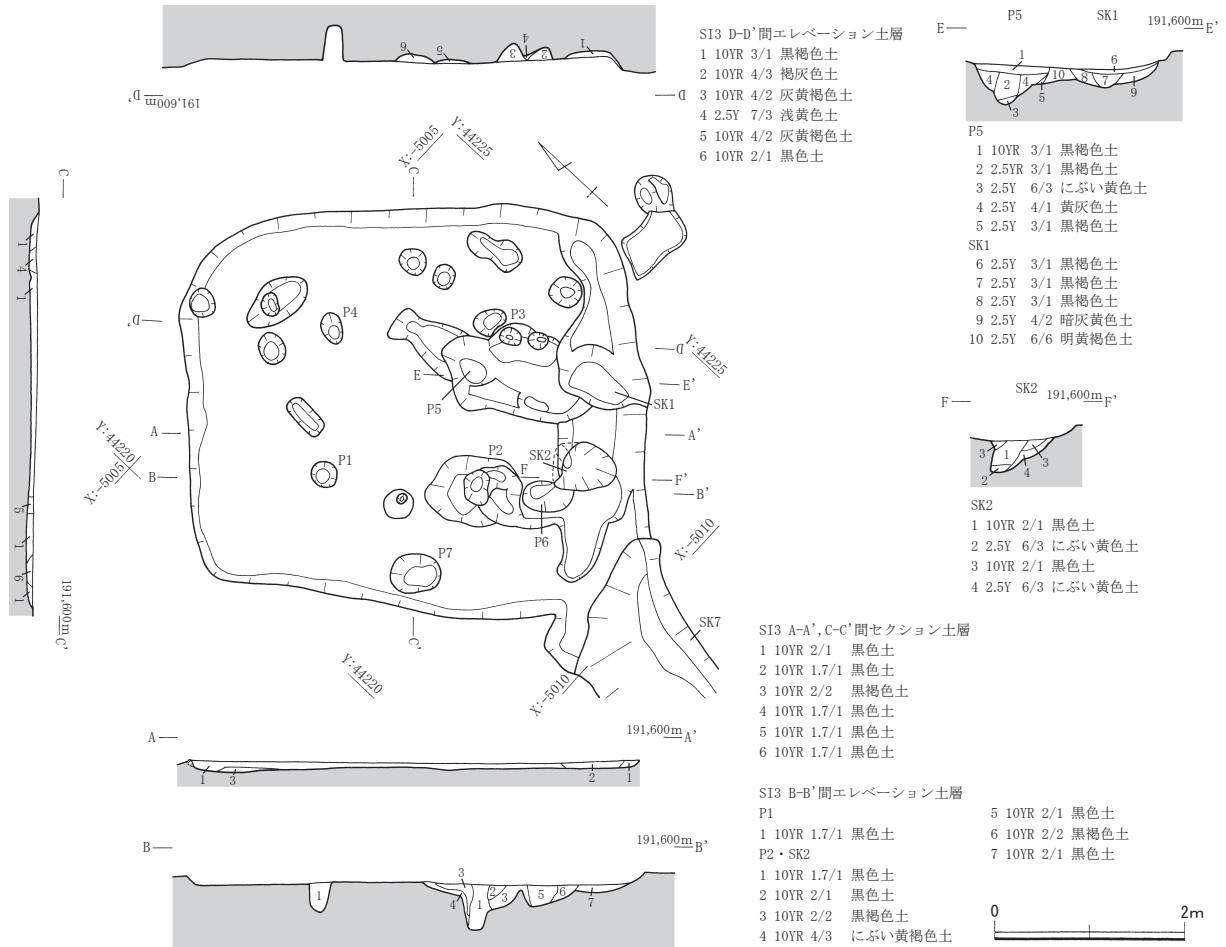
**遺構** 南西角が風倒木痕で明瞭に検出されなかった。住居の掘り込みが非常に浅いが、S I 3の南東に別の竪穴住居の壁溝と思われる溝が残存することから、S I 3も同様に削平を受けているものと推定できる。平面形は隅丸方形で、南北4.8m、東西4.2mを測る。壁溝は確認できなかった。P 1～4が支柱穴で、各柱間距離は0.8～0.85mと若干ばらつきがある。床面にはS K 1・2の土坑が確認できた。これらの土坑は、南壁から連続するように構築されていた。S K 2については断面図で確認できるように、床面下に掘り込みが及んでいる。ただし、性格を特徴付ける遺物は出土していない。遺物は小破片で出土するものが多く、S I 1・2と比較して出土量も少ない。

**遺物** P 4で脚部(11)を確認している他は覆土中からの出土である(第13図)。甕(1～5)、壺(6・7)、高坏(8・9)、脚部(10・11)、鉢(12)、磨石(13)がある。

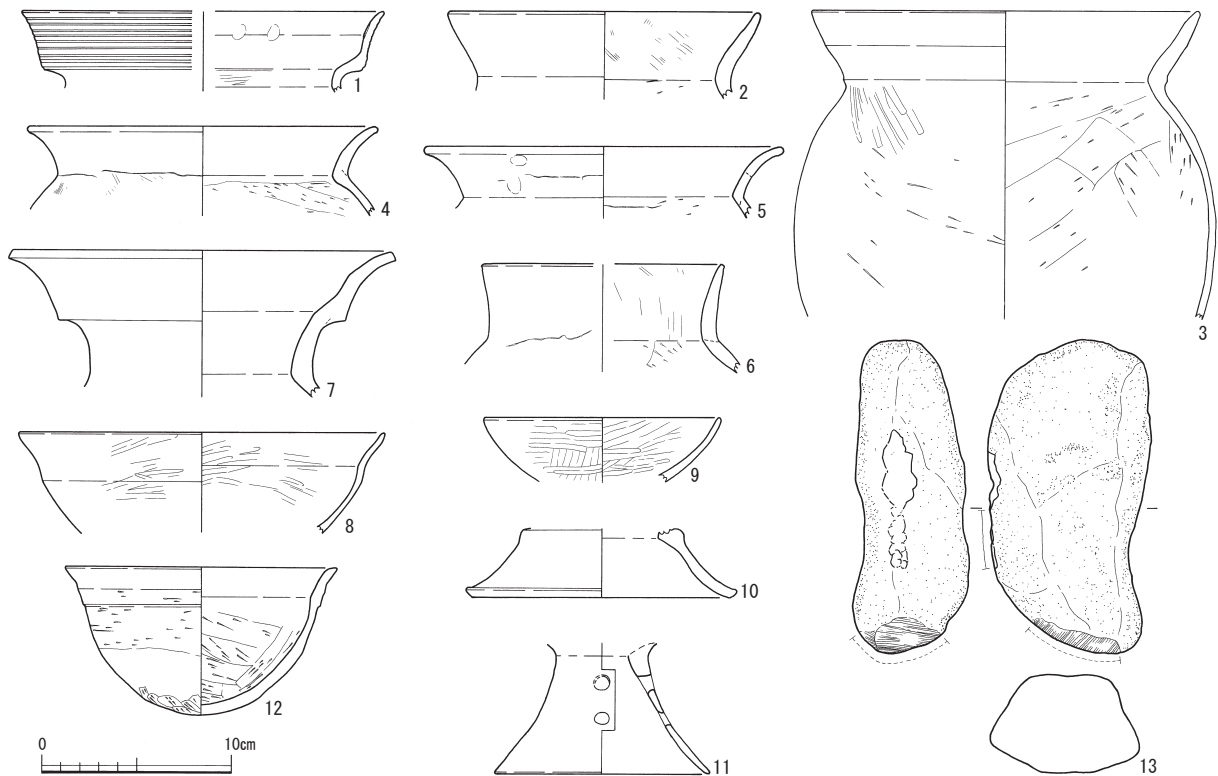
甕には、有段口縁(1)と、くの字状口縁(2～5)がある。くの字状口縁の甕は、頸部の屈曲が緩く、比較的長い口縁部が内湾気味にひらくもの(2・3)と、頸部の屈曲が強く、口縁部が外反するもの(4・5)にわけられる。3は肩部外面にタタキ痕、その下位にケズリ調整がみられる。壺は、短頸壺(6)と二重口縁壺(7)がある。7は緩やかに外反する頸部に、さらに外反して大きくひらく二次口縁を付加するもので、口縁端部は外傾する狭小な面を有する。高坏は中型(8)と小型(9)があり、いずれも内外面をミガキで仕上げる。8は、坏底部と体部の境に稜を有するもので、坏部はやや深めである。9は、坏部が碗形を呈する。脚部(10・11)は高坏または器台につくと考えられる。10は脚裾部が有段を呈し、脚端部に内傾する狭小な面をもつ。11は脚裾部にむかって、ハの字状にひらく。鉢(12)は、口縁部と頸部の段差が非常に小さい有段口縁状を呈する。口縁部は端部付近で外反してひらき、底部は丸底をなす。

石器(13)は磨石とした。やや角の張る歪な楕円礫の一端に顕著な磨痕が認められる。表面は赤化しており、被熱した可能性がある。

## 第2節 遺構と遺構出土遺物



第12図 SI3実測図（縮尺1/80）



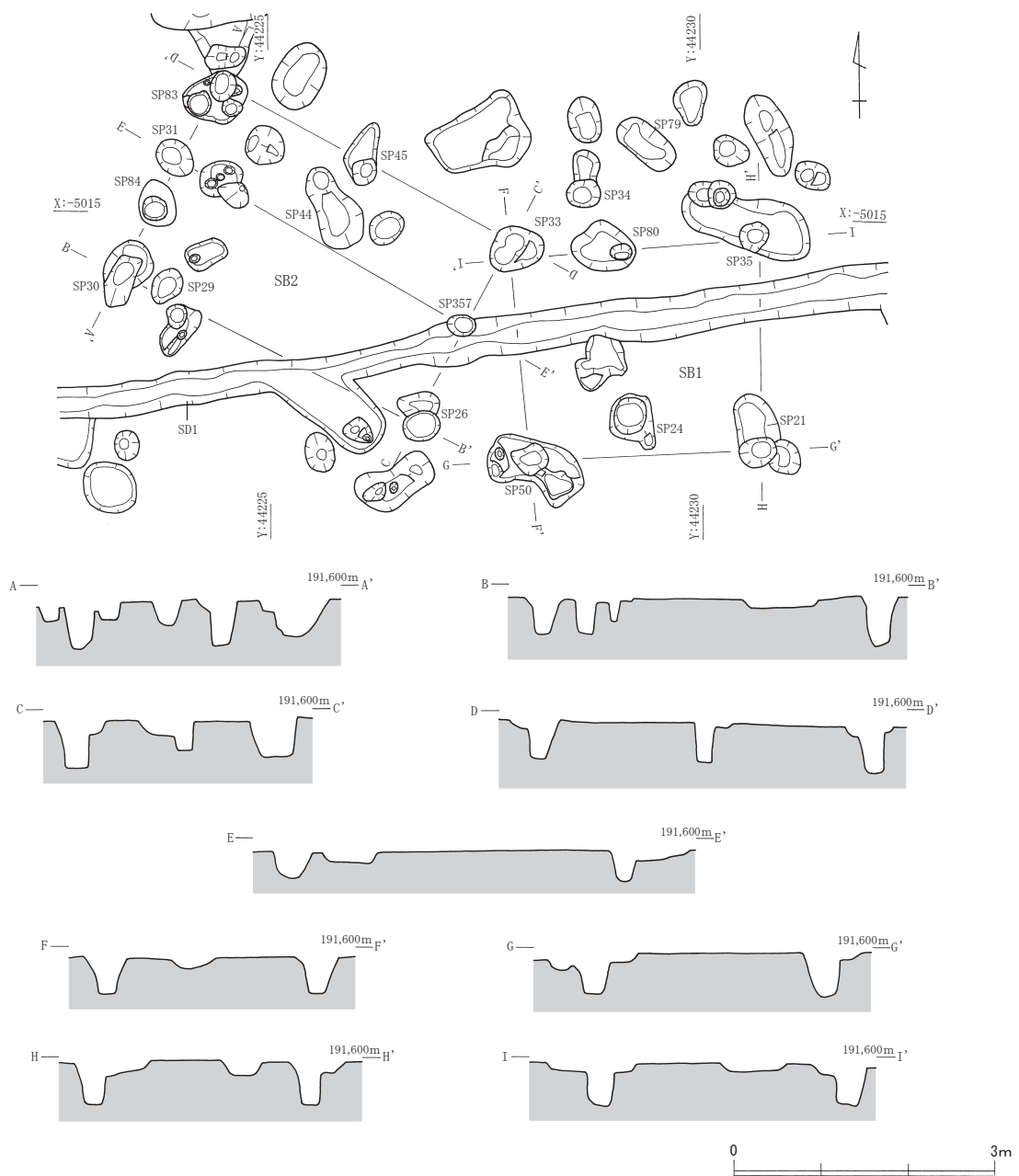
第13図 SI3出土遺物実測図（縮尺1/4）

## 2 掘立柱建物

## SB 1・2 (図版第6、第14図)

**遺構** A1区に位置する。SB 1は桁行1間(2.8m)×梁行1間(2.4m)の側柱建物である。SB 2は桁行2間(3.8m)×梁行2間(2.4m)の側柱建物である。建物同士の主軸は異なるが、SP 33が両建物の共通の柱穴となっている。柱穴断面の観察からは前後関係を特定することはできなかった。しかしながら、SB 2の柱穴がSD 1によって切られているため、古代以前で竪穴住居のいずれかに伴う時期に構築されている。

**遺物** SB 1・2ではSP 26・33・83の3基の柱穴から土器がわずかに出土しているが、いずれも小片であるため時期を特定することはできない。SB 1に伴う柱穴ではないが、SB 1内部にはSP 24が構築されている。この両建物の時期は、後述するSP 24出土土器(第20図6)に近い時期ではな



第14図 SB 1・2実測図(縮尺1/80)

いかと推定できる。

SB1・2や次に述べるSB3も棟持柱は確認できない。また、最も小型の竪穴住居SI3と比較しても、これらの掘立柱建物群は一回り小型の建物であるといえる。こうした点を考慮すると、建物としての特徴的な要素は確認できないため、建物の性格としては、竪穴住居群に伴う日常的な倉庫である可能性が考えられる。

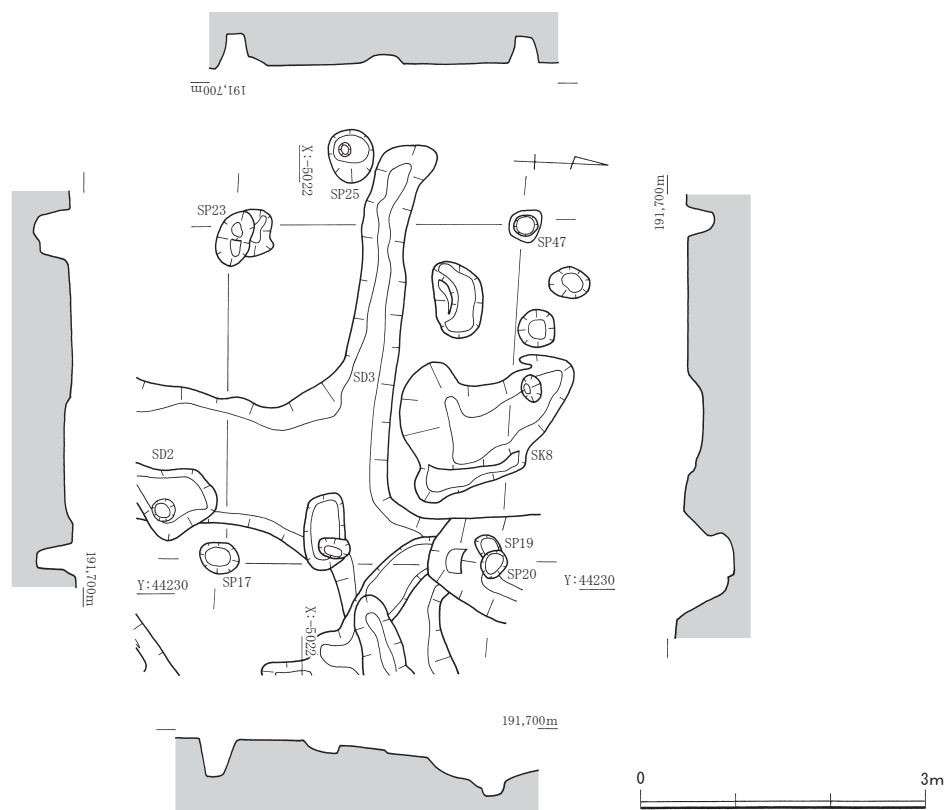
### SB3（第15・18図）

**遺構** A1区、SB1・2より南に位置する。桁行1間（3.6m）×梁行1間（3.0m）の側柱建物である。遺構の切り合い関係からは、SD2・3との前後関係は不明確である。他の遺構との共通点としては、建物主軸がSI2とほぼ共通していることが挙げられる。

北西角のSP47や南東角のSP17では認められないが、北東角の柱穴SP19・20や南西角の柱穴SP23には、柱痕が2箇所確認でき、このSB3のみ今回の調査で確認された建物の中で、唯一建て替えが行われた可能性がある。

**遺物** 北西角の柱穴SP47からは弥生土器が出土しており、この土器が建物の廃棄時期を示すとともに、他の遺構との前後関係を推定し得る資料である（第18図）。この他の柱穴では遺物を確認していない。

甕（1）は有段の口縁部がほぼ直立し、口縁部下端をわずかに垂下させる形態を呈する。口縁部外面には擬凹線を有する。内面は、口縁部に指頭圧痕を巡らし、頸部にはハケ調整、体部にはケズリ調整を施す。時期は弥生時代後期末と考えられる。



第15図 SB3実測図（縮尺1/80）

**SB4** (図版第7、第16図)

**遺構** B1区、SI2の北東角に位置する。桁行1間(4.0m)×梁行1間(3.2m)の側柱建物である。北西角の柱穴SP63がSI2の埋没後に掘り込まれており、SI2より後に構築されている。SI2を切る遺構としてはSD1が存在するが、SB4はSD1とは切り合いがなく、遺構からは前後関係を特定することはできなかった。ただし、南東角の柱穴SP28は平面形が方形を指向しており、他の建物の柱穴がすべて円形で構成される状態とは異なっている。時期差を示す可能性が高い。

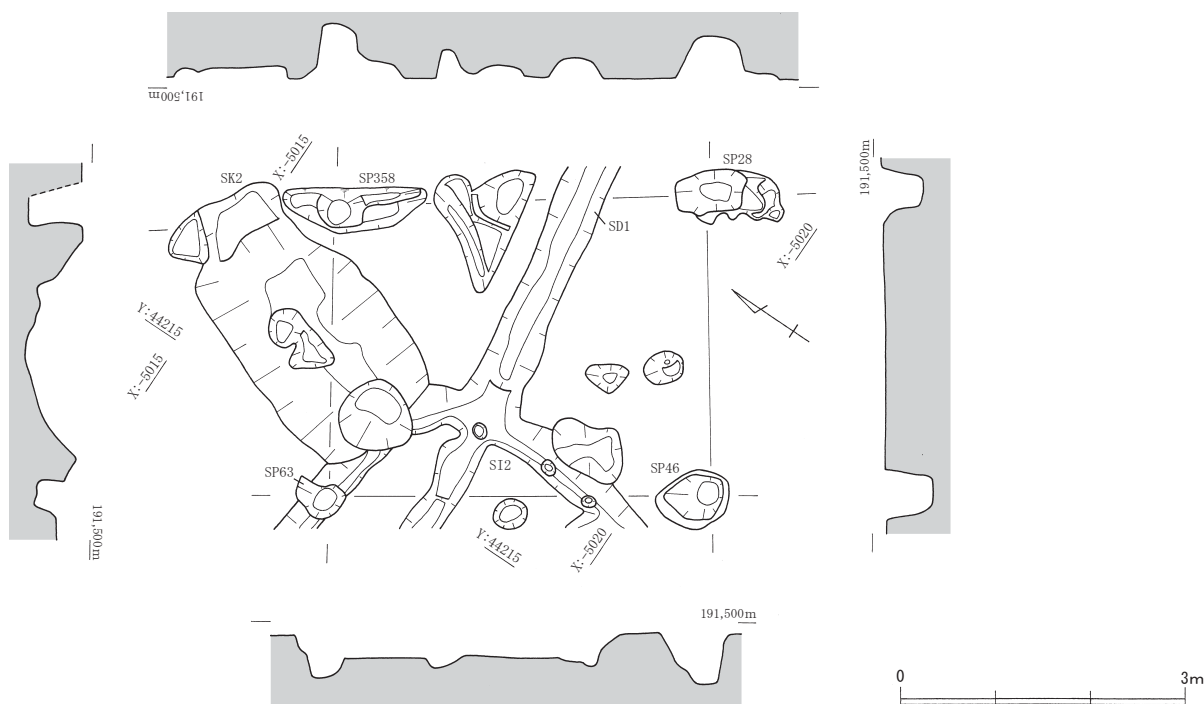
**遺物** 図化できなかったが、柱穴SP28・46・63から弥生時代後期末～古墳時代初頭の時期と考えられる土器の破片が少量出土している。

**SB5** (図版第7・11、第17・18図)

**遺構** C3・4、B4区に位置する。桁行3間(8.4m)×梁行2間(5.2m)以上の規模がある総柱建物である。西側が調査区外に延びているが、3×3間になることは疑いない。桁行については、北側2間の間数が1間2.8m、南側1間が2.6mとなる。梁行については1間2.6mである。

北東角の柱穴SP210などから土師質皿(第18図)が出土しており、13世紀から14世紀にかけての時期に廃絶した建物であるといえる。他の建物群と位置を違えているのも、こうした時期差を反映しているものと推定できる。SB5は、今回の調査において唯一検出した中世遺構といってよいが、一般家屋としては規模が大きい。同じ大野市域においては、下丁遺跡<sup>(1)</sup>において、13世紀後半から14世紀にかけての建物群が確認されている。総柱建物は3×2間の規模のものが存在するが、3×3間などの構造を採用した建物は確認されていない。鳥羽院政期に成立し経営されていた安楽寿院領小山荘に係る建物である可能性を考慮しておきたい。

**遺物** 柱穴SP210・230・231から土師質皿が出土した他、柱穴SP233・322からも土器片が微量出土している。土師質皿(2～4)は手づくね成形で、全体に丸みをもち、浅く立ち上がる器形を呈す



第16図 SB4実測図(縮尺1/80)

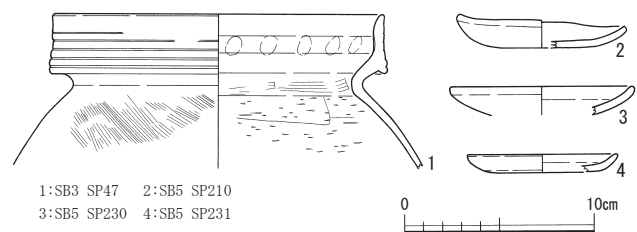


第17図 SB 5実測図 (縮尺1/80)

る。灯心油痕は認められない。13世紀後半から14世紀にかけてのものと考えられる。

註

- 1 青木隆佳編 2004 『福井県埋蔵文化財調査報告 第74集 下丁遺跡 担い手育成基盤整備事業に伴う調査 その2』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター



第18図 掘立柱建物柱穴出土遺物実測図 (縮尺1/4)



### 3 その他の遺構

#### SK3 (図版第14、第19・20図)

**遺構** A1区調査区南東角に位置する。円形で、直径1.4m、深さ0.25mの規模を測る浅い土坑である。壁面の立ち上がりは緩やかで、底面は皿状を呈す。

**遺物** 弥生土器の破片が少量出土する。甕(1・2)は、ほぼ直立する有段口縁の外面に擬凹線を有する。弥生時代後期末に比定される。器種不明の金属器片(3)は、残存長2.9cmで、厚さは0.8cmである。刃は付かないため鋳ではないが、先端をわずかに折り曲げている。転用鉄素材の可能性はある。

#### SK6 (図版第8、第19・20図)

**遺構** A2区に位置する。断面では複数の掘り込みが確認できるが、平面では区別できなかった。長軸2.9m、短軸2.0m、深さ0.2mの規模を測る浅い土坑である。壁面の立ち上がりは緩やかで、底面は平坦である。

**遺物** 弥生土器の破片が少量出土し、図化できなかったが中期に属するものもみられる。甕(4)は、ほぼ直立する有段口縁をもち、口縁部外面に不鮮明な擬凹線を有する。弥生時代後期末と考えられる。

#### SK14 (図版第11、第19・20図)

**遺構** A4区に位置する。複数の掘り込みで構成されており、不整形な形状を呈している。長軸1.9m、短軸1.6m、深さ0.15mの規模を測る浅い土坑である。壁面の立ち上がりは強く屈曲し、底面は平坦である。

**遺物** 浅鉢形土器(5)は、強い屈曲部を有す。半截竹管による平行沈線と刻みをもつ突帯文で文様を描出する。地文は確認できない。平行沈線による区画内には赤彩が広く残る。その他、屈曲部付近にも部分的に赤彩の痕跡が認められる。縄文時代前期後葉に位置付けられる。

#### SP24 (図版第8・11、第19・20図)

**遺構** A1区、SB1内部に位置する。円形の柱穴で、直径0.5m、深さ0.4mの規模を測る。底面は平坦である。柱材抜き取りが行われた後、半截した甕(6)を埋納したものと推定できる。

**遺物** 甕(6)は、直線的にわずかにひらく有段口縁をもつ。時期は弥生時代後期末と考えられる。

#### SP58 (第19・20図)

**遺構** B2区に位置する。楕円形のピットで、長軸1.1m、短軸0.6m、深さ0.15mの規模を測る。底面は平坦である。

**遺物** 土師器の破片が少量出土している。脚部(7)は、脚裾部がハの字状に開脚する器形で、2段の小孔が3方向に穿たれていたと推測される。古墳時代初頭～前期のものと考えられる。

#### SP64 (図版第11、第19・20図)

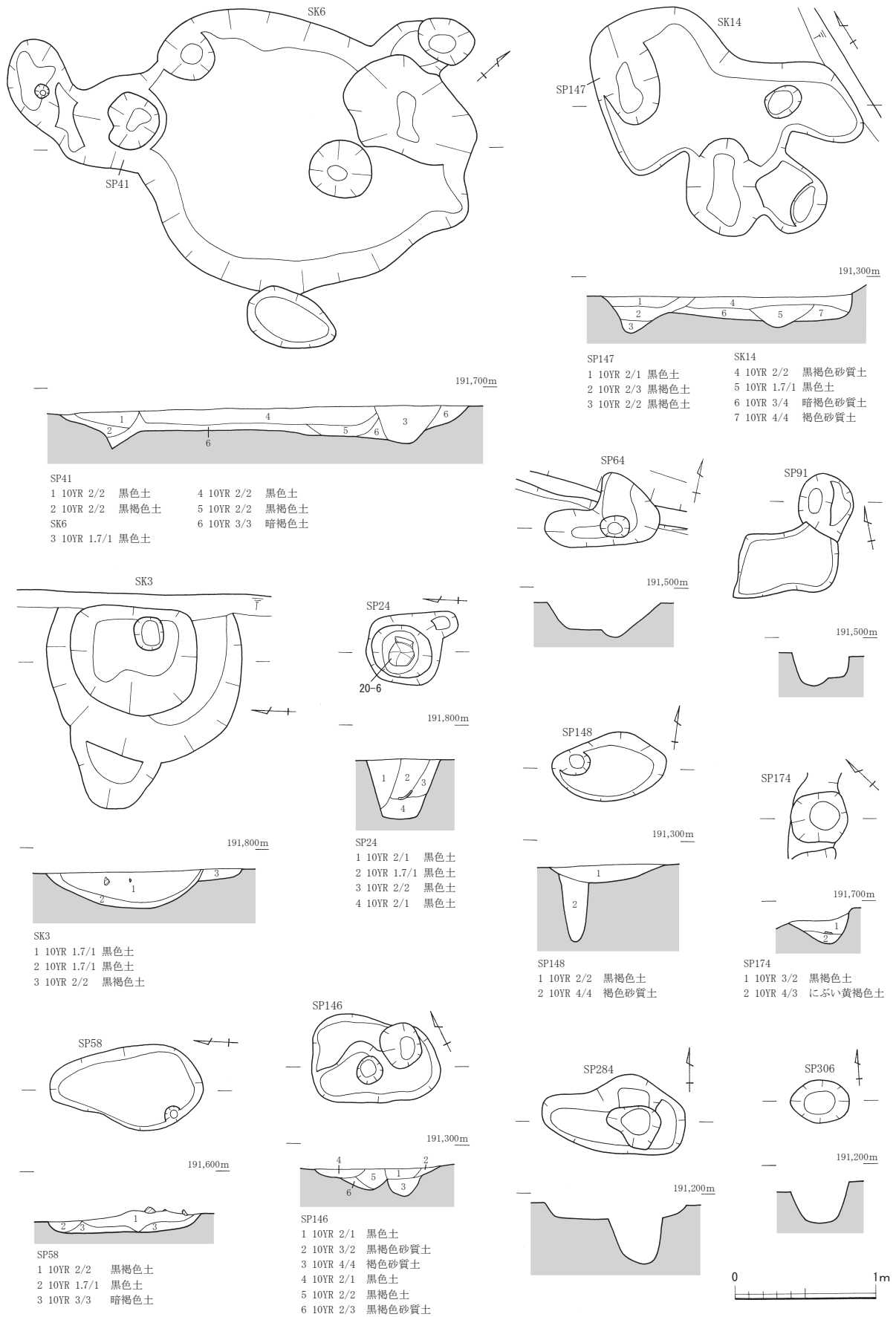
**遺構** B1区に位置する。SI2を切るL字形のピットで、長軸0.85m、短軸0.5m、深さ0.25mの規模を測る。出土土器は混入品と推定できる。

**遺物** 8は縄文LRが施文された口縁部破片で、角頭状を呈す。口端面は指ナデによるものか浅い凹面をなし、実測図右端に軽うつままれたような小突起を形成する。

#### SP91 (第19・20図)

**遺構** A2区SI3東に位置する。円形の柱穴で、直径0.4m、深さ0.25mの規模を測る。底面は平坦であるが、西側に柱のあたりが確認できる。

**遺物** く字状口縁の甕(9)は口縁部が直線的にひらく器形で、古墳時代初頭～前期に比定される。



第19図 土坑・柱穴実測図（縮尺1/40） 遺物の番号は第20図に対応



## S P 146・148 (図版第11、第19・20図)

**遺構** A 4 区に隣接して位置する。S P 146は方形のピット、S P 148は楕円形のピットで西側に杭状の掘り込みが存在する。

**遺物** S P 146から出土した10は浅鉢形土器の底部で、平底をなす。底縁を突出させ、「ハ」字の刻みを施す。胴部には半截竹管による幅の狭い平行沈線で文様モチーフを描く。平行沈線間には爪形文を施し、部分的に沈線を引き直している。地文には縄文L Rを施文し、文様区画内は磨り消す。文様区画内と器壁下端の括れた部分には赤彩が顕著に残存している。縄文時代前期後葉に位置付けられる。S P 148から出土した11は磨石である。

## S P 174 (第19・20図)

**遺構** 東拡張区に位置する。円形のピットで、直径0.4m、深さ0.25mの規模を測る。

**遺物** 脚部(12)は脚裾部が内湾気味にひらく器形を呈し、古墳時代初頭～前期のものと考えられる。

## S P 284 (第19・20図)

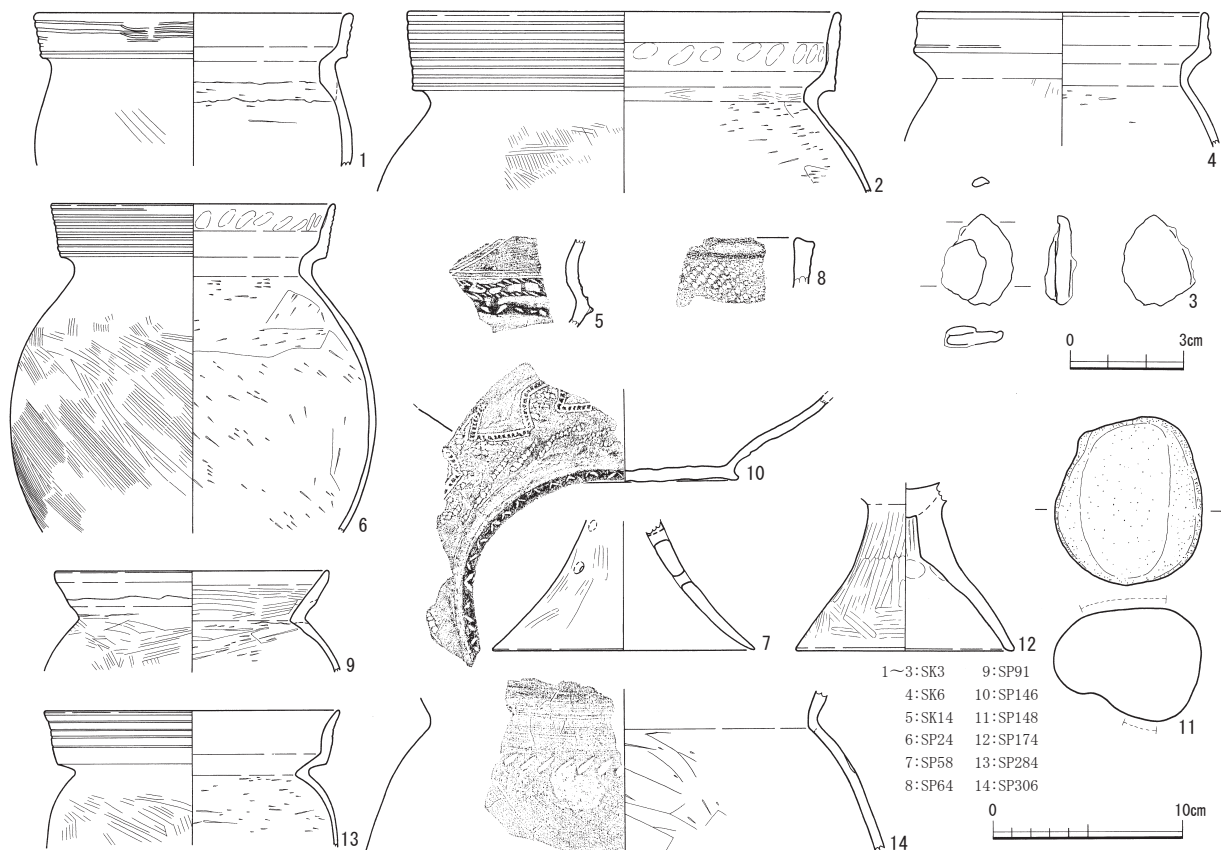
**遺構** A 3 区に位置する。楕円形の柱穴で、長軸1.0m、短軸0.55m、深さ0.45mの規模を測る。

**遺物** 甕(13)は外反する有段口縁の外面に擬凹線を有する。時期は弥生時代後期末と考えられる。

## S P 306 (図版第11、第19・20図)

**遺構** B 3 区に位置する。円形の柱穴で、直径0.4m、深さ0.3mの規模を測る。

**遺物** 14は美濃地域に系譜をもつ受口状口縁甕の体部と考えられる。外面は頸部に直線文、肩部に刺突列点文を施し、その下位はハケ調整がみられる。体部内面の調整はケズリである。時期は弥生時代後期末～古墳時代初頭と考えられる。



第20図 土坑・柱穴出土遺物実測図(1・2・4～14:縮尺1/4, 3:縮尺1/2)

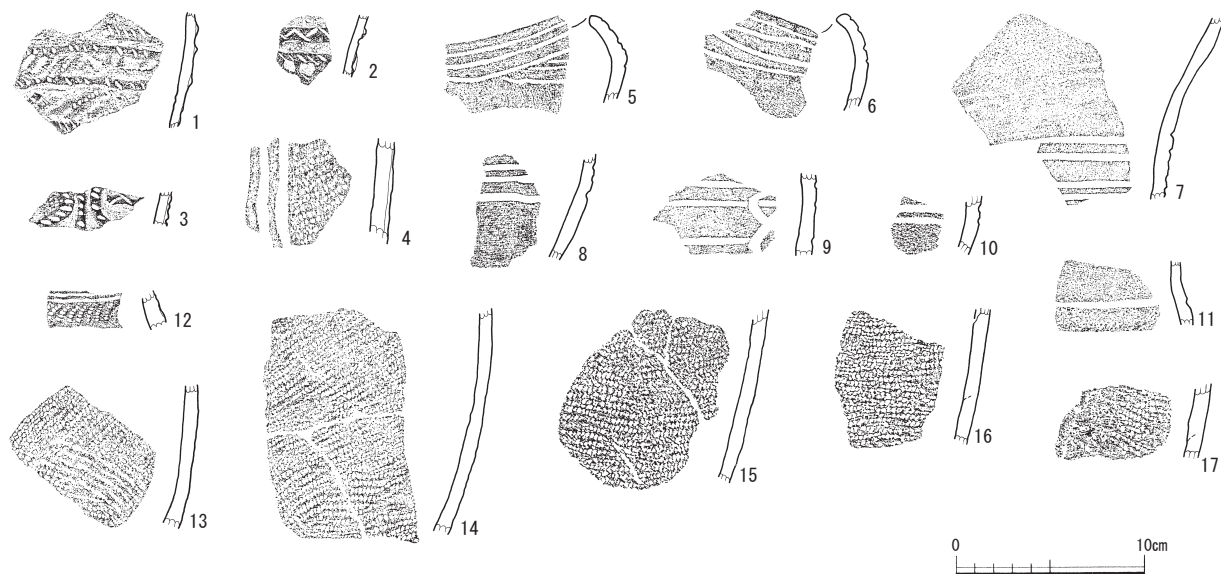
## 第3節 包含層出土遺物

テンバコ15箱分が出土しており、内訳は土器・陶磁器類が12箱、石器・石製品が2箱、金属器が1箱である。大半は弥生時代後期末～古墳時代前期の土器である。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、磁器、石器・石製品、金属器を図示する。

## 1 土器・陶磁器（図版第11・12、第21～26図）

**縄文土器（1～17）** 1～3は縄文地に突帯を貼り付ける土器である。1は内湾する破片で、横走る4条の突帯と斜行する1条の突帯端部が確認できる。突帯上には斜めの長い刻みが施される。縄文はL R。2は外反する破片で、横走る1条の突帯と縦の突帯でつながれ梯子状となった2条の突帯が確認できる。突帯上には斜めの長い刻みが施され、前者では「ハ」字状となる。縄文はL R。3は縦走する突帯の両側に背反する弧状の突帯をもつ。突帯上には刻みが施される。また、弧状の突帯の内側には「ハ」字状の刻みを有す突帯が認められる。以上は前期後葉に位置付けられる。4は縄文地に3条の縦走する太い沈線が確認できる。縄文はL R。中期後葉に比定されよう。5～11は無文地に沈線で文様を施す土器である。色調や胎土が類似し、同一個体を含む可能性が高い。5・6は波状口縁深鉢の口縁部破片。5は内屈し、口縁波形に沿って沈線を3条施す。6は緩く内湾し、同じく口縁波形に沿って沈線を4条施す。5はさらに水平な3条の沈線を組み合わせており、波頂部下で三角形のモチーフを描出するものと考えられる。7～9は5・6の頸胴部とも考える破片である。7は頸部から外反気味にひらき、口縁部付近でやや内湾する器形で、頸部には横走る4条の沈線を施す。9では横走沈線が縦位の弧状沈線に切られている。12は貝殻腹縁の刺突列が施された土器である。以上は後期後葉に位置付けられるものか。13～16は全面に縄文が施文された胴部破片。13はL RとR Lを用いて羽状縄文を施す。結節は認められない。14～16はL Rを施す。14・15は同一個体であろう。17は縦位の帯縄文をもつ胴部破片。縄文はR Lである。

**弥生時代中期後半の土器（18～21）** 中期後半の土器と考えられるのは、甕（18・19）と壺（20・21）である。18は外反する口縁部をもち、口縁端部に刻みを施す。19は近江系の受口状口縁甕で、口縁端部は短く直立する。外面は、ハケ調整の後、頸部から肩部にかけて刺突列点文と直線文を交互に施し、下端は刺突列点文で終えている。20は口縁部が直立する受口状口縁をもち、口縁部外面に刺突列



第21図 包含層出土遺物実測図1（縮尺1/4）

点文を施す。21は口縁部外面に刺突綾杉文を施す。

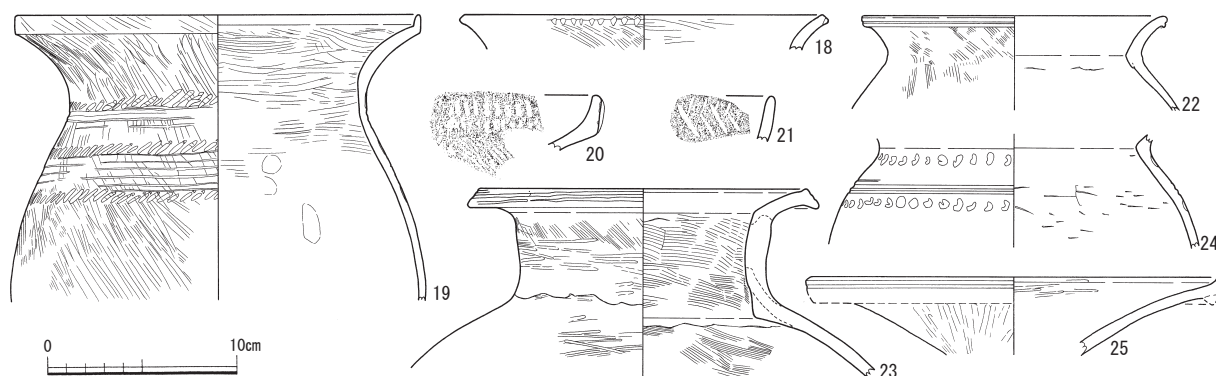
**弥生時代後期の土器**（22～25） 後期後半以前のものと考えられる。甕（22）は口縁端部に直立する狭小な面をもち、その外面に擬凹線を施す。広口壺（23）は口縁部が水平に近い角度で強く外方に伸び、端部に内傾する狭小な面をもつ。体部（24）は肩部に直線文を施し、その上下に半截竹管状の刺突列点文を巡らす。器台（25）は口縁部下端に粘土を貼り付けて狭小な面を形成していたと考えられ、その外面には擬凹線を施す。内外面はミガキ調整を行う。

**弥生時代後期末～古墳時代前期の土器**（26～97） 甕・壺・高坏・器台・鉢・蓋がみられる。

甕は有段口縁を呈するもの（26～48）と、くの字状口縁を呈するもの（49～56）がある。有段口縁の甕には中型と大型があり、口縁部外面に擬凹線を施すものと、口縁部外面をナデ調整で仕上げるものがみられる。口縁部は、ほぼ直立するもの（26・37～40・42・46・47）、内側に傾くもの（27・41）、直線的にひらくもの（28～31・43・44）、外反するもの（32～36・45・48）がある。48は口縁端部に外傾する面をもち、山陰地方の影響を受けたものと考えられる。また、口縁部下端が突起する47もその可能性がある。体部は、外面にハケ、内面にケズリを施すものが大半であるが、47は内外面ともハケ調整後にケズリ調整を行っている。弥生時代後期末～古墳時代初頭の時期のものと考えられる。

くの字状口縁の甕は中型のみがみられ、口縁部が直線的にひらくもの（49～51）、内湾気味にひらくもの（53）、外反してひらくもの（52・54～56）にわけられる。頸部の屈曲が鋭いものが多い。中心となる時期は、古墳時代初頭～前期と考えられる。

壺は、有段口縁壺、短頸壺、無頸壺、広口壺、二重口縁壺、複合口縁壺にわけられる。有段口縁壺（57～61）は、口縁部が直線的にひらくもの（57・58）と、口縁部が外反するもの（59～61）がある。口縁部外面に擬凹線が認められるのは59のみである。57は体部が潰れた球形を呈し、小さな平底の底部を有する。58は口縁端部付近でわずかに内湾する。61は頸部の屈曲が鋭く、他の有段口縁壺と比べて頸部がやや伸びていると推測される。内外面ともミガキ調整を施す。短頸壺（62・63）は口頸部が直線的にひらく器形を呈する。62は口縁端部に内傾する面を有し、63は口縁端部を横ナデにより直立させている。無頸壺（64）は算盤玉状の体部をもち、底部は丸底である。内外面に赤彩を施す。広口壺（65～67）は、頸部が直立気味に立ち上がるもの（65・66）と、外反するもの（67）がある。65は、口縁部が端部付近で外反してひらき、端部には外傾する狭小な面をもつ。66は、筒状の頸部を有し、口縁部は外反して大きくひらく。口縁端部には外傾する面をもち、その外面に擬凹線を施す。67は口縁部下端に粘土を貼り付けて、直立する面を形成している。二重口縁壺（68・69）は緩やかに外反する頸部に、さらに外反してひらく二次口縁を付加する。複合口縁壺（70・71）は東海地方のパレスス



第22図 包含層出土遺物実測図2（縮尺1/4）



タイル壺の影響を受けているとみられる。70は口縁部内面に刺突羽状文を施し、71は口縁部外面に棒状浮文を貼付する。68～71は古墳時代初頭に位置づけられ、その他は弥生時代後期末～古墳時代初頭のものと考えられる。

高坏は、坏部が有段口縁の鉢形を呈するもの（72）、坏底部と体部の境に稜を有するもの（73～75）、小型高坏（76）、脚部（77）がある。73・74は稜が明瞭で、外面にミガキ調整がみられるが、75は稜が緩やかで、内外面ともハケ調整を行っている。73は口縁部が外反してひらくもので、口縁端部を面取りしている。74は東海地方に系譜をもつ有稜高坏である。体部から口縁部にかけては直線的にひらき、口縁端部付近でやや内湾する。75は、体部から口縁部にかけて直線的にひらく形態を呈する。坏底部の直径は、脚柱部の直径より一回り大きい程度で、あまり差がない。76は、皿状の浅い坏部にハの字状にひろがる脚部をもつ。77は脚裾部がやや内湾気味にひらく。72・73は弥生時代後期末、74～76は古墳時代初頭～前期の所産と考えられる。

器台は2種類ある。ひとつは、口縁部が有段となるもの（78）で、口縁部は外反して大きくひらく。接合しなかったが、有段の脚部（79）と同一個体である可能性が高い。もうひとつは、いわゆる小型器台（80～82）である。皿状を呈する受部に、ハの字状にひらく脚部がつく。口縁部が直線的にひらくもの（80）と、口縁部が内湾するもの（81・82）にわけられる。装飾器台（83・84）は、2点図示する。いずれも横長の器形である。83は口縁部が外反する。それぞれに同じ向きの涙滴形透しが巡ると推測されるが、83の透しと84の透しでは上下が逆になっている。いずれも赤彩が認められる。78・79・83・84は弥生時代後期末、80～82は古墳時代初頭～前期の時期のものと考えられる。

鉢は、有段口縁を呈するもの（85・86）、口縁部が内湾する器形のもの（87）、底部に孔を有するもの（88）がある。85・86は口縁部が外反するもので、86は小さな凹底をもつ。87は口縁端部を外上方につまみ出して、内傾する面を形成している。弥生時代後期末～古墳時代初頭の時期のものと考えられる。

89は、平面形が方形を呈すると考えられ、槽形と推定される。外面は、底面と側面、側面と側面の境が明瞭で、側面の立ち上がりは斜め上方にひらく。底部は平坦である。

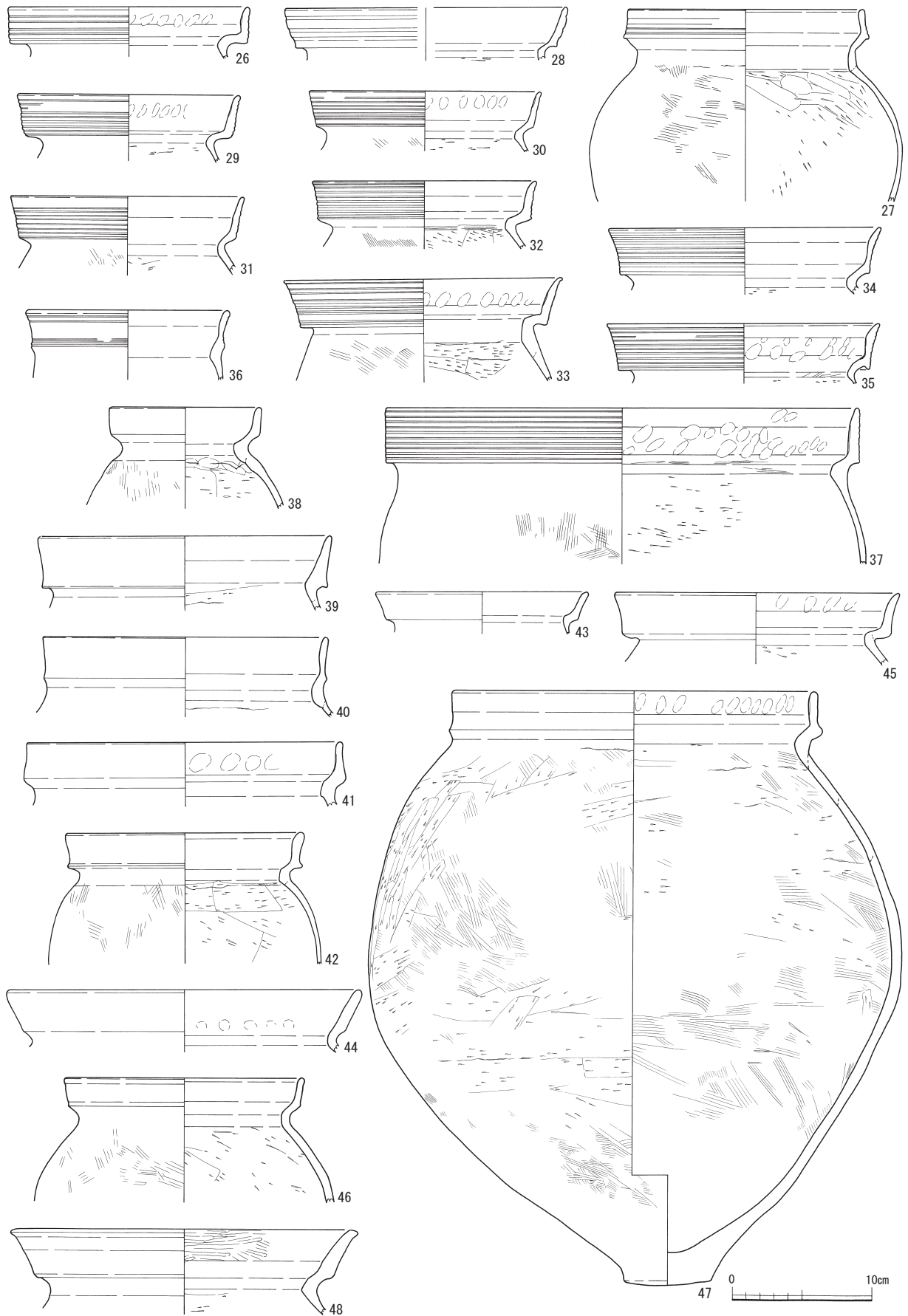
蓋は笠部が内湾気味にひらくもの（90）と、口縁部が外反して伸びるもの（91）がある。90は紐頂部がわずかに凹む。笠部は口縁部付近で屈曲して緩やかな稜を形成しており、この稜の上位に穿孔する。1孔しか残存していないが、2孔一対であった可能性が高く、無頸壺に伴うものと考えられる。外面に赤彩を施す。91は紐頂部が大きく凹み、口縁端部に直立する狭小な面を有する。弥生時代後期末～古墳時代初頭の時期のものと考えられる。

底部（92）は平底で、内面に靱圧痕がみられる。脚台（93・94）は脚裾部が外反してひらくもので、端部を丸くおさめるもの（93）と、端部に直立する狭小な面を作るもの（94）がある。小型土器は甕形（95・96）と、コップ状を呈するもの（97）がある。

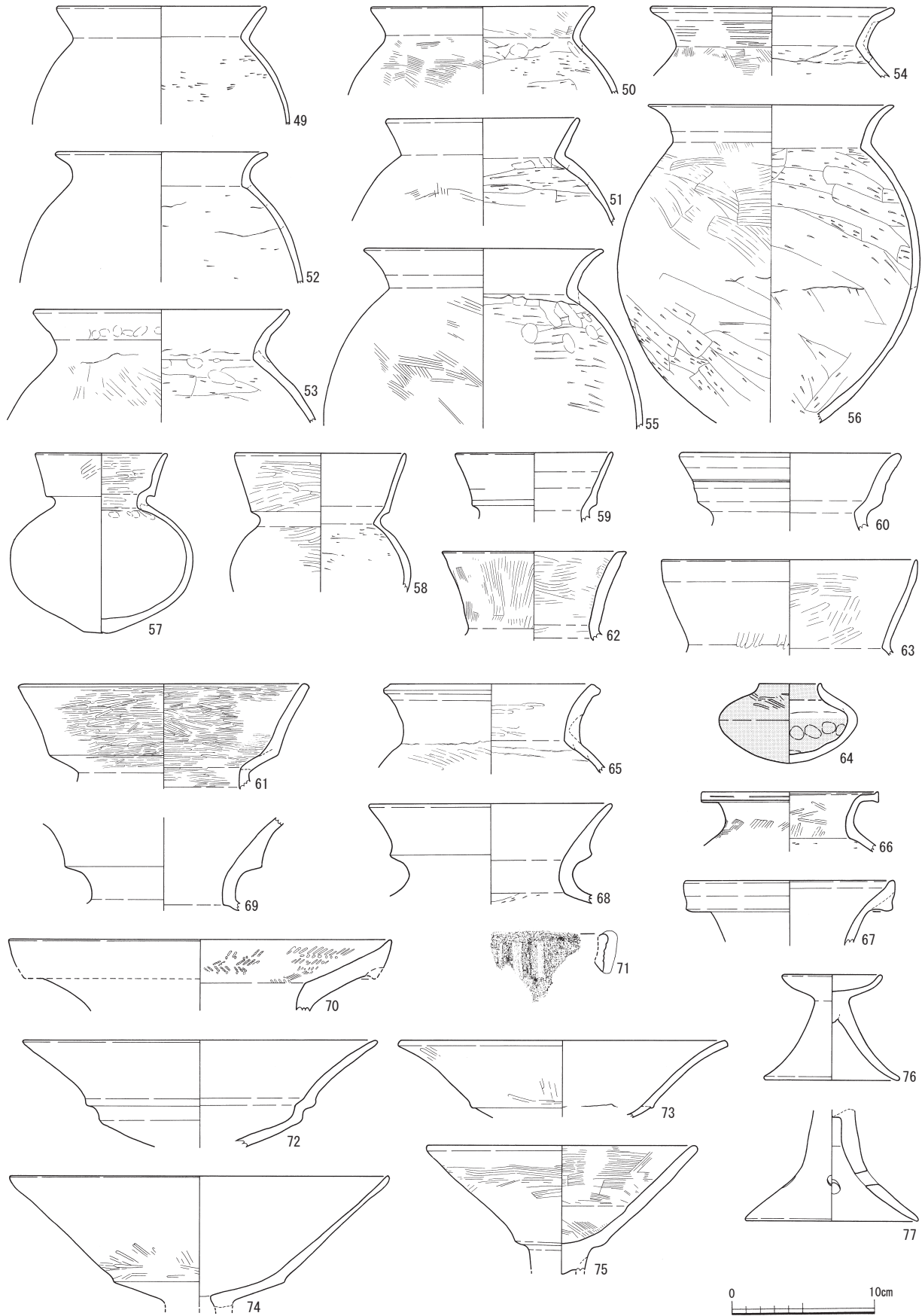
**土師器**（98） 甕（98）は、くの字状を呈し、口縁端部は外傾する狭小な面を有する。体部外面にタキ痕が残る。古墳時代中期のものと考えられる。

**須恵器**（99～101） 無蓋高坏（99）は7世紀初頭、口縁部外面に波状文を施す甕（100）は7世紀後半から8世紀前半、箱形に近い器形を呈する台付坏（101）は8世紀後半に帰属すると考えられる。

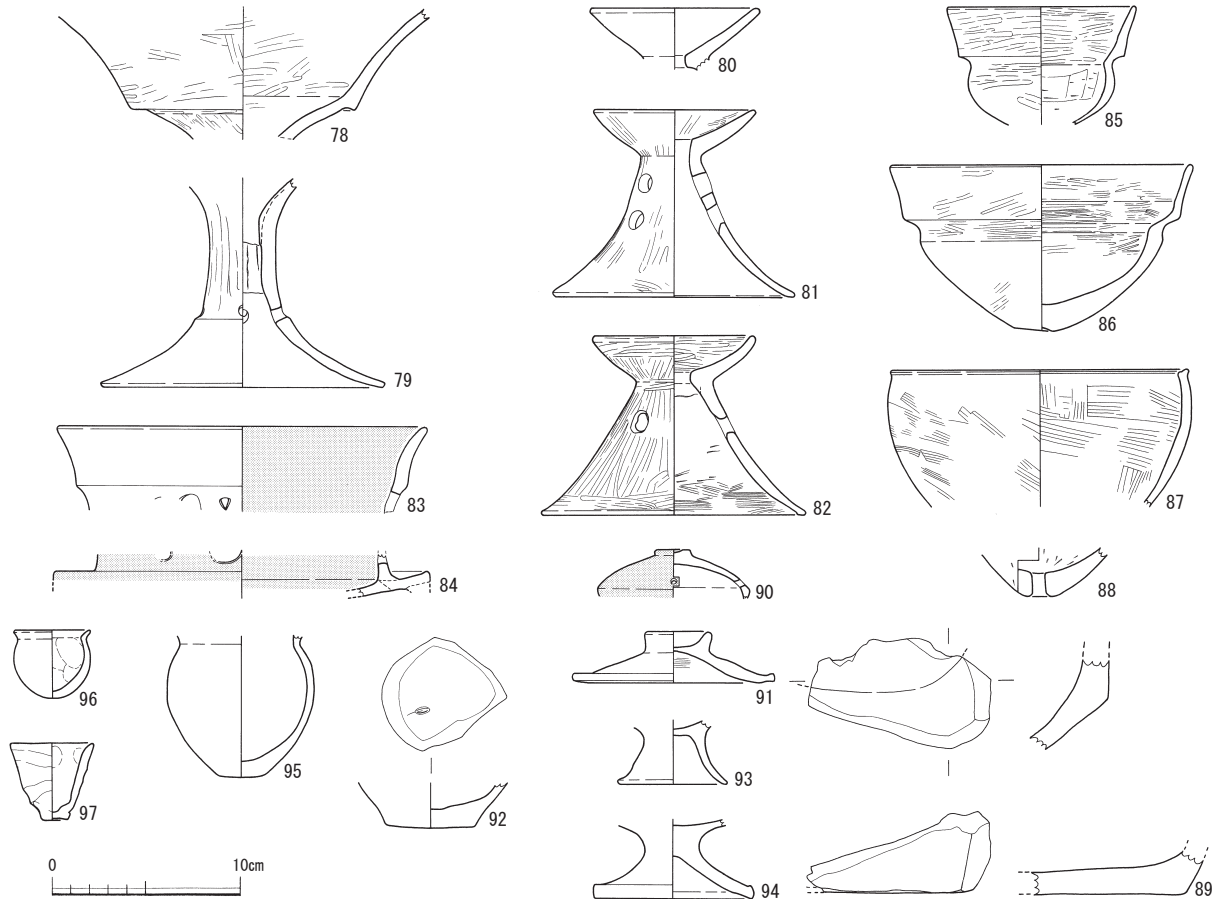
**土師質土器**（102～104） すべて手づくね成形の皿で、口径が9cm前後のものである。丸みのある底部から、口縁部が内湾気味に浅く立ち上がる。灯心油痕は認められない。13世紀後半～14世紀のものと考えられる。



第23図 包含層出土遺物実測図3 (縮尺1/4)



第24図 包含層出土遺物実測図4 (縮尺1/4)



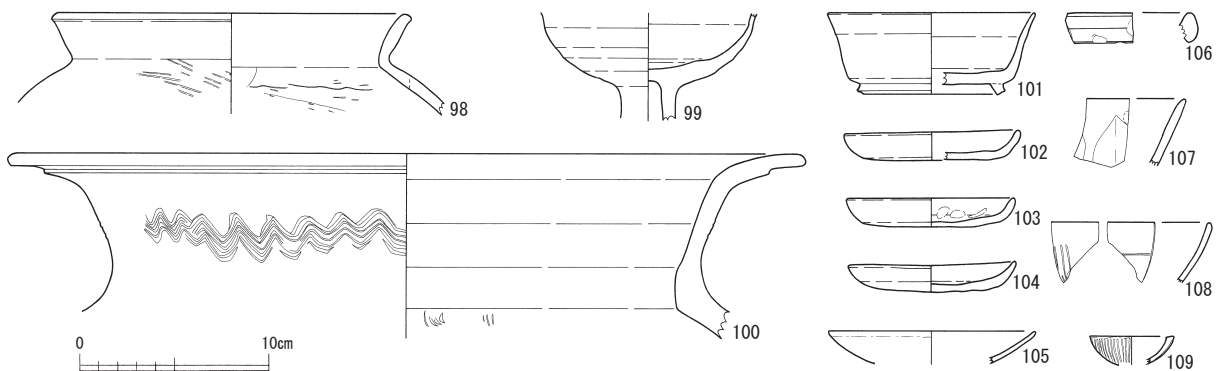
第25図 包含層出土遺物実測図5（縮尺1/4）

**磁器**（105～109） 輸入磁器の白磁（105・106）と青磁（107・108）、肥前系磁器（109）がみられるが、いずれも小片である。

白磁は2点図示する。皿（105）は内湾気味にひらく器形を呈し、体部下半は露胎である。106は口縁端部が玉縁状を呈する。碗の口縁部であろうか。

青磁はいずれも碗である。外面に鎗蓮弁文を有するもの（107）は、13世紀前半に比定される。内面に沈線、外面には線描の平行線がみられるもの（108）は、13世紀～14世紀の時期のものと考えられる。

紅皿（109）は型成形で貝殻形を呈し、内面と口縁部外面に白色釉を施す。18世紀～19世紀のものと考えられる。



第26図 包含層出土遺物実測図6（縮尺1/4）

## 2 石器・石製品（図版第13、第27・28図）

### 1) 概要

包含層出土として取り上げた石器・石製品は総計47点を数える。器種の内訳は打製石斧42点、磨石1点、敲石1点、砥石1点、石核1点、その他石製品（硯?）1点である。

### 2) 器種各説

**打製石斧（110～124）** 出土石器の大半を占める。完形品および欠損部分の少ない略完形品の計15点を図示した。地区別の出土点数には多寡があるが、特に集中する地区は認められない。少量ながら出土している縄文土器との関連性も見出し難く、ほとんどは出土土器の主体を占める弥生時代後期末～古墳時代初頭の所産と考える。石材は斑晶質の安山岩やデイサイトが多く用いられる。平面形状により次のように分類した。

1類：基部から刃部へ向かって側辺がわずかに広がるもの（110～114）。

2類：基部から刃部へ向かって側辺が大きく広がるもの。

a 種：側辺が直線的あるいはやや外湾するもの（115～117）。

b 種：側辺が緩やかに内湾するもの（118～121・124）。

c 種：側辺が括れて刃部が大きく張り出すもの（122・123）。

1類はいわゆる短冊形と撥形の間形態で、広義の短冊形に分類される場合もある。全長が最大幅の2倍以上のもの（110～112）と未満のもの（113・114）がある。111は出土した本器種のなかで最大を測り、端正な平面形を呈す。横長の剥片を素材とし、器体中央におよぶ平坦な剥離によって調整される。基部は素材剥片の腹面側が一回の剥離で大きく抉られ、刃部に比べ極端に薄くなっている。刃部側辺に成形時のものと考えられるつぶれが認められるが、その範囲以外では縁辺が鋭く遺存し、刃部の摩耗も観察されない。

2類はいわゆる撥形の一群で、形態はバラエティーに富む。ここでは上記のように側辺の形状から3種に細別した。a 種の115～117はいずれも基端部が尖り気味に成形されている。115は偏刃をなし、刃縁の摩耗が認められる。b 種は119のように側辺が全体的に内湾するものと、その他のように刃部側辺が外湾し洋梨形を呈するものがある。また、後者には内湾する箇所が基端部側に偏るもの（118）と器体中位にあるもの（120・121・124）に分けられる。118と120に残る自然面は極めて平滑であり、石皿を転用した可能性がある。c 種とした122は一方の側辺が直線的である。これは素材の破断面がそのまま残されているもので、もう一方の側辺についても調整剥離が急角度であることから、同様の破断面に対して加工が行われたと考えられる。板状の素材を成形のため意図的に折断したのかもしれない。

**磨石（125）** 125は小形の球状で、全面磨られている。一部に磨痕以前の敲打痕が認められる。

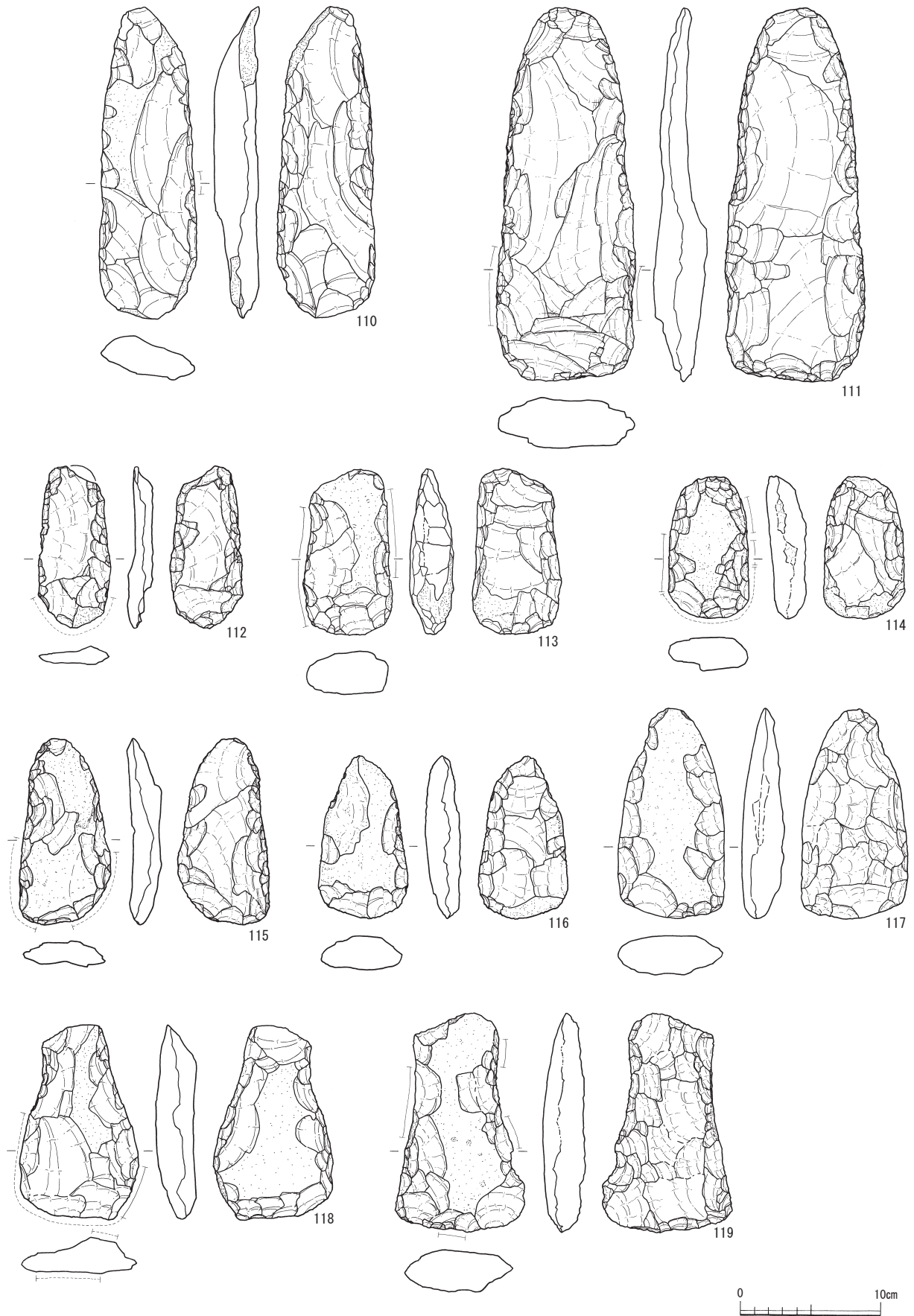
**敲石（126）** 126は楕円体状で、側縁の一部に敲打痕が認められる。

**砥石（127）** 127は方柱状で、小口を含む6面すべてを砥面とする。線状痕は明瞭で、断面「V」「レ」字状の深い傷痕も認められる。深い傷痕は器体長軸に対して直交もしくは大きく斜交する場合が多い。

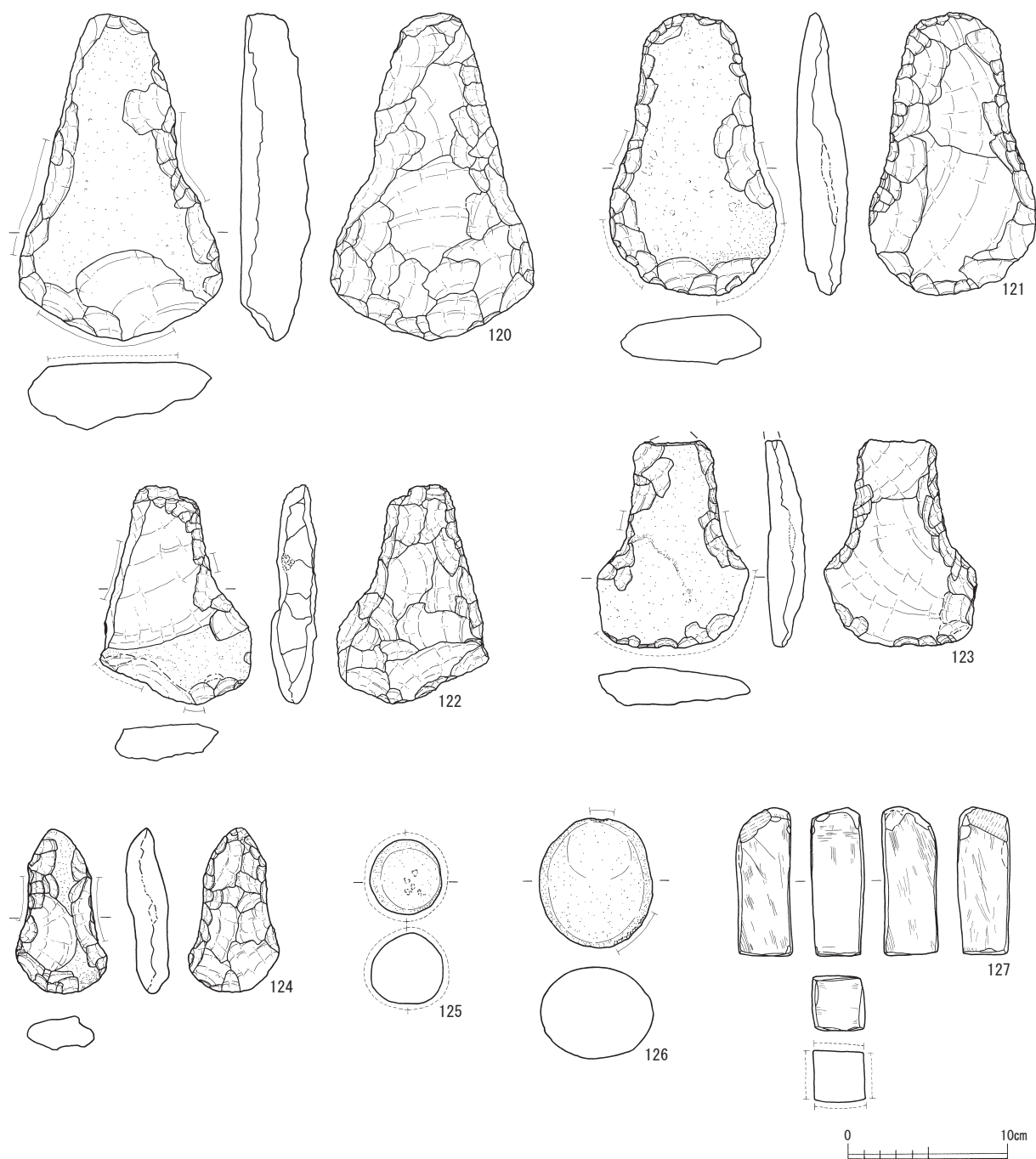
**石核** 図示していないが、チャートを利用した石核が1点出土している。板状を呈する。

**その他石製品** 図示していないが、直角をなす2側面をもつ板状の破片が1点出土している。側面には横方向の細かい線状痕が観察される。層状節理を有す黒色の石材を利用しており、表裏面は節理割れによる平坦面をなす。形状や石材から硯破片の可能性が高い。





第27図 包含層出土遺物実測図7（縮尺1/4）



第28図 包含層出土遺物実測図8（縮尺1/4）

### 3) 小結

遺構内出土も含め、上舌遺跡で今回得られた石器群は打製石斧を組成の主体とする。奥越地域では、勝山市発坂山ノ端遺跡など弥生時代後期末に主体をもついくつかの遺跡で打製石斧が多数出土しており、地域的な特徴として把握されている<sup>(1)</sup>。ほぼ同時期の所産と考えられる本石器群についても同様の地域的様相として理解できよう。

註

1 坪田聡子編 2004 『福井県埋蔵文化財調査報告第77集 発坂山ノ端遺跡－中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査3－』  
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

## 3 金属器（図版第14、第29図）

金属器は包含層である2層からテンバコ1箱分が出土している。多くは小片であり、銹化が激しい。図化が可能であった主要な金属器について報告を行う。

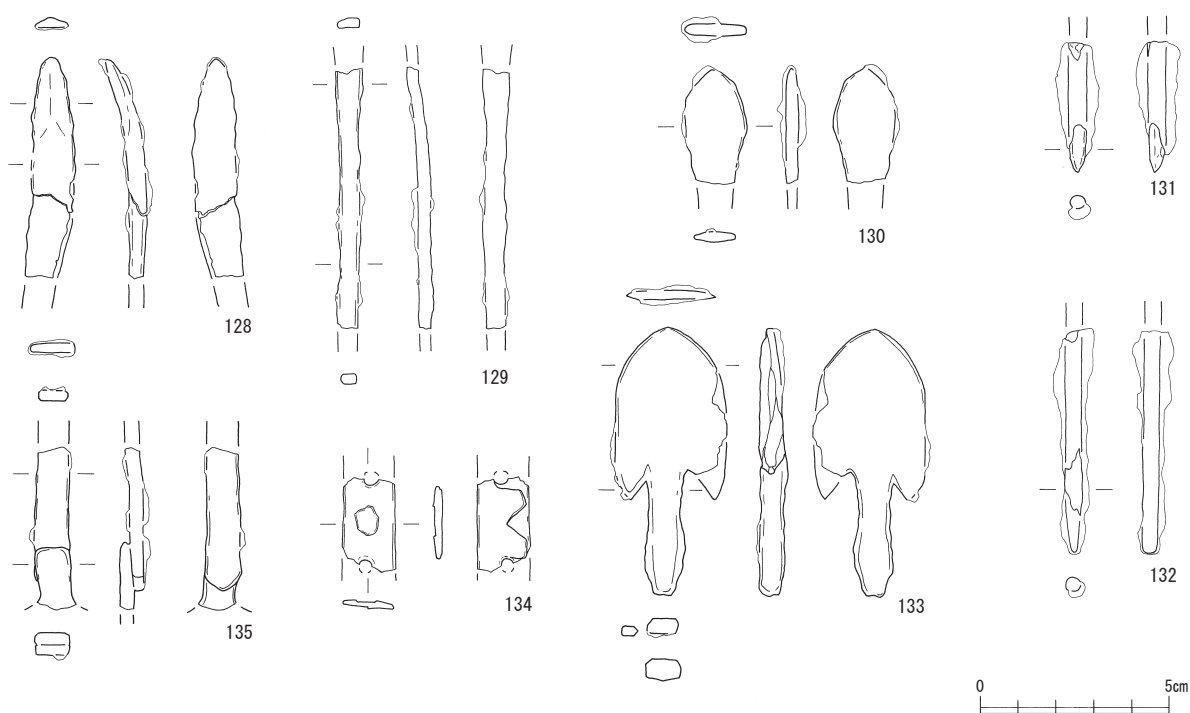
金属器には、鉞、鉄鏃、小札状鉄器、不明鉄製品がある。

**鉞（128）** 128はA1区で出土した。刃部先端と基部先端を欠損している。残存長5.8cm、幅は1.2cm、厚さ0.6cmを測る。刃部は中央に鑄があり、鋸状である。身部で平板化しており、裏すきは確認できない。身部断面形は長方形である。銹化のためか、やや左に変形している。

**鉄鏃（129～133）** 129は長頸鏃の頸部と推定できる。A4区で出土した。残存長は6.9cmである。断面形は長方形で、最大で0.7cmの幅がある。130は長頸鏃の鏃身部である。A2区で出土した。頸部以下を欠損する。扁平な両丸造りで、切先はあまり鋭さが無い。残存長は3.1cmである。131・132は長頸鏃の茎部である。131はC3区、132はC1区で出土した。両者とも茎部中央以上は方形を指向する傾向があるが、茎尻は円形である。131は残存長3.5cm、132は残存長5.9cmである。133は柳葉形で腸袂をもつ短茎式の鉄鏃である。A2区で出土した。茎部を欠損する。扁平な両丸造りで刃部は鋭利に作り出される。鑄は確認できない。頸部断面は方形である。残存長は7.1cm、幅3.1cm、厚さ0.5cmを測る。

**小札状鉄器（134）** 134はA2区で出土した。上下2箇所に直径0.4cmの紐孔が確認できる。残存長は2.5cmで、厚さは0.2cmと非常に薄い平板で作られている。表面の装飾は確認できないが、胡録金具の可能性も否定できない。

**不明鉄器（135）** 135はA3区で出土した。2個体の鉄器が銹化のため、貼り付いている。長い方の個体は先端が三角形で、上部を欠損する。短い方の個体は、上部は平坦で、下部はやや開いた形状になっているものと思われる。両者とも、断面形はともに方形で、厚さ0.3cmの均等な平板で作られている。端部が生きているものと推定できるため、鉄鏃とは考えがたく、器種は不明である。



第29図 包含層出土遺物実測図9（縮尺1/2）

## 第4章 工事立会の遺構と遺物

### 第1節 遺構と遺構出土遺物

#### S I 1 (第30・31図)

**遺構** 県道地区に位置する。住居の西端が確認できた。検出範囲では南北2.6mの規模がある。

**遺物** 壺(1)は、口縁部下端が突出する複合口縁を呈すると考えられ、古墳時代前期に比定される。

#### S P 26・27 (図版第14、第30・31図)

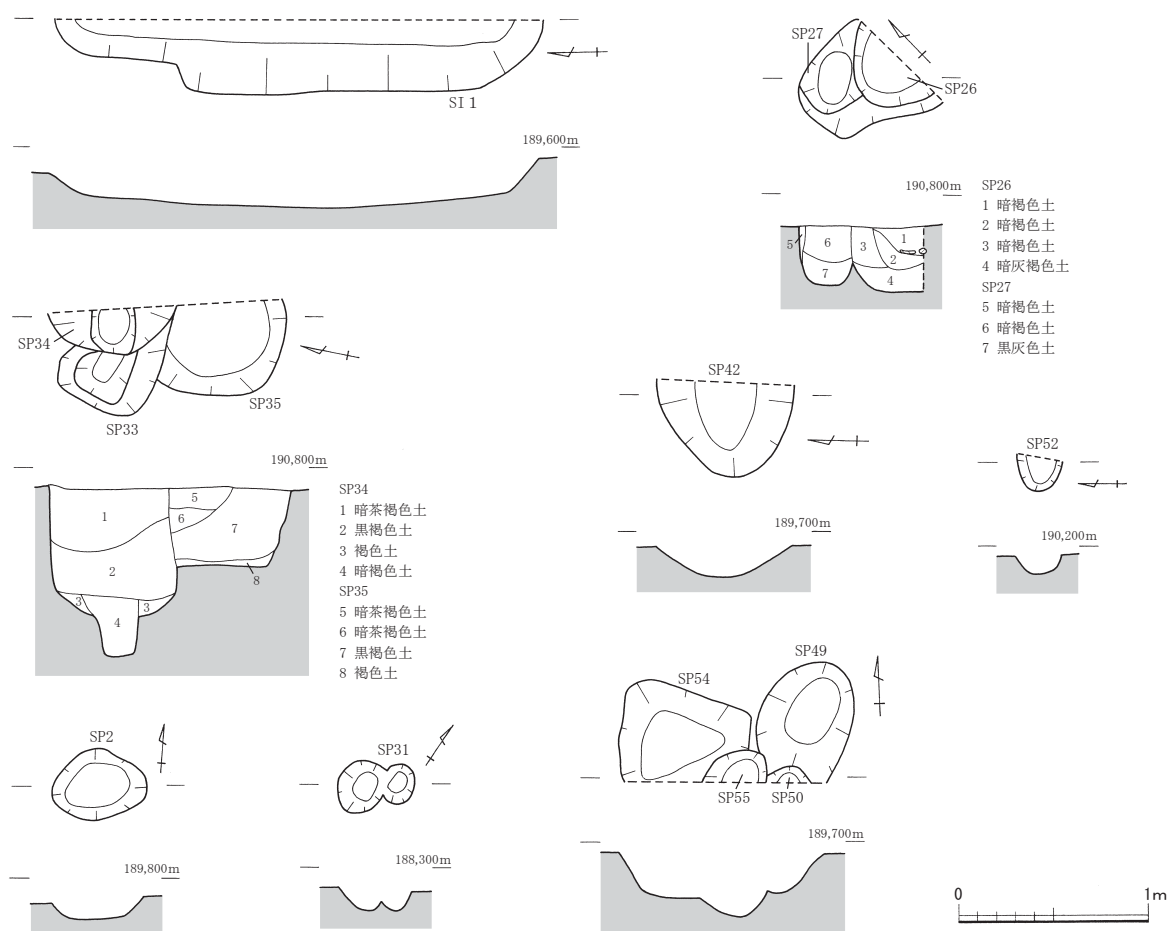
**遺構** 県道地区に位置する。掘立柱建物の柱穴が切り合っている。平面形は隅丸方形で、S P 26は一辺0.5m、S P 27は0.4mの規模を測る。S P 26には不明鉄器や須恵器が柱抜き取り後に埋納されていた。

**遺物** S P 26の出土遺物を図示する。須恵器の無台坏2点(2・3)は完形品で、8世紀に位置づけられる。不明鉄器(4)は、全長が37.8cmでL字形に折り曲げられている。先端は先細りする。

#### S P 33・34・35 (第30・31図)

**遺構** 県道地区に位置する。掘立柱建物の柱穴が切り合っている。すべて平面形は隅丸方形で、S P 33は一辺0.5m、S P 34は0.7m、S P 35は0.7m以上の規模を測る。底面は平坦である。

**遺物** S P 34で出土した須恵器の無台坏(5)と有台坏(6)、S P 35で出土した有台坏(8)は8世紀代に比定される。S P 35では古墳時代前期末～中期のものと思われる土師器の高坏脚部(7)も出土した。



第30図 立会地区遺構実測図 (縮尺1/40)



SP42 (第30・31図)

**遺構** 県道地区に位置する。浅い皿状の楕円形ピットである。検出範囲では最大0.7mの規模を測る。

**遺物** 土師器の甕(9)は、くの字状口縁を呈する。古墳時代初頭～前期のものと考えられる。

SP52 (第30・31図)

**遺構** 県道地区に位置する。小型楕円形のピットである。検出範囲では0.25mの規模がある。

**遺物** 土師器の甕(10)は、口縁端部が面取りされる。古代の長胴甕であろうか。

SD1 (第31図)

**遺構** 県道地区に位置する。詳細図は掲載できなかったが、県道に沿って南北6m以上の全長が検出された。幅0.2mで、逆台形の断面形を呈する。

**遺物** 須恵器の蓋(11)は、やや扁平な器形を呈すると推測され、8世紀の所産と考えられる。

SP2 (図版第14、第30・31図)

**遺構** 農道地区に位置する。楕円形の平底ピットである。長軸0.5m、短軸0.35mの規模を測る。

**遺物** 土師質皿(12)はやや深身で、比較的厚みのある器壁をもつ。13世紀後半～14世紀に比定される。

SP31 (第30・31図)

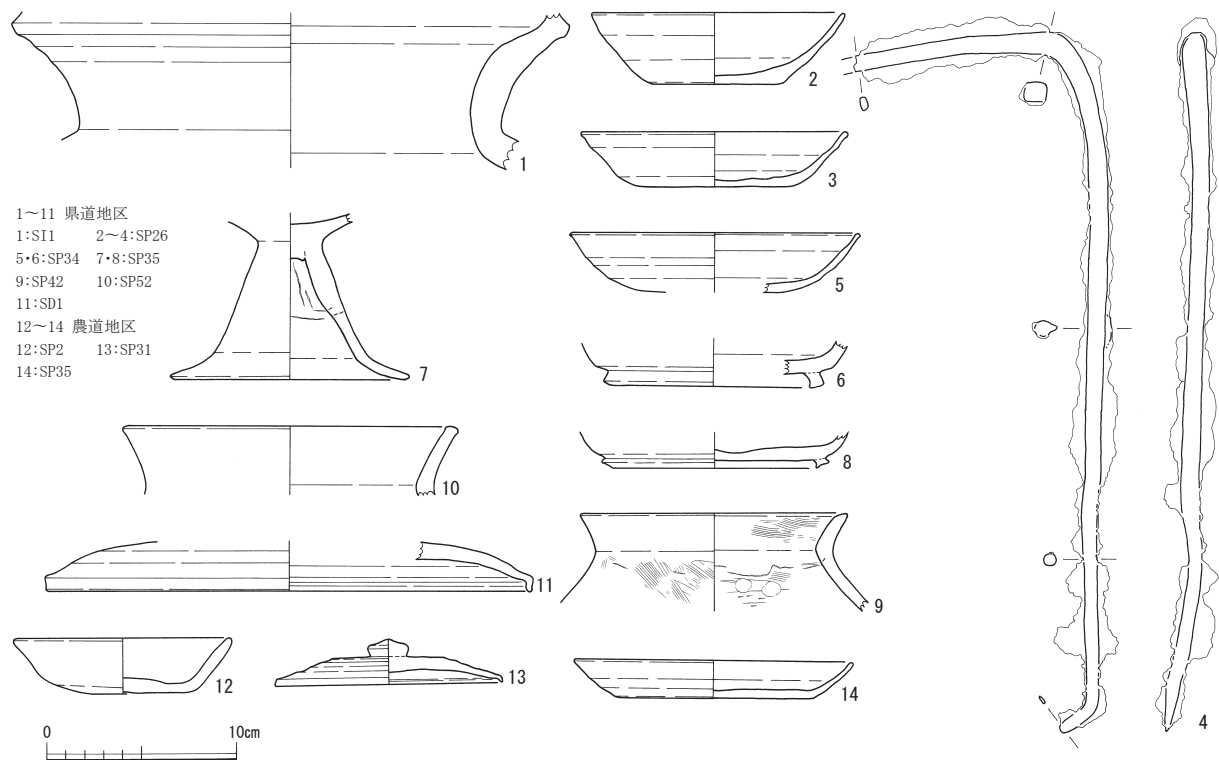
**遺構** 農道地区に位置する。2基の小型円形ピットが切り合い、瓢箪形になっている。西側のピットが直径0.2m、東側が0.1mの規模を測る。

**遺物** 須恵器の蓋(13)は、天井部に平坦面をもつ扁平な器形を呈する。8世紀代のものと考えられる。

SP55 (第30・31図)

**遺構** 農道地区に位置する。複数ピットが切り合っている。SP55はその中央に位置する最も深い部分で確認できた。残存の平面形は楕円形であるが、本来の形状は不明である。

**遺物** 須恵器の皿(14)は口縁部が内湾気味に立ち上がる。8世紀の所産と考えられる。



第31図 立会地区遺構出土遺物実測図(縮尺1/4)

## 第2節 包含層出土遺物

テンバコ6箱分が出土しているが、図示できたのは県道地区の包含層から出土したものに限られる。

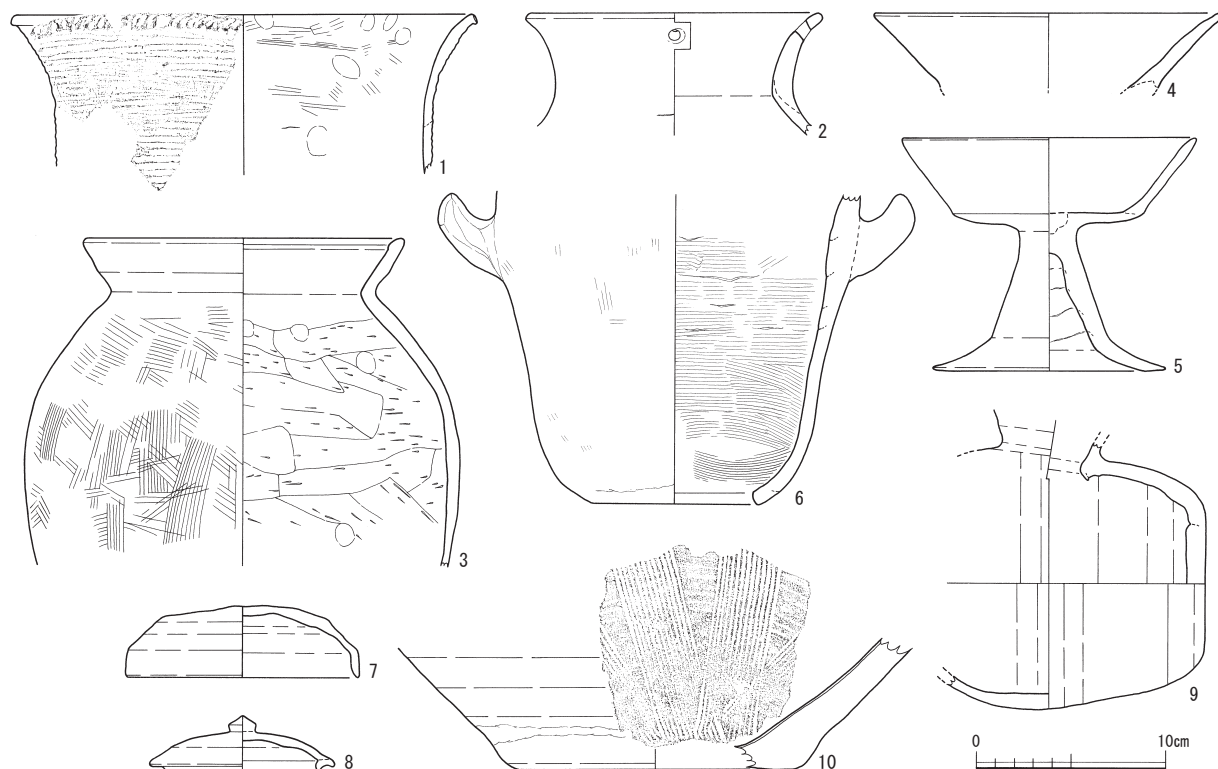
## 土器・陶器（図版第14、第32図）

**弥生土器（1・2）** 甕（1）は体部がほとんど張らない器形を呈し、端部に刻みを施した口縁部は緩やかに外反してわずかにひらく。外面は条痕、内面は指頭圧痕とハケを施す。条痕は貝殻によるものではない。弥生時代中期中葉に位置づけられる。壺（2）は、くの字状口縁を呈し、口頸部は緩やかに外反してひらく。口縁端部付近には穿孔があり、1孔しか残存していないが、対面にもう1孔あった可能性が考えられる。弥生時代後期末～古墳時代初頭の時期のものと考えられる。

**土師器（3～6）** 甕（3）は口唇部を肥厚させる「布留系」の口縁をもち、口唇部端面は内傾する。長胴を呈するとみられる体部の外面には、肩部を中心にヨコ・斜め方向のハケ、下半はタテ・ヨコ・斜めのすべての方向のハケを施し、「布留系」甕形土器特有の調整の規則性は認められない。古墳時代前期のものと考えられる。高坏（4・5）は畿内に系譜をもつと考えられる。5は平坦な坏底部から屈曲してひらく坏部を有し、脚部は脚柱部から強く屈曲して脚裾部に至る。4は坏部上半のみ確認するが、5と同様の器形を呈すると推測される。古墳時代中期末～後期前半のものと考えられる。甗（6）は体部の側面に一對と推測される把手を有し、内外面ともハケ調整を施す。古墳時代中期後半～後期の時期のものと考えられる。

**須恵器（7～9）** 坏蓋（7）は天井部と口縁部の境界に鈍い稜を有し、口縁部はほぼ直立する。TK43型式に相当すると考えられる。蓋（8）は壺に伴うと考えられるものである。天井部に宝珠形のつまみが付き、かえりが口縁端部よりも下方に突出している。TK217型式に相当すると考えられる。横瓶（9）は小型の俵形を呈し、体部はロクロ成形によって形作る。底部側面は平底のままで仕上げている。

**越前焼（10）** 播鉢（10）は分厚い底部から直線的にひらく器形を呈し、16世紀代の所産と考えられる。



第32図 立会地区包含層出土遺物実測図（縮尺1/4）

第2表 縄文土器観察表

挿図 番号	グリッド	出土地	器種	部位	器厚(cm)		施文・調整			色調		胎土	焼成	備考
					最小	最大	外面	内面	底部	外面	内面			
20-5	A4-2	SK14	浅鉢	頸胴部	0.4	0.5	平行沈線・突帯文	ナデ		2.5Y5/2 暗灰黄色	10YR7/4 にぶい・黄褐色	2mm以下の砂粒を少量含む	良	外面赤彩
20-8	B1-4	SP64	深鉢	口縁部	0.8	1.1	縄文LR	ケズリのちナデ		10YR6/3 にぶい・黄褐色	10YR6/3 にぶい・黄褐色	2mm以下の砂粒を少量含む	良	
20-10	A4-2	SP146	浅鉢	底部	0.4	0.7	平行沈線・爪形文・縄文LR	ナデ	ナデ・ユビオサエ	10YR7/4 にぶい・黄褐色	7.5YR7/6 褐色	2mm以下の砂粒を少量含む	良	底径12.0cm 外面赤彩
21-1	A3-2	1層・2層	深鉢	口縁部 付近	0.5	0.6	突帯文・縄文LR	ナデ		2.5Y7/3 浅黄色	2.5Y8/3 淡黄色	2mm以下の砂粒を少量含む	良	
21-2	A4-1	2層	深鉢	口縁部 付近	0.4	0.4	突帯文・縄文LR	ナデ		10YR4/2 灰黄褐色	10YR6/3 にぶい・黄褐色	2mm以下の砂粒を少量含む	やや 不良	
21-3	A4-1	2層	深鉢	口縁部 付近	0.4	0.5	突帯文・縄文LR	ナデ		10YR3/1 黒褐色	10YR6/3 にぶい・黄褐色	2mm以下の砂粒を少量含む	良	外面スス附着
21-4	B3-1	2層	深鉢	胴部	0.8	0.9	沈線・縄文LR	ナデ		2.5Y8/4 淡黄色	10YR7/3 にぶい・黄褐色	4mm以下の砂粒を多量含む	良	
21-5	A4-3	2層	深鉢	口縁部	0.5	0.7	沈線・ナデ	ナデ		10YR7/3 にぶい・黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	2mm以下の砂粒を少量含む	良	液状口縁
21-6	A2-4	2層	深鉢	口縁部	0.5	0.7	沈線・ナデ	ナデ		10YR7/2 にぶい・黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色	2mm以下の砂粒を少量含む	良	液状口縁
21-7	A4-3	1層	深鉢	頸胴部	0.6	0.8	沈線・ナデ	ナデ		10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/2 灰白色	2mm以下の砂粒を多量含む	良	
21-8	A4-3	1層	鉢?	胴部	0.6	0.7	沈線・ミガキ?	ナデ		10YR6/3 にぶい・黄褐色	10YR8/2 灰白色	2mm以下の砂粒を多量含む	良	
21-9	A4-3	1層	深鉢	胴部	0.7	0.8	沈線・ナデ	ナデ		10YR4/1 褐灰色	10YR8/2 灰白色	2mm以下の砂粒を中量含む	良	
21-10	A4-3	2層	鉢?	胴部	0.6	0.7	沈線・ナデ	ナデ		10YR8/2 灰白色	10YR7/2 にぶい・黄褐色	2mm以下の砂粒を中量含む	やや 不良	
21-11	A4-3	2層	深鉢?	胴部	0.5	0.6	沈線・ナデ	ナデ		10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	2mm以下の砂粒を多量含む	やや 不良	
21-12	A4-3	2層	深鉢?	胴部	0.7	0.8	貝殻腹縁文	ナデ		10YR6/3 にぶい・黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	やや 不良	
21-13	A5-1	2層	深鉢	胴部	0.7	0.8	羽状縄文LR・RL	ナデ		10YR7/4 にぶい・黄褐色	10YR7/4 にぶい・黄褐色	2mm以下の砂粒を多量含む	良	
21-14	A4-2 A5-1	2層	深鉢	胴部	0.7	0.8	縄文LR	ナデ		10YR6/3 にぶい・黄褐色	7.5YR7/4 にぶい・橙	3mm以下の砂粒を多量含む	良	
21-15	A5-1	2層	深鉢	胴部	0.7	0.8	縄文LR	ナデ		10YR7/4 にぶい・黄褐色	10YR7/4 にぶい・黄褐色	3mm以下の砂粒を多量含む	良	
21-16	A5-1	2層	深鉢	胴部	0.7	0.8	縄文LR	ナデ		10YR4/1 褐灰色	10YR7/4 にぶい・黄褐色	2mm以下の砂粒を中量含む	良	
21-17	A2-3	2層	深鉢	胴部	0.7	0.8	縦位帯縄文RL	ナデ		10YR8/3 浅黄褐色	7.5YR7/4 にぶい・橙	3mm以下の砂粒を多量含む	良	

第3表 弥生土器・土師器観察表

挿図 番号	グリッド	出土地	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率/12 口縁部 底部	調整・施文・施軸			色調		胎土	焼成	備考	
								外面	内面	底部	外面	内面				
6-1	B1	SI1	甕	16.9			1.4	ナデ・擬凹線(10)・ハケ	ナデ・指頭圧痕・ケズリ		7.5YR8/4 浅黄褐色	10YR7/4 にぶい・黄褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス附着	
6-2	B1-1	SI1 1層・2層	甕	21.8			3.0	ナデ・擬凹線(4)	ナデ・指頭圧痕・ケズリ		10YR7/4 にぶい・黄褐色	10YR7/4 にぶい・黄褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良		
6-3	B1-1	SI1 SK1	甕	16.7			1.8	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ		10YR7/4 にぶい・黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	やや不良	外面スス附着	
6-4	B1	SI1 2層	甕	17.4			2.2	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ・指頭圧痕		2.5Y7/3 浅黄色	2.5Y8/3 淡黄色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス附着	
6-5	B1	SI1 1層	甕	24.4			0.8	ナデ	ナデ		10YR7/4 にぶい・黄褐色	10YR7/4 にぶい・黄褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良		
6-6	B1	SI1	壺	15.2			11.5	摩滅	ナデ・ケズリ		10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良	外面スス附着	
6-7	B1	SI1	底部		2.9		12.0	ハケ	ケズリ	ケズリ	10YR6/4 にぶい・黄褐色	10YR7/4 にぶい・黄褐色	1～2mm程度の砂粒を多量含む	良	外面スス附着	
6-8	B1-1	SI1 1層	高坏	13.9			0.5	ミガキ・ハケのちミガキ	ミガキ		10YR6/3 にぶい・黄褐色	10YR7/3 にぶい・黄褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良		
6-9	B1	SI1	高坏					ミガキ	摩滅		10YR8/4 浅黄褐色	10YR7/4 にぶい・黄褐色	1mm程度の砂粒を多量に含む	良		
6-10	B1	SI1 1層	高坏	22.6			1.5	摩滅	摩滅・ミガキ		10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良		
6-11	B1	SI1	高坏	25.3	13.8	18.35	11.5	12.0	ミガキ・ケズリのちミガキ	ミガキ・ケズリのちミガキ・しぼり		10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	砂粒をほとんど含まない	良	小孔(3)
6-12	B1	SI1	高坏	25.9	14.55	19.7	7.2	6.6	摩滅	しぼり・ハケ		5YR7/6 褐色	7.5YR8/6 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒やや多量に含む	良	小孔(3)
6-13	B1	SI1 2層	鉢	18.9			0.9	ナデ	ナデ		10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良	外面スス附着	
9-1	B1-3	SI2 1層	甕	17.2			10.0	ナデ・擬凹線	ナデ		10YR8/3 浅黄褐色	10YR7/4 にぶい・黄褐色	1～2mm程度の砂粒中量含む	良		
9-2	B1-4	SI2	甕				2.9	ナデ・擬凹線(9)・ハケ	ナデ・ケズリ		10YR7/4 にぶい・黄褐色	10YR6/4 にぶい・黄褐色	1～2mm程度の砂粒を多量に含む	良	外面スス附着	
9-3	B1-4	SI2 1層・2層	甕	17.7			8.9	ケズリ・ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ		10YR8/4 浅黄褐色	2.5Y7/2 灰黄色	1～3mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス附着・内面コゲ附着	
9-4	B1	SI2 2層	甕	15.9			3.2	ナデ・ハケ	ナデ・指頭圧痕・ケズリ		7.5YR7/4 にぶい・橙	10YR8/4 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス附着	
9-5	B1-4	SI2 1層	甕	13.6	6.0	20.95	6.9	7.0	ナデ・指頭圧痕・ハケ・ケズリ	ケズリ・指頭圧痕	ケズリ	10YR7/4 にぶい・黄褐色	10YR7/4 にぶい・黄褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス附着
9-6	B1-3	SI2	甕	17.8			2.0	ナデ・ハケ	ナデ・指頭圧痕・ケズリ		10YR4/1 褐灰色	2.5Y8/3 淡黄色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス附着	
9-7	B1-4	SI2 1層	甕	13.5			2.0	ナデ	ナデ・指頭圧痕・ケズリ		10YR8/4 浅黄褐色	2.5Y8/3 淡黄色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス附着	
9-8	B1-4	SI2 1層	甕	14.4			4.7	ナデ・ハケ	ハケ・ケズリ		10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/6 黄褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス附着・内面コゲ附着	
9-9	B1-4	SI2 1層・2層	甕	16.9			4.8	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ		2.5YR8/3 浅黄色	10YR8/3 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒をやや多量に含む	良	外面スス附着・外面に黒斑あり	
9-10	B1-3	SI2	甕	17.15	2.2	18.7	2.2	12.0	ナデ・ハケ・ケズリ	ナデ・ケズリ	ケズリ	7.5YR7/4 にぶい・橙	7.5YR7/4 にぶい・橙	1mm程度の砂粒を多量に含む	良	外面スス附着・底部穿孔
9-11	B1-4	SI2 P6	甕	16.9		20.7	10.0	12.0	ナデ・ケズリ	ナデ・ケズリ		10YR7/4 にぶい・黄褐色	7.5YR7/6 褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス附着
9-12	B1-4	SI2 SK1・2層	甕	17.8			2.2	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ		10YR8/4 浅黄褐色	2.5Y8/2 灰白色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス附着	
9-13	B1-4	SI2 1層	甕	16.1			5.0	ナデ・ハケのちナデ・ハケ	ナデ・ケズリ		7.5YR6/6 褐色	7.5YR6/6 褐色	1mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス附着	
9-14	B1-4	SI2	壺	15.3			8.2	ナデ・ハケ	ナデ・指頭圧痕・ケズリ		5YR6/6 褐色	5YR7/6 褐色	1mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス附着	
9-15	B1-4	SI2	甕	17.9				ナデ・ハケ	ナデ・指頭圧痕・ケズリ		10YR8/6 黄褐色	10YR6/4 にぶい・黄褐色	1mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス附着・内面コゲ附着	
9-16	B1-4	SI2	甕	21.8			2.2	ナデ・ハケ	ナデ・指頭圧痕・ケズリ		10YR6/4 にぶい・黄褐色	7.5YR7/6 褐色	1mm以下の砂粒を多量に含む	良	外面スス附着	
10-17	B1-4	SI2 1層	体部					ナデ・ハケ・液状文(1)	指頭圧痕・ケズリ		10YR7/4 にぶい・黄褐色	10YR7/4 にぶい・黄褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良		
10-18	B1-4	SI2 1層・2層	底部	2.5			12.0	ケズリ	ケズリ	ケズリ	10YR6/4 にぶい・黄褐色	10YR7/4 にぶい・黄褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス附着・内面に黒斑あり	
10-19	B1-4	SI2 1層	壺	11.8		13.2	9.0	ミガキ	ミガキ・ケズリ	ミガキ	7.5YR7/6 褐色	7.5YR7/6 褐色	1～2mm程度の砂粒やや多量含む	良	外面スス附着	
10-20	B1-4	SI2	壺					摩滅	ナデ・ハケ・ケズリ		10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1mm以下の砂粒を多量に含む	良		
10-21	B1-4	SI2 P4・1層	壺	13.8			3.8	ナデ・ハケ	ナデ・指頭圧痕・ケズリ		5YR6/8 褐色	5YR6/8 褐色	1mm程度の砂粒を中量含む	良		

挿入 番号	グリッド	出土地	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率/12		調整・施文・施釉			色調		胎土	焼成	備考
							口縁部	底部	外面	内面	底部	外面	内面			
10-22	B1	SI2 1層	壺	12.8			3.0		ナデ・ハケ	ナデ・指頭圧痕		2.5Y6/2 灰黄色	2.5Y4/1 黄灰色	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良	外面スス付着・ 内外面に黒斑あり
10-23	B1-4	SI2	壺	16.4	5.6	29.8	1.0	12.0	摩滅・ケズリ・ナデ	摩滅・ケズリ	ケズリ	7.5YR7/8 黄褐色	7.5YR7/8 黄褐色	1～2mm程度の砂粒を多量に含む	良	外面黒斑あり
10-24	B1-4	SI2 1層	壺	17.5			1.6		ナデ・ミガキ	摩滅		5YR7/8 褐色	7.5YR7/6 褐色	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良	
10-25	B1-4	SI2	壺	10.15		12.15	12.0	12.0	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ・指頭 圧痕	ハケ	7.5YR7/4 にぶい黄褐色	7.5YR7/4 にぶい黄褐色	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良	外面スス付着
10-26	B1-4	SI2	壺	9.1			6.2		摩滅	指頭圧痕・ケズリ		7.5YR7/6 褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス付着
10-27	B1-4	SI2 1層・2層	壺	10.7			5.9		ミガキ	ミガキ・指頭圧痕・ ナデ		7.5YR7/6 褐色	7.5YR7/6 褐色	1mm以下の砂粒を中量含む	良	
10-28	B1-4	SI2	壺						ミガキ・摩滅	ナデ・摩滅		5YR6/8 褐色	2.5YR6/2 灰黄色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	
10-29	B1	SI2 1層	壺						ハケのちミガキ	ハケ・ナデ		7.5YR7/6 褐色	7.5YR7/6 褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	内面コゲ付着
10-30	B1-4	SI2	壺	24.3			5.2		ハケのちミガキ	ミガキ		7.5YR6/6 褐色	7.5YR7/6 褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	
10-31	B1	SI2 SK1	高坏	20.2			3.5		摩滅	摩滅		5YR7/6 褐色	5YR7/6 褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	やや 不良	
10-32	B1-4	SI2 P2・1層	高坏	11.9	18.3	12.05	10.1	7.9	ハケ	摩滅・しほり・ハケ		5YR7/8 褐色	5YR7/8 褐色 5YR7/6 褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	小孔2孔1対(3)
10-33	B1-4	SI2	高坏	11.5	14.4	10.8	7.3	4.0	摩滅	ナデ・摩滅		7.5YR8/6 浅黄褐色	7.5YR8/6 浅黄褐色	1mm程度の砂粒を少量含む	良	小孔(4)
10-34	B1-4	SI2	高坏				12.0		8.8 摩滅	摩滅・ナデ・ハケ		5YR6/8 褐色	5 YR5/6 明赤褐色	1～2mm程度の砂粒を多量に含む	やや 不良	小孔(3)
10-35	B1-4	SI2 2層	高坏	12.1	18.5	10.8	7.2	4.0	摩滅	ナデ・ハケ・ケズリ		5YR7/6 褐色	5YR7/6 褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	小孔(3)
10-36	B1-3	SI2 1層	高坏	13.0			4.2		ミガキ	ミガキ		10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	
10-37	B1	SI2 1層	脚部		12.8			1.5	ミガキ	ナデ		7.5YR6/6 褐色	5YR6/6 褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	小孔(3)
10-38	B1-4	SI2 1層	鉢	9.8		4.95	4.9		摩滅	摩滅	摩滅	7.5YR7/6 褐色	5YR7/8 褐色	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良	
10-39	B1	SI2 P5・2層	鉢	11.4			2.7		ナデ	ケズリ		10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR7/3 にぶい黄褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	内面に黒斑あり
10-40	B1-4	SI2	鉢	9.0	3.8	5.25	2.5	7.0	ナデ	ナデ	ナデ	2.5YR7/3 浅黄色	10YR8/4 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	底面に黒斑あり
10-41	B1-4	SI2	鉢	6.8	3.5	5.25	12.0	12.0	ナデ・指頭圧痕	ナデ・ハケ	ナデ	2.5Y8/3 淡黄色	10YR8/4 浅黄褐色	1mm以下の砂粒を中量含む	良	内面に黒斑あり
13-1	A2	SI3 1層	甕	19.1			0.4		ナデ・擬凹線(9)	ナデ・指頭圧痕・ ハケ		10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1mm程度の砂粒を多量に含む	良	
13-2	A2-4	SI3	甕	16.4			1.3		ナデ	ナデ・ハケ・ケズリ		2.5Y8/3 淡黄色	2.5Y8/3 淡黄色	1～2mm程度の砂粒を多量に含む	良	内面に黒斑あり
13-3	A2-4	SI3 2層	甕	20.4			4.3		ナデ・タタキ・ケ ズリ	ナデ・ケズリ		10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を多量に含む	良	外面スス付着
13-4	A2-4	SI3	甕	18.3			2.7		ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ		10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR7/3 にぶい黄褐色	1～3mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス付着
13-5	A2-3 A2-4	SI3	甕	18.8			3.6		ナデ・指頭圧痕	ナデ・ケズリ		10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	1～3mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス付着・ 外面に黒斑あり
13-6	A2	SI3 1層	壺	12.5			1.4		ナデ	ナデ・ケズリ		2.5Y8/3 淡黄色	2.5Y7/2 灰黄色	1～3mm程度の砂粒を中量含む	良	
13-7	A2-3	SI3 1層	壺	20.0			0.7		ナデ	ナデ		10YR6/4 にぶい黄褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	
13-8	B2-1 B2-2	SI3 1層	高坏	19.3			1.6		ミガキ	ミガキ		10YR7/4 明黄褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	
13-9	A2	SI3 1層	高坏	12.4			1.5		ミガキ	ミガキ		10YR7/6 明黄褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色	1mm程度の砂粒を少量含む	良	
13-10	A2	SI3 1層	脚部		14.4			2.3	ナデ	ナデ		10YR8/3 浅黄褐色	N3/ 暗灰色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	
13-11	A2-3	SI3 P4・2層	脚部		11.2			2.9	摩滅	摩滅		10YR6/4 にぶい黄褐色	5YR6/8 褐色	1mm程度の砂粒を少量含む	やや 不良	小孔2孔1対 (残存1)
13-12	A2-3 A2-4	SI3 2層	鉢	14.2		7.85	3.8		ナデ・ケズリ	ナデ・ケズリ		10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を多量に含む	良	外面スス付着
18-1	A1-4	SB3 SP47	甕	17.3			2.8		ナデ・擬凹線(5)・ ハケ	ナデ・指頭圧痕・ ハケ・ケズリ		10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1～3mm程度の砂粒を多量に含む	良	外面に黒斑あり
20-1	A1-1	SK3	甕	16.5			2.6		ナデ・擬凹線(4～ 5)・ハケ	ナデ・ケズリ		10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR7/3 にぶい黄褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス付着
20-2	A1-1	SK3・2層	甕	22.7			2.5		ナデ・擬凹線(8)・ ハケ	ナデ・指頭圧痕・ ハケ・ケズリ		7.5YR7/4 にぶい黄褐色	7.5YR7/6 褐色	1mm程度の砂粒を少量含む	良	外面スス付着
20-4	A2-1	SK6	甕	15.1			2.5		擬凹線(1)・ハケ・ 摩滅	摩滅・ケズリ		7.5YR8/6 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1～3mm程度の砂粒を多量に含む	やや 不良	
20-6	A1-1	SP24	甕	14.9			4.5		擬凹線(8)・ナデ・ ケズリ	ナデ・指頭圧痕・ ケズリ		7.5YR8/6 浅黄褐色	7.5YR7/6 褐色	1～2mm程度の砂粒を多量に含む	良	外面スス付着・ 内面コゲ付着
20-7	B2-1	SP58	脚部		13.8			5.8	ミガキ・摩滅	摩滅		10YR8/6 黄褐色	10YR8/6 黄褐色	1mm以下の砂粒を多量に含む	良	小孔2孔1対(3)
20-9	A2-4	SP91・2層	甕	14.3			3.8		ナデ・ハケ	ナデ・ハケ・ケズリ		10YR7/3 にぶい黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を多量に含む	良	外面スス付着
20-12	東松 張区	SP174	脚部		11.6			10.2	ミガキ	しほり・指頭圧痕・ ナデ		2.5Y7/3 浅黄色	2.5Y7/3 浅黄色	1～3mm程度の砂粒を中量含む	良	
20-13	A3-3	SP248	甕	15.5			2.9		ナデ・擬凹線(5)・ ハケ	ナデ・ケズリ		7.5YR8/6 浅黄褐色	2.5YR6/8 褐色	1～2mm程度の砂粒を多量に含む	良	外面に黒斑あり
20-14	B3-1	SP306	甕						ナデ・直線文・列 点文・ハケ	ナデ・ケズリのち ナデ		10YR6/3 にぶい黄褐色	2.5Y8/2 灰白色	1～3mm程度の砂粒を少量含む	良	外面スス付着・ 内面に黒斑あり
22-18	A2-2	1層	甕	19.0			1.2		ナデ・刻み・ハケ	ハケ		10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1mm程度の砂粒を少量含む	良	外面スス付着
22-19	A2-3	2層	甕	21.8			2.8		ハケ・ハケのち列 点文・ハケのち直 線文(4)	ナデ・ハケ・指頭 圧痕		10YR6/4 にぶい黄褐色	10YR6/4 にぶい黄褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス付着
22-20	A2-1	2層	壺						ナデ・棒状浮文・ 列点文・ハケ	ハケ		10YR8/6 黄褐色	2.5Y7/3 浅黄色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	
22-21	B3-1	2層	壺						綾杉文	摩滅		2.5Y7/3 浅黄色	10YR7/4 にぶい黄褐色	1mm程度の砂粒を少量含む	やや 不良	
22-22	B2-1	2層	甕	16.0			2.0		ナデ・擬凹線(1)・ ハケ	ナデ		2.5YR7/6 褐色	2.5Y7/2 灰黄色	1～2mm程度の砂粒を多量に含む	良	
22-23	A2-1 B2-2 A2-3	2層	壺	17.2			6.0		擬凹線(2～3)・ナ デ・ハケ・ハケの ちミガキ	ナデ・ハケ		10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	
22-24	A3-2	2層	体部						摩滅・列点文・直 線文	ナデ・ケズリ		10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	1mm程度の砂粒を中量含む	良	
22-25	C5-1	1層	器台	21.5			1.0		擬凹線(1)・ナデ・ ミガキ・剥離	ナデ・ミガキ		10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	
23-26	A1-2	2層	甕	17.0			1.5		ナデ・擬凹線(5)	ナデ・指頭圧痕		10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1～3mm程度の砂粒を多量に含む	良	外面スス付着
23-27	A5-1	1層・2層	甕	16.5			5.6		ナデ・擬凹線(4)・ ハケ	ナデ・ケズリ		7.5YR8/6 浅黄褐色	7.5YR8/6 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス付着
23-28	B4-4	1層	甕	20.0			1.0		ナデ・擬凹線(3)	ナデ・ケズリ		7.5YR7/6 褐色	7.5YR7/6 褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	
23-29	A2-1 A2-3	2層	甕	15.7			2.1		ナデ・擬凹線(9)	ナデ・指頭圧痕・ ケズリ		10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を多量に含む	良	外面スス付着
23-30	A1-1	2層	甕	16.4			1.8		ナデ・擬凹線(8)・ ハケ	ナデ・指頭圧痕・ ケズリ		10YR8/4 浅黄褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス付着
23-31	A4-2	2層	甕	16.5			2.5		ナデ・擬凹線(8)・ ハケ	ナデ・ケズリ		10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良	外面スス付着
23-32	B4-3	2層	甕	16.2			3.0		ナデ・擬凹線(7)・ ハケ	ナデ・ハケ・ケズリ		7.5YR7/4 にぶい黄褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色	2mm以下の砂粒を少量含む	良	



棟号 番号	グリッド	出土地	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率/12		調整・施文・施釉			色調		胎土	焼成	備考
							口縁部	底部	外面	内面	底部	外面	内面			
23-33	B4-1	1 層	甕	20.0			1.0		ナデ・擬門線(8)・ハケ	ナデ・指頭圧痕・ケズリ		10YR6/3 にぶい黄橙色	2.5Y7/3 浅黄	2mm以下の砂粒を少量含む	良	
23-34	A4-2	2 層	甕	19.3			1.7		ナデ・擬門線(8)	ナデ・ケズリ		7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	外面スス付着
23-35	A5-2	2 層	甕	19.4			2.2		ナデ・擬門線(10)	ナデ・指頭圧痕・ハケ・ケズリ		5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	外面スス付着
23-36	A1-1	2 層	甕	14.2			1.4		ナデ・擬門線(5)	ナデ		10YR7/4 にぶい黄橙色	10YR8/4 浅黄褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	
23-37	B3-1	2 層	甕	33.6			5.1		ナデ・擬門線(10)・ハケ	ナデ・指頭圧痕・ハケ・ケズリ		7.5YR6/6 橙色	7.5YR7/6 褐色	1～2mm程度の砂粒を多量に含む	良	外面スス付着
23-38	A3-1	2 層	甕	10.5			12.0		ナデ・ハケ	ナデ・指頭圧痕・ケズリ		5YR7/8 褐色	7.5YR6/6 褐色 →10YR7/4 にぶい黄褐色	1～3mm程度の砂粒を中量含む	やや不良	
23-39	A1-2	2 層	甕	20.7			2.6		ナデ	ナデ・ケズリ		7.5YR7/6 褐色	7.5YR7/6 褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	
23-40	C3-1	2 層	甕	20.0			1.5		ナデ	ナデ		10YR8/4 浅黄褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良	外面に黒斑あり
23-41	A5-1	2 層	甕	22.3			1.2		ナデ	ナデ・指頭圧痕		10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1mm程度の砂粒を多量に含む	良	
23-42	A1-1	2 層	甕	16.8			9.5		ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ		10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1～2mm大の砂粒を多量に含む	良	
23-43	A5-2	1 層	甕	15.0			2.1		ナデ	ナデ		10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス付着
23-44	A4-3	2 層	甕	25.0			2.0		ナデ・摩滅	ナデ・摩滅・指頭圧痕		10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR7/3 にぶい黄褐色	3mm以下の砂粒を少量含む	良	
23-45	A4-2	1 層	甕	20.4			1.5		ナデ・摩滅	ナデ・指頭圧痕・ケズリ		7.5YR7/6 褐色	7.5YR7/6 褐色	3mm以下の砂粒を少量含む	良	
23-46	A3-2	2 層	甕	16.9			2.9		ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ		7.5YR8/6 浅黄褐色	7.5YR7/6 褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス付着
23-47	A3-1	2 層	甕	25.7	6.3	42.6	6.9	7.1	ナデ・ハケのちケズリ	ナデ・指頭圧痕・ハケのちケズリ	ナデ	7.5YR7/6 褐色	5YR7/6 褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス付着・外面に黒斑あり
23-48	A4-3	1 層	甕	23.7			1.6		ナデ	ナデ・ミガキ・ケズリ		10YR6/3 にぶい黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良	外面スス付着
24-49	A2-3	2 層	甕	14.5			7.0		ナデ・摩滅	摩滅・ケズリ		2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/2 灰白色	1～2mm程度の砂粒を多量に含む	やや不良	
24-50	A2-4	2 層	甕	15.6			4.0		ナデ・ハケ	ハケ・ケズリ・指頭圧痕		10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	1mm程度の砂粒を少量含む	良	外面スス付着
24-51	A2-3	2 層	甕	13.3			5.5		ナデ・ハケ	ナデ・指頭圧痕・ケズリ		10YR8/4 浅黄褐色	2.5Y7/3 淡黄	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	
24-52	A2-4	2 層	甕	14.5			5.8		摩滅	摩滅・ケズリ		5YR5/8 明赤褐色	5 YR5/6 明赤褐色	1～2mm程度の砂粒を多量に含む	やや不良	外面に黒斑あり
24-53	A4-1	2 層	甕	17.7			2.1		ナデ・指頭圧痕・ケズリ	ナデ・指頭圧痕・ケズリ		10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1mm以下の砂粒を中量含む	良	
24-54	A1-4	2 層	甕	16.8			4.5		ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ		10YR8/4 浅黄褐色	10YR7/6 明黄褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	
24-55	A2-4	2 層	甕	16.4			7.1		ナデ・ハケ	ナデ・指頭圧痕・ケズリ		10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を多量に含む	良	外面スス付着
24-56	A2-4	1 層・2 層	甕	17.2			7.0		ナデ・ハケ・ケズリ	ナデ・ケズリ		10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色	1mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス付着
24-57	A3-3	2 層	壺	18.0	1.7	12.7	8.5	12.0	ミガキ・摩滅	ミガキ・ナデ・指頭圧痕	ミガキ	10YR6/4 にぶい黄褐色	7.5YR6/6 褐色	1～2mm程度の砂粒を多量に含む	良	
24-58	A1-3	2 層	壺	11.9			2.2		ミガキ	ナデ・ケズリ		10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良	
24-59	A3-3 A3-4	2 層	壺	11.0			4.2		摩滅・擬門線(1)	摩滅		7.5YR8/8 黄褐色	10YR7/6 明黄褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	やや不良	
24-60	B1-1	2 層	壺	15.1			1.0		ナデ	ナデ		10YR7/4 にぶい黄褐色	7.5YR7/6 褐色	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良	
24-61	B1-1	2 層	壺	19.7			3.4		ミガキ	ミガキ		10YR7/4 にぶい黄褐色	5YR6/6 褐色	1～3mm程度の砂粒を中量含む	良	
24-62	A1-4 B1-1	2 層	壺	12・8			3.4		ハケ	ハケ		10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良	
24-63	A3-1	2 層	壺	17.8			2.0		ミガキ・摩滅	ミガキ・ナデ		10YR8/4 浅黄褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	
24-64	A4-1	2 層	壺	4.25		5.6	6.5	12.0	ミガキ・摩滅	ナデ・指頭圧痕	摩滅	2.5Y8/2 灰色	2.5Y8/2 灰色	1～2mm程度の砂粒やや多量含む	良	内外面赤彩
24-65	A1-4	2 層	壺	14.0			1.4		ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ		7.5YR8/6 浅黄褐色	7.5YR8/6 浅黄褐色	1mm以下の砂粒を多量に含む	良	
24-66	A1-4	2 層	壺	12.3			4.2		ナデ・擬門線(2)・ハケ	ナデ・ミガキ・ケズリ		7.5YR7/6 褐色	7.5YR7/6 褐色	1mm程度の砂粒を少量含む	良	
24-67	A5-1 A5-4	1 層・2 層	壺	14.5			2.8		ナデ	ナデ		7.5YR8/6 浅黄褐色	7.5YR8/6 浅黄褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	
24-68	A1-4	1 層	壺	17.0			1.1		摩滅	摩滅・ケズリ		5YR7/8 褐色	5YR6/8 褐色	1～2mm程度の砂粒を多量に含む	やや不良	
24-69	A3-3	1 層	壺						ナデ	ナデ		10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	やや不良	
24-70	A2-3	2 層	壺	26.8			1.8		摩滅・剥離	列点文・羽状刺突文・摩滅		10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	
24-71	A2-1	2 層	壺						ナデ・棒状浮文・摩滅	剥離		10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1～3mm程度の砂粒を中量含む	良	
24-72	A2-2	2 層	高坏	24.8			1.2		摩滅	摩滅		10YR8/3 浅黄褐色	10YR7/3 にぶい黄褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	
24-73	A1-3	2 層	高坏	22.7			3.7		ミガキ	摩滅		10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	外面スス付着
24-74	A3-3	2 層	高坏	26.6			0.9		摩滅・ミガキ	摩滅		7.5YR6/6 褐色	7.5YR7/6 褐色	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良	
24-75	B3-2	1 層	高坏	18.7			8.5		ナデ・ハケ	ハケ		2.5Y8/3 淡黄	10YR8/3 浅黄褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	
24-76	B1-1	2 層	高坏	6.8	9.6	7.45	4.1	10.2	摩滅	摩滅		5YR6/8 褐色	7.5YR6/8 褐色	1～2mm程度の砂粒を少量含む	やや不良	
24-77	A5-1	2 層	高坏		12.0			6.2	摩滅	ナデ		10YR 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	1mm程度の砂粒を少量含む	良	小孔(4)
25-78	B4-2 B4-3	1 層・2 層	器台						ミガキ	ミガキ		10YR7/4 にぶい黄褐色	7.5YR7/6 褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	
25-79	B4-2 B4-3	1 層・2 層	器台		14.8			1.1	ミガキ・摩滅	ナデ・しぼり		10YR7/4 にぶい黄褐色	7.5YR7/6 褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	小孔(4)
25-80	B1-1	2 層	器台	8.8			12.0		摩滅	摩滅		5YR6/6 褐色	5YR7/6 褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	
25-81	A4-4 B2-1	1 層・2 層	器台	8.5	12.6	9.9	3.9	4.1	ミガキ	ミガキ・ナデ		5YR6/6 褐色	5YR6/6 褐色	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良	小孔2孔1対(3)
25-82	A2-4	2 層	器台	8.4	14	9.5	8.8	3.5	ミガキ	ミガキ・ナデ・ケズリ・ハケ		5YR5/6 明赤褐色	5YR6/6 褐色	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良	小孔(3)・外面に黒斑あり
25-83	B4-2	2 層	装飾器台	19.4			1.5		摩滅	摩滅		7.5YR7/6 褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良	内面赤彩
25-84	B4-2	1 層	装飾器台						摩滅・ハケ	摩滅		10YR8/4 浅黄褐色	2.5Y7/3 淡黄	1mm以下の砂粒を少量含む	良	内外面赤彩
25-85	A3-4	2 層	鉢	9.8			5.1		ミガキ	ミガキ・ケズリ		5YR6/6 褐色	5YR6/6 褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	
25-86	A3-3	2 層	鉢	15.7			7.0		ミガキ	ミガキ	ミガキ	5YR5/8 明赤褐色	2.5YR5/8 明赤褐色	1～3mm程度の砂粒を少量含む	良	
25-87	A1-3	2 層	鉢	15.6			3.1		ナデ・ハケ	ハケ		10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良	
25-88	B5-1	1 層	鉢		1.9			12.0	ケズリ	ケズリ	ケズリ	10YR8/4 浅黄褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色	1mm程度の砂粒を中量含む	良	
25-89	C2-1	2 層	槽形土器						ナデ	ナデ	ナデ	10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	
25-90	A2-1	2 層	蓋						摩滅	摩滅		10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	小孔2孔1対? (残存1)・外面赤彩

挿図 番号	グリッド	出土地	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率/12		調整・施文・施軸			色調		胎土	焼成	備考
							口縁部	底部	外面	内面	底部	外面	内面			
25-91	B5-1	1層	蓋	10.7		2.7	9.5		ナデ	ナデ・ハケ		5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	
25-92	A2-2	2層	底部		4.7			12.0	ナデ	ナデ	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	7.5YR7/6 橙色	1～2mm程度の砂粒を多量に含む	良	外面スス付着・ 内面に粉圧痕
25-93	A2-1	1層	脚台		5.8			9.0	ナデ	ナデ・摩減		2.5Y8/3 淡黄褐色	2.5Y8/3 淡黄褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	
25-94	A5-1	2層	脚台		8.5			12.0	摩減	摩減		7.5YR7/8 黄褐色	7.5YR7/6 橙色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	やや不良	
25-95	B4-1 B3-2	2層	小型土器		2.2			12.0	ナデ	ナデ	ナデ	10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	1mm程度の砂粒を多量に含む	良	外面スス付着・ 外面に黒斑あり
25-96	B2-1	1層	小型土器	3.9		3.6	1.0	3.0	ナデ	指頭圧痕		7.5YR7/6 橙色	10YR8/4 浅黄褐色	1mm程度の砂粒を少量含む	良	
25-97	A2-1	1層	小型土器	4.3	1.4	4.05	3.0	12.0	ナデ	ナデ・指頭圧痕	ナデ	2.5Y6/2 灰黄褐色	2.5Y7/2 灰黄褐色	1mm程度の砂粒を少量含む	良	
26-98	A2-4	2層	甕	18.2			1.5		ナデ・タタキ	ナデ・ケズリ		10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	外面スス付着
31-1	県道 地区	SI1	壺						摩減	ナデ・摩減		10YR8/6 黄褐色	10YR8/6 黄褐色	1～2mm程度の砂粒を多量に含む	やや不良	
31-7	県道 地区	SP35	高坏		12.2			1.3	摩減	摩減・しぼり・ナデ		7.5YR7/6 橙色	10YR7/6 明黄褐色	1mm程度の砂粒を中量含む	良	
31-9	県道 地区	SP42	甕	14.0			1.5		ナデ・ハケ	ナデ・ハケ・指頭 圧痕・ケズリ		10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1～3mm程度の砂粒を少量含む	良	外面スス付着
31-10	県道 地区	SP52	甕	17.0			2.4		摩減	摩減		10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR8/6 黄褐色	1～3mm程度の砂粒を多量に含む	良	外面スス付着
32-1	県道 地区	遺構面直上	甕	24.1			1.8		刻み・条痕	指頭圧痕・ハケ		10YR8/3 浅黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良	外面スス付着
32-2	県道 地区	包含層	壺	15.3			2.0		摩減	摩減		10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	小孔(1)
32-3	県道 地区	土器集中区	甕	16.7			1.2		ナデ・ハケ	ナデ・指頭圧痕・ ケズリ		10YR7/4 にぶい黄褐色	7.5YR8/4 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を多量に含む	良	外面スス付着
32-4	県道 地区	土器集中区	高坏	18.3			7.3		ナデ	ナデ		2.5Y8/3 淡黄褐色	10YR8/3 浅黄褐色	1mm程度の砂粒を少量含む	良	
32-5	県道 地区	土器集中区	高坏	15.5	12.3	12.35	1.3	5.3	摩減	摩減・ナデ		10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1～2mm程度の砂粒を多量に含む	やや不良	
32-6	県道 地区	包含層	甕		8.6			12.0	摩減・ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/6 橙色	2mm以下の砂粒を中量含む	良	

第4表 須恵器観察表

挿図 番号	グリッド	出土地	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率/12		調整・施文・施軸			色調		胎土	焼成	備考
							口縁部	底部	外面	内面	底部	外面	内面			
26-99	A4-1	1層・2層	高坏						回転ナデ	回転ナデ		5Y6/1 灰色	5Y7/1 灰白色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	
26-100	A3-2	表土	甕	41.2			1.7		回転ナデ・回転ナデ のちナデ・波状文 当て具痕	回転ナデ・同心円 文当て具痕		5Y5/1 灰色	5Y5/1 灰色	1mm以下の砂粒やや多量含む	良	
26-101	A3-1	2層	坏	10.9	7.8	4.3	0.4	5.2	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切りのち ナデ	N6/ 灰色	7.5Y6/1 灰色	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良	
31-2	県道 地区	SP26	坏	13.4	7.2	3.8	6.7	12.0	回転ナデ(摩減)	回転ナデ(摩減)	回転ヘラ切りのち ナデ(摩減)	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	2mm以下の砂粒を少量含む	やや不良	
31-3	県道 地区	SP26	坏	13.9	8.1	2.9	4.2	5.9	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り・ス ノコ状圧痕	7.5Y7/1 灰白色	7.5Y7/1 灰白色	1mm以下の砂粒を少量含む	やや不良	
31-5	県道 地区	SP34	坏	15.2			1.9		回転ナデ	回転ナデ		7.5Y7/1 灰白色	7.5Y7/1 灰白色	1mm程度の砂粒を中量含む	良	
31-6	県道 地区	SP34	坏		11.6			2.0	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切りのち ナデ	N5/ 灰色	N6/ 灰色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	
31-8	県道 地区	SP35	坏		12.0			2.5	回転ナデ	回転ナデ・回転ナデ のちナデ	回転ヘラ切り	N6/ 灰色	N6/ 灰色	2mm以下の砂粒を少量含む	良	
31-11	県道 地区	SD1	蓋	25.5			1.0		回転ナデ	回転ナデ・回転ナデ のちナデ		5Y6/1 灰色	N6/ 灰色	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良	
31-13	県道 地区	SP31	蓋	12.0			0.1		継貼付のちナデ・ 回転ヘラケズリ・ 回転ナデ	回転ナデ		2.5Y6/1 黄灰褐色	2.5Y6/1 黄灰褐色	1～2mm程度の砂粒を少量含む	良	
31-14	農道 1区	SP55	皿	14.6	10.4	2.0	1.6	2.3	回転ナデ	回転ナデ・回転ナデ のちナデ	回転ヘラ切りのち ナデ	5Y7/1 灰白色	5Y7/1 灰白色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	
32-7	県道 地区	包含層	坏蓋	12.2		3.8	10.3		回転ナデ・回転ヘラ 切りのちナデ	回転ナデ		N6/ 灰色	N6/ 灰色	2mm以下の砂粒を少量含む	良	
32-8	県道 地区	包含層	蓋	8.1		2.9	3.1		継貼付のちナデ・ 回転ヘラケズリ・ 回転ナデ	回転ナデ		N4/ 灰色	N6/ 灰色	1～2mm程度の砂粒を中量含む	良	
32-9	県道 地区	包含層	横瓶		底部側面 7.7			12.0	ナデ・回転ナデ・ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	底部側面：回転ヘ ラ切りのちナデ	N5/ 灰色	N5/ 灰色	2mm以下の砂粒を少量含む	良	

第5表 土師質土器観察表

挿図 番号	グリッド	出土地	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率/12		調整・施文・施軸			色調		胎土	焼成	備考
							口縁部	底部	外面	内面	底部	外面	内面			
18-2	B4-3	SB5 SP210	皿	8.7	7.0	1.8	10.0	12.0	ナデ	ナデ	ナデ	7.5YR6/6 橙色	5YR7/6 橙色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	
18-3	C4-1	SB5 SP230	皿	9.6				1.2	ナデ	ナデ		2.5Y8/3 淡黄褐色	2.5Y8/3 淡黄褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	
18-4	C4-1	SB5 SP231	皿	7.9	6.1	0.95	2.9	2.6	ナデ	ナデ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	
26-102	B3-1	1層	皿	9.1	7.4	1.55	7.0		ナデ	ナデ	ナデ	10YR7/3 にぶい黄褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	
26-103	B3-1	2層	皿	8.7	7.2	1.55	12.0	12.0	ナデ	ナデ・指頭圧痕	ナデ・指頭圧痕	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	
26-104	B3-1	2層	皿	8.7	7.6	1.4	10.8	12.0	ナデ	ナデ	ナデ	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	1mm以下の砂粒微量含む	良	
31-12	農道 地区	SP2	皿	11.1	7.35	2.95	7.0		ナデ	ナデ	ナデ	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	1mm以下の砂粒を少量含む	良	

第6表 陶磁器観察表

挿図 番号	グリッド	出土地	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率/12		調整・施文・施軸			色調		胎土	焼成	備考
							口縁部	底部	外面	内面	底部	外面	内面			
26-105	B7-2	1層	白磁・皿	11.0				1.6	口縁部のみ施軸	施軸		5Y8/1 灰白色	5Y8/2 灰白色	堅緻	良	
26-106	C1-1	2層	白磁・碗?						施軸	施軸		5Y7/1 灰白色	5Y7/1 灰白色	堅緻	良	
26-107	A1-2 B2-1	1層・2層	青磁・碗						施軸・鋤蓮弁文	施軸		7.5Y5/2 灰オリーブ	7.5Y5/2 灰オリーブ	堅緻	良	
26-108	B1-1	2層	青磁・碗						施軸・直線文	施軸・沈線		5Y6/3 オリーブ黄	5Y6/3 オリーブ黄	堅緻	良	
26-109	B2-1	1層	肥前系磁器・紅皿	4.4				2.2	口縁部のみ施軸	施軸		5Y8/1 灰白色	N8/ 灰白色	堅緻	良	
32-10	県道 地区	包含層	越前焼・擂鉢		16.0			3.0	回転ナデ	回転ナデ・楕目 (3.2cm幅に13本)	ナデ	5YR6/4 にぶい橙色	5YR6/3 にぶい黄褐色	2mm以下の砂粒を少量含む	良	外面に縄目痕あり

第7表 石器・石製品観察表

挿図 番号	グリッド	出土地	器種	遺存	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	石材	分類・形状	備考
11-42	B1	SI2 1層	打製石斧	完形	15.0	8.0	3.8	514.0	ひん岩～閃緑岩	1類	片面に自然面残す 剥片素材
11-43	B1-4	SI2	打製石斧	完形	18.5	8.3	3.8	638.9	安山岩	1類	両面に自然面残す 礫素材
11-44	B1-4	SI2 P.9	敲石	約1/2欠	(11.2)	(6.7)	(5.3)	(583.8)	砂岩		平面略円形 正面・側面に敲打痕
11-45	B1-4	SI2	敲石	完形	8.2	3.0	2.9	104.0	砂岩	棒状	端部・側面に敲打痕
13-13	A2-3	SI3	磨石	完形	16.6	8.6	6.2	1096.3	安山岩	歪な楕円形	端部に磨痕 赤化(被熱?)
20-11	A4-2	SP148	磨石	完形	8.9	7.8	6.0	561.1	凝灰角礫岩	球状	正裏面に磨痕
27-110	C4-1	1層	打製石斧	完形	22.1	7.0	3.2	542.1	安山岩	1類	風化顕著
27-111	A2-2	2層	打製石斧	完形	26.6	9.9	3.9	898.9	デイサイト	1類	剥片素材
27-112	C4-1	2層	打製石斧	基端部欠	(11.5)	5.2	1.8	(99.0)	砂岩	1類	片面に自然面残す 剥片素材
27-113	A4-3	1層	打製石斧	完形	11.8	6.4	3.1	304.0	閃緑岩	1類	両面に自然面残す 礫素材
27-114	A5-2	2層	打製石斧	完形	10.1	5.8	2.8	212.3	ひん岩	1類	両面に自然面残す 礫素材
27-115	B4-2	2層	打製石斧	完形	13.3	6.5	2.4	192.4	デイサイト	2類 a 種	片面に自然面残す 剥片素材
27-116	A3-3	2層	打製石斧	完形	11.7	6.3	2.5	217.9	安山岩	2類 a 種	両面に自然面残す 礫素材
27-117	A3-2	表土	打製石斧	完形	14.9	7.6	3.0	431.3	安山岩	2類 a 種	片面に自然面残す 全面摩耗
27-118	B4-4	1層	打製石斧	完形	13.9	8.5	2.9	406.2	安山岩	2類 b 種	両面に自然面残す 石皿転用
27-119	C4-2	1層	打製石斧	完形	15.6	9.2	3.1	492.0	ひん岩	2類 b 種	片面に自然面残す
28-120	A1-2	2層	打製石斧	完形	20.4	12.7	4.4	1148.9	安山岩	2類 b 種	片面に自然面残す 剥片素材?
28-121	A3-1	2層	打製石斧	完形	17.6	10.4	3.2	606.9	安山岩	2類 b 種	片面に自然面残す 剥片素材
28-122	B5-2	1層	打製石斧	完形	13.6	9.4	2.9	371.0	安山岩	2類 c 種	片面に自然面残す
28-123	C5-1	1層	打製石斧	基端部欠	(12.9)	9.4	2.4	(315.4)	花崗閃緑岩	2類 c 種	片面に自然面残す 剥片素材
28-124	A5-2	2層	打製石斧	完形	10.2	5.7	2.6	141.9	砂岩	2類 b 種	片面に自然面残す 全面摩耗
28-125	A3-2	1層	磨石	完形	4.7	4.4	4.4	132.7	黒色泥岩	球状	全面に磨痕 先行する敲打痕あり
28-126	A3-1	2層	敲石	完形	8.1	7.0	5.6	386.7	砂岩	球状	端部・側面に敲打痕
28-127	A1-2	2層	砥石	完形	9.2	3.3	3.4	176.3	流紋岩	角柱状	砥面6面
	B1-4	SI2 P.9	敲石	端部片	(6.5)	(5.2)	(2.6)	(91.7)	安山岩	扁平棒状	端部敲打痕
	A2-2	2層	打製石斧	基部欠	(13.3)	9.8	(2.4)	(350.0)	安山岩	2類 b 種	片面に自然面残す
	A2-2	2層	打製石斧	刃部	(8.7)	(10.6)	(3.2)	(285.4)	安山岩		両面に自然面残す
	A3-1	表土	打製石斧	基部欠	(9.1)	(6.5)	(3.5)	(233.8)	凝灰岩	1類	両面に自然面残す
	A3-1	2層	打製石斧	基部	(8.5)	(6.6)	(2.6)	(212.2)	安山岩		片面に自然面残す
	A4-3	2層	打製石斧	刃部	(6.9)	(6.2)	(1.7)	(83.9)	デイサイト		摩耗顕著 刃縁に直交する線状痕
	A5-2	2層	打製石斧	基部	(8.7)	(6.8)	(2.5)	(154.5)	安山岩	2類 b 種	
	A5-2	2層	打製石斧	基部	(7.5)	(7.9)	(1.8)	(112.1)	閃緑岩		
	B1-1	1層	打製石斧	基部	(5.6)	(5.5)	(1.1)	(41.2)	凝灰岩		
	B1-1	2層	打製石斧	基部欠	(9.7)	(8.1)	(3.2)	(271.9)	安山岩	2類	片面に自然面残す
	B1-2	1層	打製石斧	基部	(7.7)	(8.3)	(1.8)	(125.1)	安山岩	2類	基部側端突出
	B1-2	1層	打製石斧	基部	(5.0)	(5.0)	(1.0)	(31.2)	デイサイト		両面に自然面残す
	B1-2	2層	打製石斧	基部	(9.0)	(4.9)	(1.8)	(109.2)	デイサイト	1類	片面に自然面残す
	B1-2	2層	打製石斧	基部	(4.8)	(6.4)	(1.7)	(64.4)	デイサイト		両面に自然(節理)面残す
	B2-3	1層	打製石斧	基部	(6.6)	(6.8)	(2.3)	(157.0)	ひん岩		片面に自然面残す
	B2-3	1層	打製石斧	基部	(8.3)	(6.4)	(3.3)	(218.4)	安山岩		片面に自然面残す
	B2-4	2層	打製石斧	刃部	(8.4)	(10.2)	(2.0)	(219.0)	ひん岩	2類	片面に自然面残す
	B4-1	1層	打製石斧	刃部	(9.9)	(11.0)	(2.7)	(316.5)	ひん岩	2類	片面に自然面残す
	B4-2	2層	打製石斧	刃部	(7.7)	(8.4)	(2.0)	(160.7)	デイサイト		片面に自然面残す 刃縁摩耗
	B4-3	2層	打製石斧?	基部	(10.0)	(6.1)	(3.0)	(256.8)	珪岩		片面に自然面残す 断面カマボコ状
	B4-4	1層	打製石斧	基部欠	(12.1)	9.1	3.5	(412.4)	砂岩	2類 a 種	両面に自然面残す 礫素材
	C2-1	2層	打製石斧	基部	(8.9)	(6.1)	(2.6)	(189.3)	ひん岩		片面に自然面残す
	C3-1	2層	打製石斧	刃部	(10.1)	(10.2)	(2.0)	(171.9)	安山岩	2類	片面に自然面・片面に節理面残す
	C3-1	2層	打製石斧	基部	(7.4)	(5.6)	(1.8)	(75.4)	片岩		
	C4-2	1層	打製石斧	基部	(7.7)	(6.7)	(2.0)	(150.2)	花崗閃緑岩		片面に自然面残す 石皿を転用?
	C5-1	2層	打製石斧	基部欠	(8.9)	6.6	1.9	(113.8)	デイサイト	2類 b 種	片面に自然面残す 剥片素材
	東拉張区	SP225	打製石斧	基部	(7.5)	(7.4)	(1.7)	(125.2)	デイサイト		片面に自然面残す
	県道地区	表土	打製石斧	基部	(4.4)	(5.5)	(1.7)	(43.2)	デイサイト		両面に自然(節理)面残す
	B1-2	1層	石製品	破片	(2.2)	(1.6)	(0.5)	(4.0)	黒色泥岩		硯?
	B2-1	1層	石核	完形	2.5	2.5	0.9	6.8	チャート		板状

第8表 金属器観察表

挿図番号	グリッド	出土地	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
11-46	B1	SI2	鉈(身部)	(9.4)	1.3	0.7	11.2	裏側に木質が残存する
20-3	A1-1	SK3	不明	2.4	1.9	0.8	3.5	
29-128	A1-2	2層	鉈	(5.8)	1.2	0.6	5.7	
29-129	A4-1	2層	鉈(身部)	(6.9)	上端0.7 下端0.5	0.3	3.3	
29-130	A2-4	2層	長頸鉈	(3.1)	1.7	0.7	4.1	
29-131	C3-1	2層	鉈	(3.5)		0.6	4.2	鉈茎
29-132	C1-1	2層	鉈(身部)	(5.9)		0.5	5.0	
29-133	A2-2	2層	鉈	7.1	3.1	0.5	14.3	
29-134	A2-2	2層	小札	(2.5)	1.4	0.2	1.7	表中央付近に剥離痕あり
29-135	A3-3	2層	身部	(4.3)	1.1	0.3	3.8	長い破片→長さ(3.8)cm、厚さ0.3cm、幅1.1cm 短い破片→長さ(1.7)cm、厚さ0.3cm、幅0.9cm
31-4	県道地区	SP26	不明	37.8	1.3	1.2	211.6	

## 第5章 まとめ

### 1 竪穴住居について

上舌遺跡で検出した竪穴住居3棟は、すべて主柱穴4本が中央部に配置される形態とみられる。各竪穴住居の円方度<sup>①</sup>は、S I 1が40、S I 2が65、S I 3が58であり、数字が大きいS I 2の平面形が最も方形に近くなっている。各竪穴住居の規模は、S I 1が長軸7.4m前後で床面積55㎡程度、S I 2が長軸6.2mで床面積約38㎡、S I 3が長軸4.8mで床面積約20㎡である。筆者は北陸の弥生時代後期から古墳時代にかけての竪穴住居は、その規模と床面積から、L L（長軸12m以上で床面積90㎡以上）、L（長軸9m以上12m未満で床面積50㎡以上90㎡未満）、M（長軸5m以上9m未満で床面積15㎡以上70㎡未満）、S（長軸2m以上5.5m未満で床面積20㎡未満）の4群に分類できると考えており、これに従えば、S I 1とS I 2がM群、S I 3がS群に分けられる。

各竪穴住居は、出土遺物からS I 1が弥生時代後期末～古墳時代初頭、S I 2が古墳時代前期前葉、S I 3が古墳時代初頭に位置づけられると考えられ、構築順に並べると、S I 1、S I 3、S I 2となる。S I 1は床面積55㎡程度で円方度40、S I 3は床面積20㎡で円方度58、S I 2は床面積38㎡で円方度65であることから、従来から指摘されている通り、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけて住居の方形化と床面積の縮小が進むという傾向と概ね符合していると言える。

次に、竪穴住居の内部施設についてみていきたい。

いずれの竪穴住居でも被熱硬化面は、確認されていない。S I 2では、SK 1の中央にあるピットに台に適した石があり、付近では炭化物も検出しているが、炭化物の量があまり多くないため炉とするには逡巡する。北陸では、当該期の炉をもつ竪穴住居は5割以下であるという状況があり、当遺跡でも屋外や特定の竪穴住居に火処が存在した可能性が推測できる。

2段掘りの土坑とみられるのは、S I 1のSK 2と、S I 2のSK 1であり、その存在はM群の竪穴住居に限られている。S I 1では北西辺の主柱穴間、S I 2では東壁際に設けられており、2段掘りの土坑が中央→主柱穴間→壁際と移動していく事象が当遺跡でもみられる。また、今回確認した竪穴住居で玉作りを行っていた可能性はほとんどなく、2段掘りの土坑から出土したのは土器のみであった。これは、2段掘りの土坑は北陸地域の玉作り遺跡に限定されるものではないとの指摘を裏付けるものであると言えよう。

壁溝は、M群であるS I 1とS I 2では確認したが、S群のS I 3では確認していない。当該期のS群に属する竪穴住居は壁溝を伴わない傾向があり、こうした壁溝の有無と竪穴住居の規模が関連する現象が当遺跡でも当てはまっている。壁溝は一部途切れる箇所もあるが、ほぼ全周するとみられ、壁溝内には壁留材を支えた杭穴と考えられる小ピットがほぼ等間隔に巡っている。

溝状遺構と貼り床については確認されなかった。また、改築の痕跡もみられなかった。

最後に掘立柱建物との関係について考えておきたい。南半部で確認した掘立柱建物4棟については、SB 3を除き、柱穴からは建物の時期を特定できるような遺物がほとんど出土していない。しかしながら、掘立柱建物周囲の包含層の出土遺物が弥生時代後期末～古墳時代前期の土器で占められていることから、掘立柱建物も竪穴住居に近似する時期の所産と想定される。SB 3はS I 1からは5m程度しか離れておらず、S I 1の1/5程度の規模しかない。出土遺物から両者はほぼ同時期に存在したとみられるため、S I 1とSB 3には何らかの関係があったと認められよう。また、SB 3と同様に、いずれ



の掘立柱建物も竪穴住居より小型で、竪穴住居からあまり離れずに存在している。こうしたことから考えれば、組み合わせは特定できないものの、これらの掘立柱建物は竪穴住居と関連をもって機能していた可能性が高いと推測される。

## 2 上舌遺跡について

以上の発掘調査の成果のように、上舌遺跡は、弥生時代後期末から古墳時代前期までの建物群を伴う集落遺跡であることが判明した。また、縄文時代や古代、中世の遺構や遺物についてもその存在が明らかになった。これらの調査成果から周辺の遺跡との関連にも言及することによって、上舌遺跡の調査のまとめをしたい。

まず、上舌遺跡の主たる集落の時期が、弥生時代後期末から古墳時代前期と判明したことが、今回の調査の主たる成果である。工事立会の成果も考慮すると、この集落域は遺跡地図記載の上舌遺跡の遺跡範囲の通り、南側に広がっていることが十分予測される。しかし、今回の調査範囲においては、竪穴住居や掘立柱建物などの遺構が検出されたものの、墓に関する遺構は検出できなかった。十分な面積が調査されたわけでは無く、調査されていない範囲において今後確認される可能性もある。

しかしながら、発掘調査中、現地において目の前に存在する御城山古墳群の存在は無視できないものがあつた。御城山古墳群については発掘調査が行われていないが、墳丘墓や方墳を主体とする古墳群であることが想定されている。つまり、弥生時代後期末から古墳時代の墳墓群と考えられる。その時期は、おおよそ上舌遺跡の主たる集落展開の時期と合致するものであることは想像に難くない。今後両遺跡の調査が行われれば、この関係性の検証が進むものと思われる。

古代の遺構は、本調査区においてはSD1のみがおおよそ律令期の溝であることは疑いないが、工事立会範囲では多くの隅丸方形の柱穴などの遺構や当該時期の遺物が確認できた。今回の調査地点より南西に古代の集落関連の遺構が集中しているものと思われる。狭小な幅の調査であるため、建物の復元にはいたらなかったが、遺跡が良好に残存していることは疑いない。現在の大野市では、横枕遺跡や小矢戸・太田遺跡など律令期の調査事例が増加しているが、上舌遺跡も古代の大野郡大山郷の範囲に含まれているものと推定され、こちらについても今後検討すべき課題である。

今回の発掘調査や工事立会を通じて確認できたことは、遺跡範囲内ではどの地点においても、遺構や遺物が良好に残存していることである。今後開発行為が行われる際には、十分かつ慎重な対応が求められる。本報告が、今後の大野市南部域の研究に寄与することを期待したい。

### 註

1 円方度の算出方法は下記文献に依拠する。

比田井克仁 1991 「住居形態の変遷とその画期」『古代探叢Ⅲ』 早稲田大学考古学会

### 参考文献

田嶋明人 1986 「考察―漆町遺跡出土土器の編年的考察―」『漆町遺跡Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター

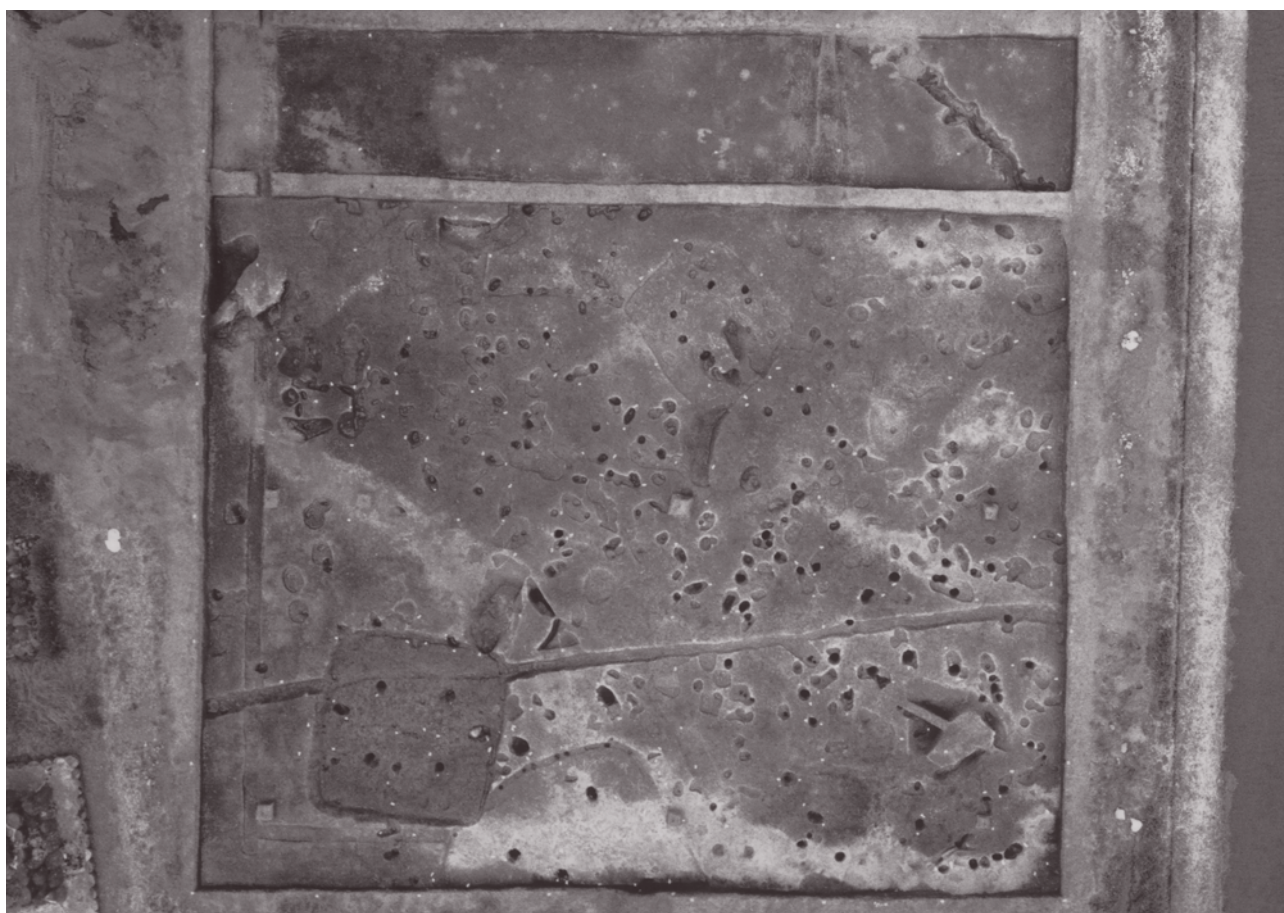
田辺昭三 1966 『陶器古窯址群Ⅰ』 平安学園考古学クラブ

田中実・吉田淳・宮本哲郎・楠正勝 1983 「北陸の弥生・古墳時代の竪穴住居址―弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居址を中心として―」『北陸の考古学』 石川県考古学研究会

# 写 真 图 版



(1) 調査区北半部全景 (俯瞰)



(2) 調査区南半部全景 (俯瞰)





(1) 調査区北半部全景 (北方より)



(2) 調査区南半部全景 (北方より)





(1) 東拡張区全景 (西方より)



(2) 西拡張区全景 (東方より)



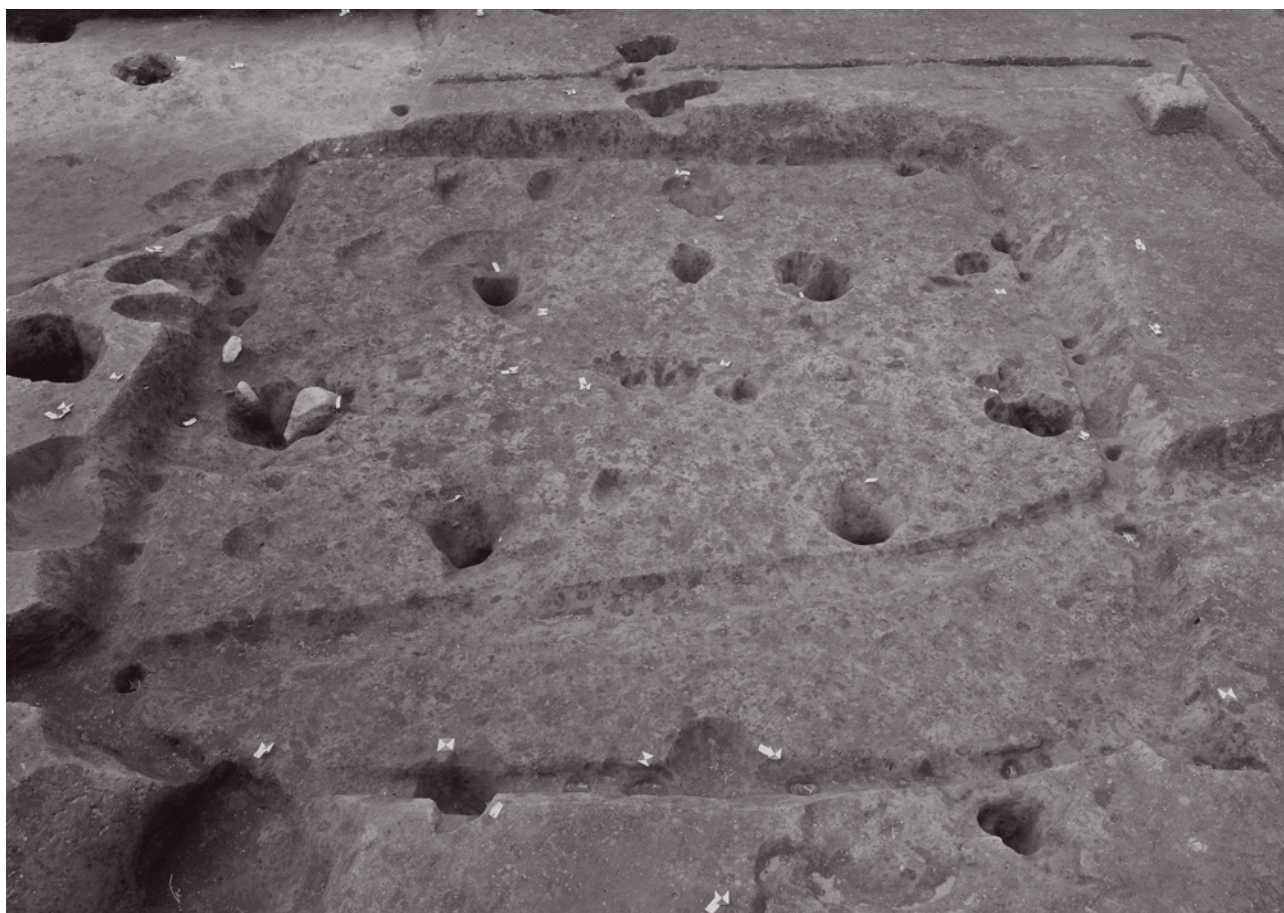


(1) S I 1 (北西方より)



(2) S I 1 遺物出土状況 (東方より)





(1) S I 2 (北方より)

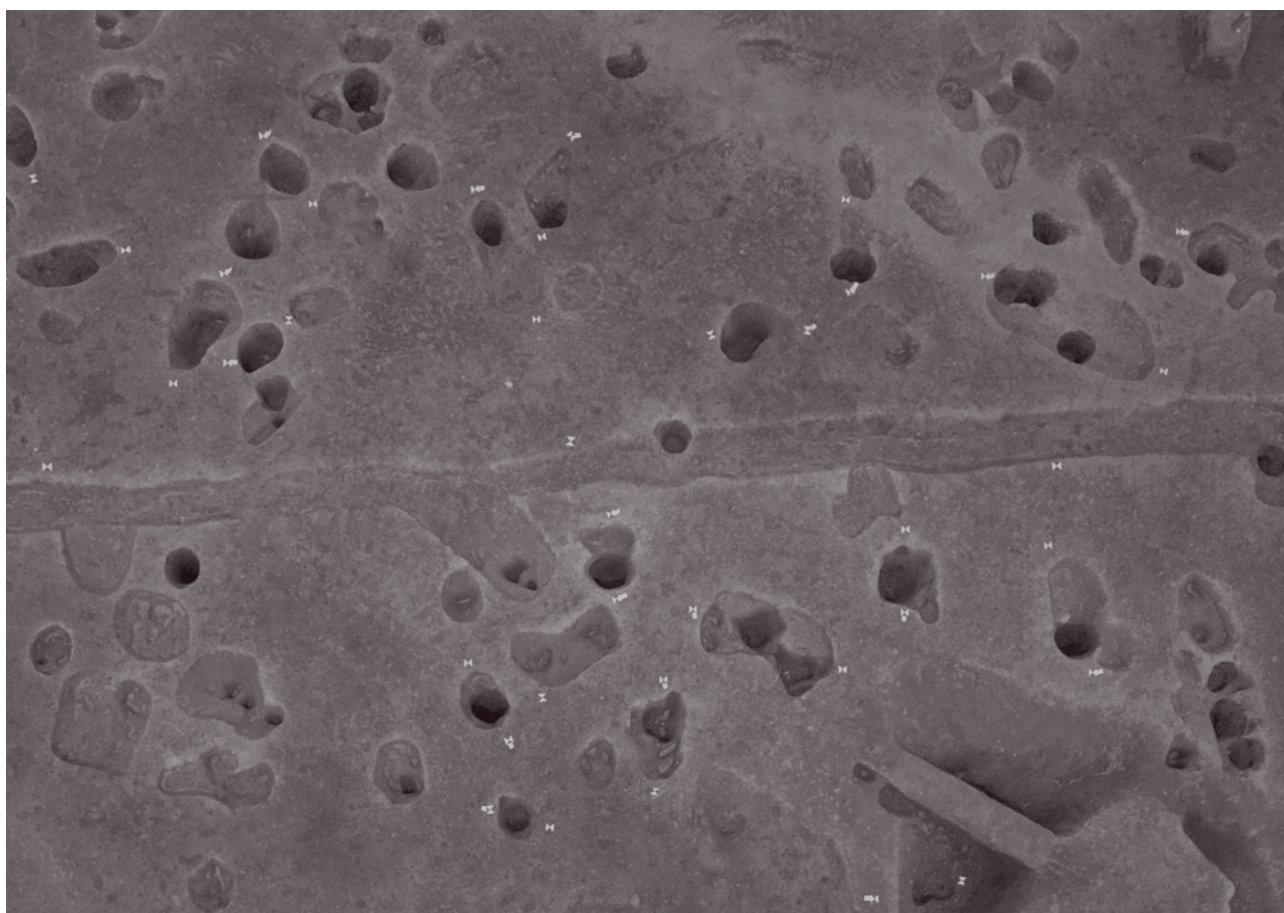


(2) S I 2 遺物出土状況 (北方より)



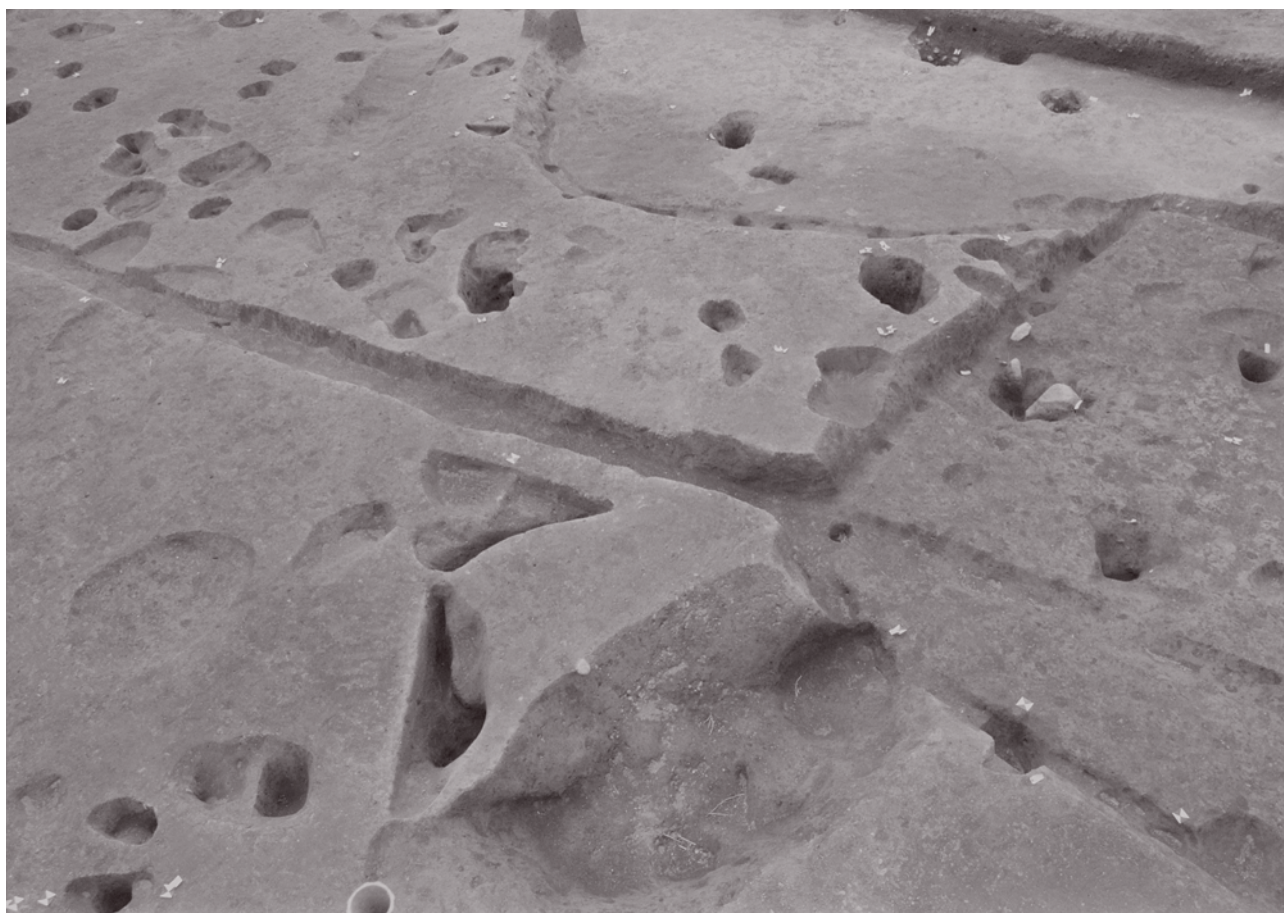


(1) S I 3 (南東方より)



(2) SB 1<右>・SB 2<左> (俯瞰)





(1) SB4 (北西方より)



(2) SB5 (北方より)





(1) S P 24遺物出土状況（西方より）



(2) S K 6半截状況（南東方より）





6-6



6-11



9-1



6-12



9-5



9-3



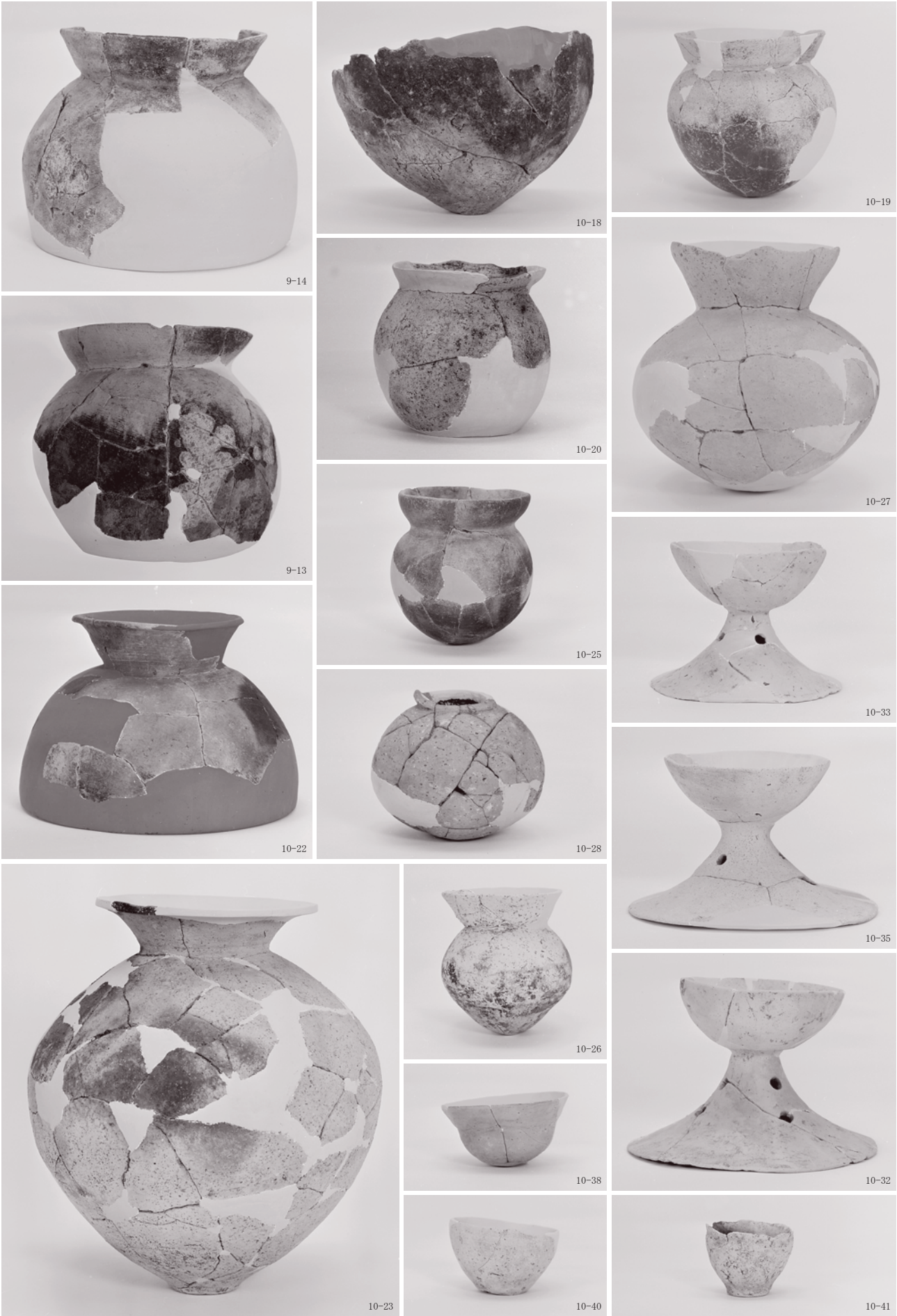
9-9



9-11

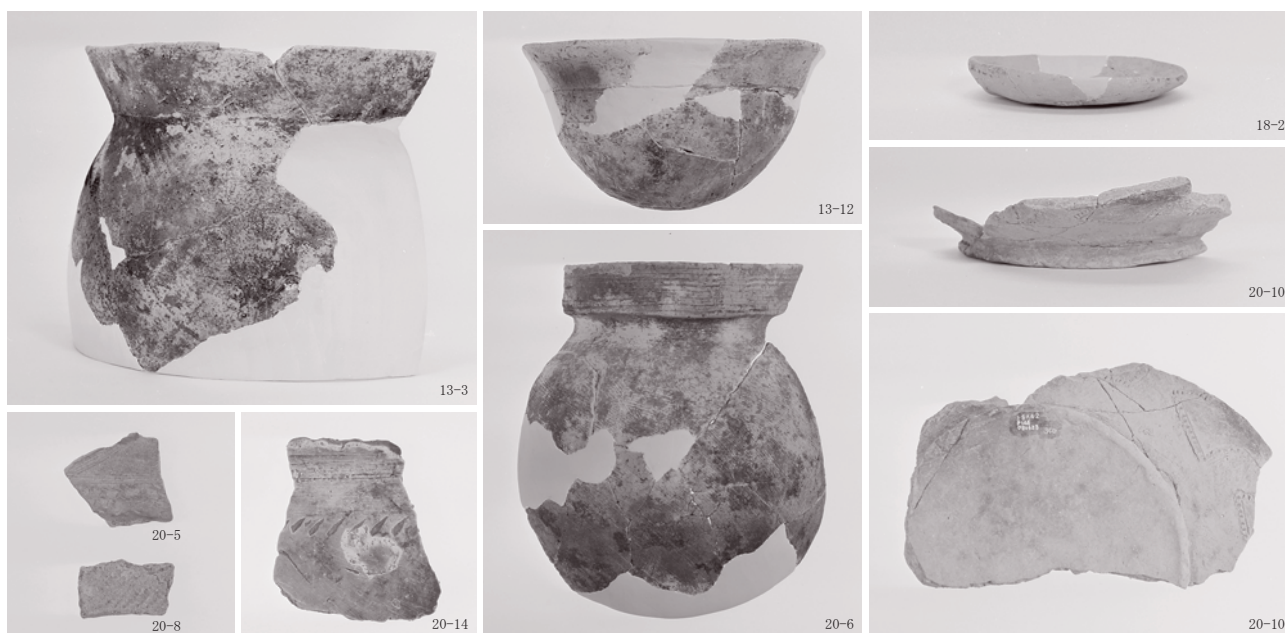


9-10

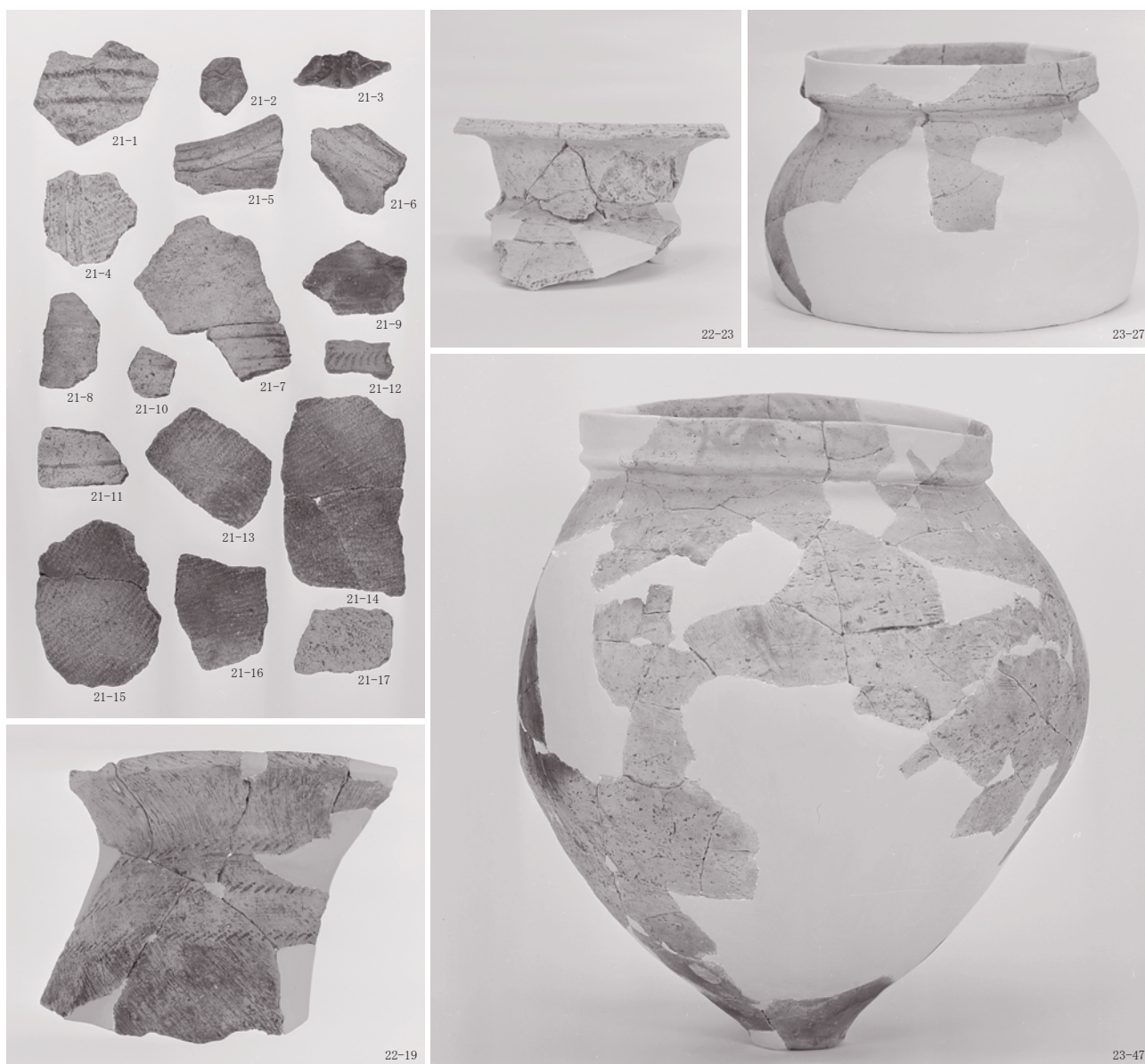


遺構出土土器





(1) 遺構出土土器



(2) 包含層出土土器



23-38



23-42



24-49



24-66



24-76



25-94



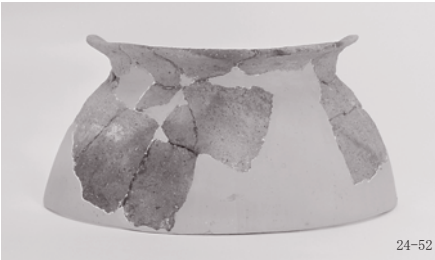
25-91



25-85



25-95



24-52



24-55



24-64



24-69



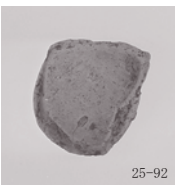
24-75



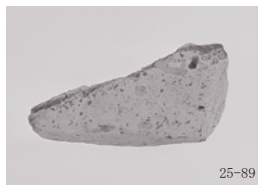
24-77



25-86



25-92



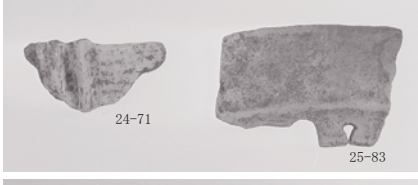
25-89



24-56



24-57



24-71

25-83



25-81



25-82



26-102



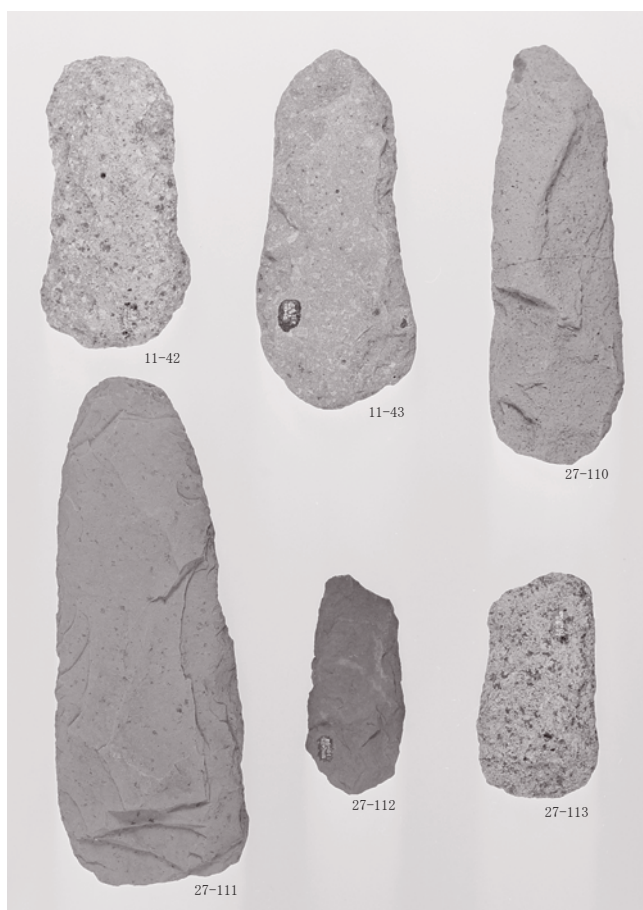
26-103



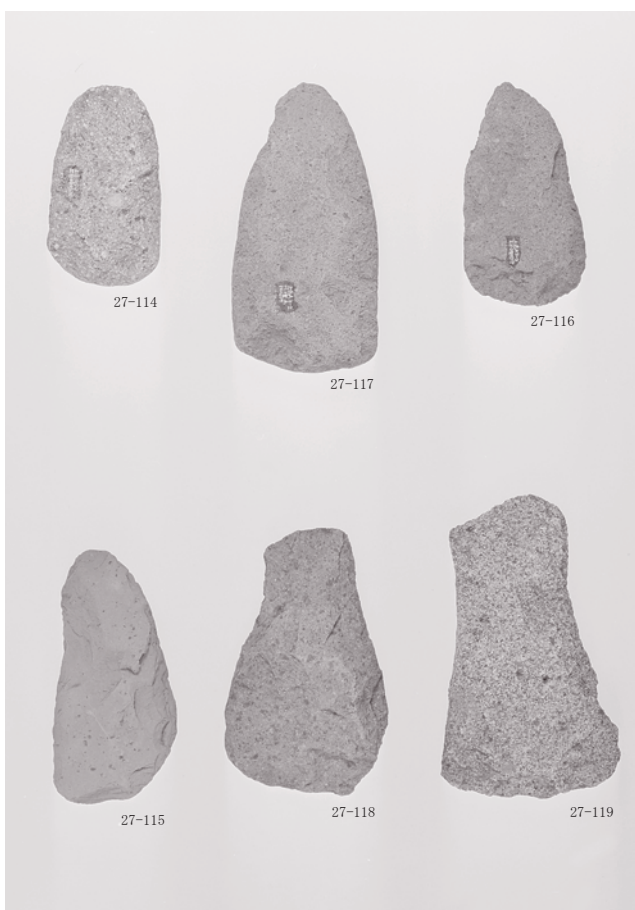
26-104

包含層出土土器

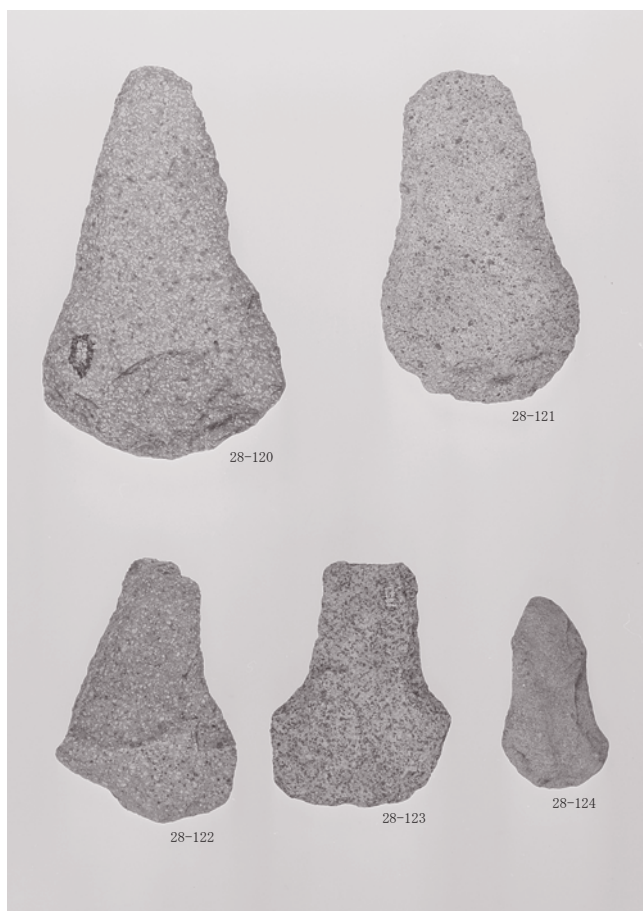




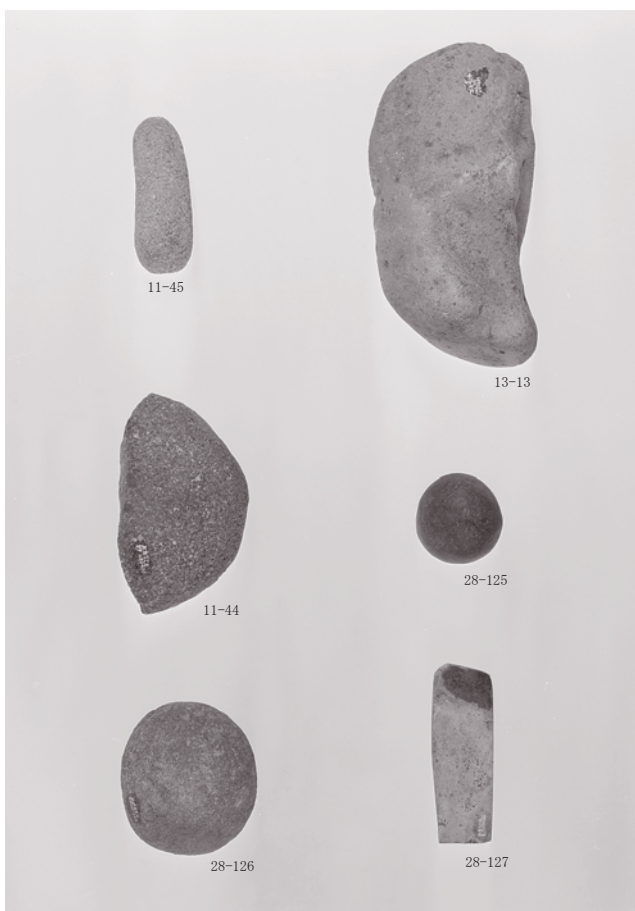
(1) 打製石斧



(2) 打製石斧



(3) 打製石斧



(4) その他の石器



(1) 金属器



(2) 立会地区出土土器



## 報 告 書 抄 録

ふ り が な	かみしたいせき							
書 名	上舌遺跡							
副 書 名	県営経営体育成基盤整備事業(圃場)下舌・上黒谷 2 期地区に伴う調査							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	福井県埋蔵文化財調査報告							
シ リ ー ズ 番 号	第131集							
編 著 者 名	坪田聡子(編) 宮崎認 田中祐二							
編 集 機 関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所 在 地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町 4 -10 TEL 0776-41-3644 FAX 0776-41-2494							
発 行 年 月 日	西暦2012年 3 月 5 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
かみしたいせき 上舌遺跡	ふくいけんおおのし 福井県大野市 しもした 下舌	18205	05079	35° 57′ 8″	136° 29′ 25″	20071101 ～ 20080630	1,440	記録保存調査
遺跡名	種 別	主 な 時 代		主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項	
上舌遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代 中世		竪穴住居 3 掘立柱建物 5 柱穴 溝	弥生土器 土師器 須恵器 越前焼 磁器 土師質皿 石器・石製品 金属器			
要 約	上舌遺跡は、清滝川と赤根川が形成した扇状地の先端に位置する集落遺跡である。今回の発掘調査では、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての竪穴住居 3 棟や、掘立柱建物 4 棟を確認した。また、規模が比較的大きい中世の総柱建物 1 棟も検出した。これらの遺構や遺物は、当該期の集落遺跡の調査例が少ない大野市域において、地域の歴史を考える上で貴重な資料であると言える。							

---

福井県埋蔵文化財調査報告 第131集

## 上 舌 遺 跡

— 県営経営体育成基盤整備事業（圃場）下舌・上黒谷2期地区に伴う調査 —

平成24年2月24日 印刷

平成24年3月5日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒910-2152 福井市安波賀町4-10

印刷 白崎印刷株式会社

〒910-0843 福井市西開発3-715

---